
荷葉の路

鎌木恵梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荷葉の路

【Zコード】

N4281C

【作者名】

鎌木恵梨

【あらすじ】

平城京を満月が照らす夜、前の右大臣の姫・中将内侍は刺客の襲撃を受ける。だがその刺客は姫に「逃げよ」と誘いかけた。迷れゆく一人をさえぎる、継母の怨念、神仏たちをめぐる思惑。奈良時代末の伝説を下敷きにした、身分違いの恋愛伝奇。

第一話 琴韻（一）

月は満ちている。

夜半、少女は月を覚ます。
羽織るものを探し、静かに立ち上がる。
灯皿の油は尽きていた。沈丁花の甘い薰りにいざなわれ、あふれる月あかりをめあてに、少女は縁台へ歩みを進める。ねばたまの髪が揺れる。

少し肌寒い。それでも少女は月を眺めていた。
愛でるのは今宵かぎりやも知れぬ。

ならば、おのが瞳に月影を焼きつけよ。

そして月光の海を渡り、金色の仏のおわす彼岸へと旅立とう。
そう少女が乞い願つた月は、おぼろげな光を雲間に籠らせ、やがて
静かに闇につつまれた。無情なる天の意志を見届けながらも、少女
はただ、虚空の天をあおぐ。

懐に手を入れる。冷たいものが指に触れた。そのまま指をからめ、
強くにぎりしめる。

「姿をお見せなさいませ」

少女が命じる。

凜とした声に続き、さあと風の音がした。

「わたくし、逃げも隠れもいたしません」
机帳きちょうの裏で影がうごめいた。

「だれの命令ですか」

少女は机帳より視線をそらさない。

瞬時、火花を散つた。

少女の黒髪が踊る。

身を翻した少女と相対し、黒衣の者が縁台に立っていた。その手には抜き身の刃。

少女もまた、懐剣を構えおのが身を守る。

火花は二刃のせめき合いゆえだつた。

「知らぬまま冥途へ赴きたくはありません。お答えください」

「……横佩の大臣が命にて」

静かに落ちついた、しかし若い男の声。

「父上が……」

少女は細く息をつき、再び縁の外を見やる。

やはり今生のみの用であつたか。

手中の冷たき懐剣を少女は投げ捨てる。

床に落ちはね返り、重く硬く、鈍い音が響いた。

守り刀を捨てる、すなわち命尽きたとの覚悟を意味した。

「手向かいはいたしません。父上の命とあらば」

再び、風が駆けぬけた。

頬にまとわりつく湿り気。むせるような花の香り。光り閉ざす空と、夜陰の庭。

少女はすべてを受け入れ、まぶたをふせる。

月が再び、姿を現した。

目を閉じ闇に墮ちてさえ、少女はその光をとらえることができた。床の刀が冷たく光る。華やかにほどこされた懐剣の金具が、月光に応えて輝いていた。

そして、待つた。

それは長かつたのか、短かつたのか。

突然、手首を拘束され、少女は肩をすくめた。

音もなく男は傍に立つていた。少女に手首をつかむ手の熱さが伝わる。

「中将の姫」

少女はその声の主を見上げた。

衣のすき間から見える瞳は、月を映し迷える色を見せている。

「馬は裏手に」

男はただちに強い力で少女を引いた。不意をつかれ男にもたれか

かつた少女 中将内侍はあわててまっすぐ立ちなおす。
そしてふたつの影は、庭を静かに駆けぬけた。

第一話 琴韻（一）

中将の姫の瞳から、涙があふれてはこぼれ落ちた。続けてくしゃみと咳。何度もくり返しきこんでは、むせている。ひとつ足を進めるごとに、ちりやはこりが舞い上がり、中将の姫の袴にまとわりつく。

男は黙つて座つていたが、その黒装束もぬくなつていた。中将の姫もほこりを払うこと止め、そのまま座りこんだ。

ここは破れ屋である。かつては貴人の屋形であつたのだろうか、ほこりにまみれながらも、床几、几帳……調度はほとんどが品のよいものだつた。しかし今は訪れる者もないのか、柱の脇には琴が、静かに眠りについている。かつての主の帰りを待つこの廃屋は、ひたすら朽ち果てる日を待ち続いているようだつた。

「ここは、どこですか」

中将の姫が問つや、あわてて袖で口元をおさえた。

男が答える。

「長谷寺付近」

「長谷寺。では、十一面の觀音様がお近くに」

中将の姫が上身を浮かせると、ほこりが舞い上がる。はつと氣づいた姫は両手で口をふさぎ直すが、間に合わなかつた。またしても姫はくしゃみに苦しみだした。

「けふ、けふ……わたくしつて愚か……」

あらためて袖で口元を覆いなおし、肩をすくめた中将の姫は、男の様子をちらりと見やつた。男は声をくぐらせ笑つている。

「……觀音菩薩は」

姫は不安げな目を伏せて、ゆづくとした口調で語る。

「觀音菩薩はわたくしの守護仏なのです。

母は長らく子に恵まれませんでしたので、長谷寺に百日参籠して祈願しました。その百日目の夜更けのこと、夢に十一の顔をお持ちの

観音菩薩が現れて、子を授けると母に約したそうです。

「そうして生まれたのがわたくしであると、

姫の中でなにかが光つた。

小さな黒石をつないだ数珠。

姫はそれに頼るように力をこめ、かたく握りしめた。

一息つき、姫は続けた。

「わたくしはそう、幼きころより教えられてまいりました。それで観音菩薩を守護仏と定めたのですが、命を与えたもうたこの地に向かって毎朝、手を合わせて経典を繰り、感謝の意を表してまいります。

それが今、黒衣どに連れられて観音菩薩のひざ元にいます。この奇縁に、わたくし感謝いたしております」

ひとしきり話してなにかふつ切れたのだろう。

姫はしつかりした視線を男に向けた。

「あなたは、わたくしの命を断つおつもりでしたのに」

刹那、男の瞳に険しい色がうかぶ。中将の姫はそれを見てとったが、のどかな口調を変えずに続けた。

「父上の命令に背いて、いかになさいます」

壊れた軒から月がのぞいている。白い光が男に降りそそいだ。

彼はまぶたを薄く上げて沈思していた。なにか自問自答をくり返し、思い悩んでいるようもある。

その心境を中将の姫が推し量れるでもない。姫はただ沈黙を守つていた。

月光の中、ちらちらと舞うほこりは粉雪の「」とく星の「」とく、くさまが美しい。夜闇の静寂の中、姫はいつしか灰燼の舞いに見とれていった。

やがて男は中将の姫へと目を向け、口元を覆う布をはぎ取つた。

姫は動きを敏感に感じとり、彼に意識を向ける。

両者、目があつた。お互いの心底を探りあつよつ。

姫は緊張に体をこわばらせた。対する男は少し口元を歪めると、

静かに話しあじめた。

第一話 琴韻（II）

「神妙な振る舞いに感じ入った次第」
男はやや切り捨てるよつに言つた。

「わたくし、ですか」

「理不尽な命令に従つ氣も失せた。それだけのこと」
「理不尽な命令」

姫が首をかしげる。

「確かに、父がむすめの私の命を奪つよう命じたのは、悲しいことです。ですが、なにか理由あつてのことと想います。父上が意味のないことをなそひはずがありませんから。」

「黒衣どのは、いかなることを理不尽とおつしやるのですか」
問い合わせた相手の目に迷いがうかぶのを、中将の姫は見てとつた。男はそれを隠すように顔をそむけた。

あやまたずそれは図星かと、姫は直感する。
唐突に男は立ち上がり、静かに妻戸を開けた。そして、
「すぐに戻る」

と背中越しに言い残し、廃屋から立ち去つた。
廃屋には姫ひとりが取り残された。

姫は目をふせた。

胸がつまる。恐怖はもはや捨てた。これは不安の塊だ。先知れぬ身の上への不安、敵か味方が見定め難いがゆえの不安。
しかし、それに増して姫はもの悲しさを覚えた。胸苦しさは不安だけではなく、悲しさも原因だった。

「なぜ、悲しいなんて思うのでしょうか」

黒装束の男は問い合わせに答えなかつた。一警をも示さず出て行つた。それが悲しいらしいのだ。この身に刃を向けた凶徒なのに。

「どうしてなのかしら……」

長谷寺、泊瀬の谷。

あの人は「逃げよつ」と誘いかけた。だから逃げた。そしてこの地に来た。

だが、果たしてほんとうに「逃げて」来たのだろうか。

命を奪おうにも、仮にも前の右大臣の邸だ。邸内での刃傷は障りがある。だから逃げよと誘いかけ、連れ出したのではないか。……いや、そもそもこゝは、ほんとうに泊瀬の谷なのか。証拠はない。ただ男の口から「長谷寺付近」と聞いただけだ。

「すべては虚言かもしない」

中将の姫はひとり思つ。

「でも、すべてが虚言であつたとしても、わたくしにはなすすべがない。ここから都まで独力で、どう帰ればよいのでしょうか。すべてが罠であつたとしても、どう……」

ならばあの人を信用しよつ それが姫が導き出した答えだつた。馬は裏手にと告げられ、即座に逃げたあの直感も、信じよつ。

とはいえ不安は去らない。なお増すばかりだ。

今のが身をふり返ると、この山里の破れ屋にただ独り。すぐ戻ると言い残したあの男は戻らない。やはり取り残され、置き去りにされたのではないか。

同じ不安に再びかられる。

歌でものして氣をまきりわせよつとじばし考えたのち、朗じるが、

「もじぐの泊瀬の山に照る月は

「下の句が出ないわ」

歌は、そこで止まつてしまつ。

「やはり、わたくしつて、歌はからきしだめね」

あきらめて部屋中に視線をはわせた。

壁に立てかけてある琴には、訪れた時より氣づいていいる。

「琴に触れれば気がまぎれるかしら」

中将の姫は立ち上がつた。

壁際に寄り、琴に触れた。弦が一本ほど切れている。

「でも音は出るはず」

弦にかけてある爪を指にはめ、残る五弦を順にはじく。軽やかな音。

これならば異存はない。姫は琴をかかえた。

「重、い」

琴ほど重いものを持つたことはなかった。
さりとて、心に決めたからにはやめたくはない。
ほこりを吸わぬよう息を止め、こわばる腕に力をこめて、板間の中央に琴をすえる。

「さあ、できた」

それだけで満足を覚え、笑顔ほころぶ姫だった。

がしかし、そもそも琴を弾いて気をまぎらわそうとはじめたこと。奏でねば運んだ意味がないことを思い出すと、ぺたりと座つて指を弦にそえた。

「怖くない、怖くない。恐れも疑いも、消え失せたもつ」

姫は月に、そしておのが心に祈りを捧げる。

琴は捨て置かれたものとは思えぬほど、澄んだ音を奏で出した。

第一話 琴韻(四)

男は廃屋の軒下から天をふり仰いだ。

星の瞬きに反し、その目は物思いに沈んでいる。

男は思つ。

思いのほか中将の姫は強かつた。まだ子供っぽさの残る姫ゆえ、さぞかし延々とすすり泣くかと思つたがそんなようすは一向になく、毅然とした態度を見せるし、いろいろと質問をあびせ、さらには「背いていかになさいます」などと問う。よく刀を向けた不逞の輩に「なぜ命令を破るのか」などと尋ねたものだ。

なにより意外だったのは、懷刀を抜き、さらには投げ捨てたことだ。

右大臣邸で殺すつもりはなかつた。一刀目は脅しだつた。騒ぐならば口を押さえ、暴れるなら殴りつけてやるつゝ、腰を抜かすなら見おろして嘲笑し、そして卑しい満足を快感に変える。

恐怖と絶望にうち震える前の右大臣の姫、三位中将内侍。その哀れな姿を心ゆくまでに見下し、満月のもと楽しむつもりだったのだ。それが思わず反撃。深窓の姫ともあろうものが懷刀でむかえ撃つとは。全く予想外、いや、抵抗は予想していたが、その身のこなしは想像をはるかに越えていた。あまりの驚きに動きを止めてしまつたほどだが、いや、さらに驚愕だったのはその次だ。姫は父の命令だと聞くや、迷うことなく刀を捨てたのだ。命を惜しむようすなどは片鱗も見えなかつた。

「どうしてそこまで潔い？」

背いていかになさいます、と問い合わせられた。

あの時、答えられなかつたのは恐れたからだ。

「数え十四の中将内侍に？ なにを恐れた？」

廃屋から流れる澄んだ音に男は気づいた。

「これは」

梟も鳴くのをやめ、木々に止まりその身を寄せた。
山の破れ屋より届く、乱れなき旋律。

「音に聞く中将内侍の琴……天上の調べ」

そして男はにわかに手で目元を覆い、低く呻吟した。

「この琴の手、まさしく話に違わぬ琴の名手」

男はしばし、天人の旋律に身を委ねた。

そして思いはめぐり、くり返す。

廃屋を出たとき、中将の姫を直視できなかつた。

中将の姫の澄んだ瞳に、よどんだ心を見透かされはしまいか。恐れたのは、そのことだ。後ろめたさが心を支配し、いても立つてもいられなくなつたのだ。

なぜ……久しく忘れていた罪の意識などを覚えたのだろう。捨て去つたはずだつた良心がにわかに蘇つたのだろう。

彼は手を顔から外し、眉を歪めつつ虚空を睨みすえる。

やはり、答えは出ない。

木々の間からは星がこぼれ落ちそうに瞬く。月を隠した雲はどこかへ消えていた。谷間の泊瀬はふき通る風もなく、葉は静かに時を待ち、木々は互いによりそい眠つてゐる。泊瀬川の速む早瀬のせせらぎが、遠くにかすむ。闇に隠され見えぬ遙か右手の山からは、若い馬たちのいなきが届いた。まるで姫の琴の音に、天人の呼び声に、我らはここぞと応えるように。

「馬、複数」

男ははつと我にかかる。

「だめだ、どめなれば」

男は素早く身をひるがえした。

第一話 琴韻（五）

中将の姫は手を止めた。

影が手元を覆つたからだ。

顔を上げると男が立っている。自分を見下ろしていることに気づく。

「黒衣どの」

「夜が明けると追つ手が来る。出立する」

「今すぐですか」

「今すぐに」

「さようですか」

姫は細く、息をついた。

「黒衣どの。できましたら、この琴を持つて行きたいのですが、馬にのせても大丈夫でしょうか」

男は絶句した。

その様子を見、不安を覚えた中将の姫が、ためらいがちに訴える。「とても良い音がします。弦は切れていますが、直せば良いものです。もう少し、さわってみたいと思いまして」

「それはこの屋敷の方の持ち物。主人が不在とはいえ、琴を持つて行くのは」

「いけませんか」

「それは盗人の所業」

「盗人」

姫はさも驚いたようすで目を丸くした。

「分かりました。琴は、置いて行かねばなりませんね」

悲しげな視線をちらりと落としてから、中将の姫は男に向き直つた。彼は一顧だにせず、ふたたび廃屋の妻戸をくぐり外へ出る。姫は後ろ髪を引かれる思いをふり払い、男の後について出た。

月明かりのもと、男は大股で暗い山へと歩を進めた。はや歩きに

慣れない中将の姫を気遣うようすもない。下草を踏み、枝を払いながらも、勢い速足で登りゆく。姫が必死に追う。息を切らしつつ追つた。

白い息が姫の顔の前にあらわれ、そして消え去る。山中は冷えた空気に包まれていたが、姫は先を急ぐがゆえに寒さを感じなかつた。姫は時折、息継ぎし損ねたのか、顔をしかめ胸や腹をおさえている。だがそれをふつゝると、

「あの馬にも」

と息継ぎまじりに、それでいてはつりつとした口調で話しかけるのだった。

「お聞かせ、さしあげ、たく思い、まして」

男はふり向きさえしないが、姫はかまわず続けた。

「馬は、林の中に、つないで参りました、でしょ。あの小屋からでは、あの馬に、琴の音、聞こえません、から」

「その口、控えてもらいたい」

「い、ごめんなさい」

わざかに声がふるえている。

男は心が痛んだ。そう厳しく言わなくとも、と後悔もした。

(いや、間違つていない。これでいい)

姫自身の命運がかかつてゐる。

しかもそれを姫に説く時間もない。

杉木立をくぐり落葉をふみ分けで行く。歩みは速く、上り坂。姫には経験のない山歩き。息も絶えだえになる。さらに進み行くと足元は落葉の下に木の根が幾重にも走り、木のないところは大小入り乱れた岩肌がむき出しじ、姫が進むにはあまりに険しい道なき道となつてゆく。

「道を違えたか。それでも」

男は舌打ちし、刀を片手に行ぐ手の小笠を切り落つた。

「戻つて追いつかれるよりは」

(追いつかれるとは、追つ手に?)

不安はあるものの、男の足が緩まつたことの方が、姫には幸いだつた。追いつけずに脱落してしまえば自分に生きのびる道はない。今なら息を整え、ぴたりと後を追つてゆける。

すると急に先を行く男が立ち止まつた。

姫は男の脇から前方をかいま見た。

灯りが見える。ひとつ、ふたつ……幾つもの灯り、そして黒い影が、木々の合い間から姿をあらわした。

「これはいかなることだ」

影のひとつが鋭く問いかける。

（これは、いかなること？）

姫もまた、心の中で問いかけた。

男は落ち着きはらつた様子で、静かに返答した。

「土地の者に見られたんでね。よそへ向かうこととした」中将の姫は「だれにも会つていのいわ」と内心思いつつ、なりゆきを見守る。

（落ち着きなさい）

と、自らに戒めて。

影は複数。次々、姫と男をとり囲む。

黒衣の仲間か。

だが影らは、姫と男がふたり連れだつて山をゆくさまに疑いをかけている。男の語りはうまく切り抜けるための嘘であろうか そうだと思います。姫は天上の月、そして泊瀬の谷の向こうにおわすであろう觀音菩薩へと願いをかけた。

その月を次第に雲が覆い、山肌を映し出す光をも消し去り始める。影らはますます数を増し、もはや十に近い。じわり、と囲みを狭めてくる。

そして男は突然、身をひるがえした。

第一話 琴韻（六）

影らが「あ」と小さく叫んだ矢先、ひとり前にのめり、ふたり後ろに揺らいだ。

闇中、落ち葉が激しくこすれ合つ。

かん高く「裏切りだ！」と叫んだ声も途中で切れた。

姫はわけが分からぬ。

ただ、男は生き延びている。そうに違ひない。

「走れ！」

「……黒衣どの」

安堵したのもつかの間、切迫した声がさらにも届く。

「早く！」

姫は袖をひるがえした。

「逃げるぞ！」

「逃すな！」

影どもが姫を追おうとした、その背後を男は素早く突く。別の影からの横槍が入る、幾人の影が男の脇腹を狙つた。太刀筋を見切り、男は難なくかわしながら、中将を追わんとする影を追い、軽く首を撫でる。生温い血しづきが飛散し、男は顔に少しばかり浴びた。

が、それはまだ良い。

さらに返す短刀を一閃一閃、やがて男の衣服は別の色に染まる。多勢に無勢ながら、波状に襲いかかってくる攻め手をはじき返し、返す刀で見事に仕留めてゆく。が、次第に動きは鈍り、男は肩で呼吸し、荒い息を吐く。

（まだいるのか！）

相手するより逃げたい、と男は考えたが、両足が何かがからみついているかのようだ。視界定まらぬ闇の中、あとどれだけの人数が居るのか、どこに隠れているのか。それに自分はどれだけ斬り倒し

たのだ？ 短い刀が大剣ほどに重く感じる。

（これ以上いれば）

脳裏をかすめるのは最悪の覚悟。

その時、襲いかかられたのは頭上からだ。

「くそッ」

男が大振りに走らせた短刀はむなしく空を切った。着地した人影がしゃがれ声で告げる。

「裏切り者め」

「……」

「われが拾うてやつた恩を忘れたか」

「今までの仕事で、恩は返した。今宵」

男は深く息をつき答える。

「悪いが今宵の仕事、褒美はみな、俺がいただく」

「すべて殺しあつて」

「すべて」

男は口の端を上げた。

「八条王、あんたで最後か。助かつたよ
「ほざけ！」

人影が狼のごとく飛びかかる。

男は刀で受け止めた。

が、火花が散るや、そのまま篠笠の藪に倒れ伏した。衝撃と笠で切れた全身の傷に男は声を漏らし、刀をとり落とし、笠の中に埋もれた。敵を目前にして背を向け藪を探すことなどできず、顔色蒼然としつつ昂然と頭だけを上げると、月が雲間から顔をのぞかせていた。怜俐な月光を人影が遮り、それが手にする打刀のみが光に応じて輝きを増している。

「いい格好だな」

人影　八条王なる男が薄笑いを浮かべた。

「今まで可愛がつてやつたというに」

男は八条王を睨みながら考えた。

(「ここので時間を稼けば、姫は）

どうにか逃げおおせられるのではないか。朝になれば長谷寺の寺容が見えるだらう。寺に逃げ込めば、当面は八条王の魔手からは逃れられる……当面は。

「可愛がつてもらつた分、俺も死んでやつただらう」

「おお、そうとも」

八条王が男の腹を踏みつけた。

「ぐつ！」

そして刀の切つ先でのどを数度つつく。

「字の読み書きができるお前がいたればこそだ。わしは貴人より仕事を請け負い稼げた」

「そうだろう。俺がいなけりや、今もあんたは佐保の河原でしかばね漁りをやつっていた」

男は切つ先がのどに食い込まぬよう、小声で応えた。

「『王』なんてご大層な名乗りなぞ、できやしなかつたんだぜ」

「驕るな。わしが拾つてやらねばとうの昔にのたれ死にだ」

黒衣の男は背中にかすかな振動が伝わるのを感じた。

それに八条王は気づいている様子はない。

一拍子置いて、男は何事も気づかぬふりで軽侮の笑いを見せた。

「ふん、まったくその通り。ありがたいことだ」

確かに振動は近づいて来ている。

「だがこれが潮時だ。正直、俺はあんたにうんざりしていた。従う気なんでもうさらさらない。従わざともやつていけると踏んだんでは。あの横佩よこはせの大巨おほとけさまのやんごとなき御前さまは、俺をいたくお気に入りとのことだ。つまりあんたなんぞはお払い箱」

「この薄汚れた逃げ雑兵が！」

「その貧相で卑しい姿と能無しの頭をかえりみるがいい。この俺を殺して先、どうする」

草木を踏みしめる、荒々しい地響き。

それはもうほど近く。

「何つ！？」

突如、草叢から黒い迅影^{はやかげ}が飛び出した。

獸、黒い獸だ。それは荒い息を吐き、木々の間を疾駆する。

「馬だ、馬が……」

正体に気づいた次には、八条王は踏みつぶされた。

男は即座に立ち上がった。拾い上げた刀で八条王の息の根を止め、馬へ向かつて突進した。

「黒衣どの！」

馬の背にあるは中将の姫。

姫がたてがみを引くと馬はあえぎ、馬脚を緩めて方向を変えた。その機に男は馬の背へと跳躍した。鮮やかに馬にまたがるや、

「行け！」

と、男が命じた。

馬が一声、雄叫びをあげる。

乗馬の主の命じるまま、蹄が激しく土をけり上げた。

姫は首にしがみつき、男はその背からたてがみを握りしめた

馬は枝葉を薙ぎ倒し、風を呼び、険路を駆け下つてゆく。道筋、

黒い土と落葉が蹴散らされ舞い上がった。

寸刻前の死闘の場には、しばらくうめきが残つた。此の世に思いを残す魂魄が、彼の地に縛られるがごとく……がしかし、怨嗟に満ちた声はか細くなり、やがて闇の中へと溶け込んでゆくと、誰気づくこともなきまま、消え失せてしまった。

第一話 琴韻(七)

払暁。

黒装束は普通の衣に着替えていた。
中将の姫は驚いた。

(継兄上たちよりもお若いかも)

彼は瘦身で、目もとの涼しげな白晰の青年だった。どこか唐國の人めいの風情もなくもない。なにより中将の姫を驚かせたのは、想像よりもはるかに若いことだった。

(ともすれば、二十にも満たないのでは)

一見、幾人もの刺客を倒す武人には見えない。身なりから鑑みると、富人ではなさそうに思える。それでは家人にしては、姫には見覚えがない。

「おうかがいしてよろしいですか」

男は無言で聰明な姫を見かえした。

「害せよと命ぜられたは、本当に父なのですか

「黒幕はご想像の方」

「……継母上、でしようか」

男の無言に証明していた。

父の命にあらず。継母・照田御前の命令なり、と。

「嫌われていることは存じています。でも、わたくしは女の身ですから、お家を継ぐでもなし、命まではと思っていました」

「事実、闇に葬るよう頼まれた」

中将の姫はことばなくうつむいた。

「ああ、正確には殺せとは聞いてない。山に棄てて來い、そういう命令だつたが」

「……同じことですわ」

父の、中将の姫の実母・紫御前への寵愛と労りは、ことのほか深かつた。からだの弱い紫御前は縁を結んで以来、長らく子宝に恵ま

れなかつたが、長谷寺の觀音菩薩に百口参り、ようやく授かつたのが中将の姫である。このことは昨晩、姫みずから男に語つたとおりだ。

そのとき、みかどにも吉兆があつたとして「従三位」の位と「中将内侍」の職とを「えられた。これより人は、姫を「中将の姫」と呼ぶよくなつた。

中将の姫の母が亡くなつたのは五年前のこと。寄る辺ない姫は、父・豊成の別の妻に引き取られることになつた。姫の先々をおもんばかり、もつとも暮らしに不自由のない妻さき前の左大臣・橘諸兄たちばなのもろえという人のむすめのもとへ。その人こそぐだんの継母、照日御前である。

父は紫御前のただひとつのがれ形見、中将の姫をとくに溺愛した。一方で、照日御前との子である豊寿丸ほうじゅまるは、あまりかえりみられることはなかつたようだ。それを恨んで継母が中将の姫につらくあたることとは、日常のことだつた。豊寿丸が不慮の出来事で亡くなつてからは激しさをまし、中将の姫にずぶ濡れの衣が用意されたり、食事が運ばれなかつたり、唐櫃に干からびたねずみが入つてしたり、そんなささいな嫌がらせはいつものことだつた。着物を盗んだと言われ、雪の日に松の木に縛られ折檻されそのままでされたことだつてある。

「少しくらいのことでは動じない、そのつもつでした。ですが」

「……」

「ついて今度は、命まで」

中将の姫は暗澹たる心地だつた。

「どうしてわたくしを、そこまで」

事実は受け入れよう、しかし一方では納得がゆかなかつた。

なぜ、事ここに至つたのだろう。知らぬうちになにかをしでかし、継母の逆鱗に触れてしまつたのだろうか。

ふと、男は昔を思い起こすよつにつぶやいた。

「美しい琴の手だつた」

中将の姫は、答える意味がつかめず首をかしげる。

「このまえ、みかどの御前にて琴を奏されたとか」

「はい、仲秋の日に」

男はゆつくりうなずいた。

「あの日のことを御前はおおせになつていた」

「あの日……」

姫は愁眉をよせつつ、記憶をたぐりよせた。

中将の姫の父・右大臣藤原豊成は出仕停止、右大臣を免ぜられ、そして九州は太宰府への左遷を命じられていた。橘奈良麻呂たちばなのみなみという人が起こした、天下を揺るがす乱の報告を遅らしたとして、かの乱に加担したとされたのだ。そのうわさの元は豊成の弟で政敵でもある、左大臣藤原仲麻呂なかまろ。中将の姫からすると叔父にあたる。その仲麻呂におとしめられたことで、豊成は謹慎せざるを得なくなつた。手痛く、なにより業腹な処分であつた。

豊成は病と称して難波津なにわづにとどまり、太宰府下向を拒否、難波の別業べつけいでの毎日を悶々と過ごしていた。豊成はこの機に弟の仲麻呂が勢力拡張に励んでいるかと思うと、気が氣でならなかつたろう。中将の姫でさえ、父の不安、いらだちは手にとるように理解できだし、実際、氣鬱な表情を隠さぬすがたを覚えてゐる。

そんな中である。仲秋の宴にてみかどの御前で演奏を行つべしと、中将の姫が命ぜられたのは、中将の姫の琴の音こそ望月にふさわしいと、みかどが望んだといふ。

四年前、十歳のころには同じくみかどの前で奏し、幼くも琴の手の素晴らしさは語り足りせぬと評されてはいた。位が「従三位」から今、「三位」となり、玉簪たまがねを与えられたのは、この琴の褒美ほめいだつたのである。

前の右大臣に味方する一派が策動し、呼び戻すきっかけをと、宴にかこつけたのか。

ともあれ、この好機をものにせぬ道理はない。

「決してみかどの気を損ねぬようにな

と、異母兄の繩麻呂はその日、中将の姫の邸にまで出向いて来、強く申しつけて送り出したのだった。

必ず、成功させねばならなかつた。

出仕かなわず、憂き日にある父のために。

第一話 琴韻（八）

中将の姫は継母の照日御前とともに参内することとなつた。

だが、そのために大変なこととなつてしまつた。みかどが気まぐれを起こし、照日御前にも琴を弾くよう命ぜられたのだ。

照日御前はたしなむ人ではない。とはいへ固辞するわけにもゆかず、母子で双琴を並べることになつたのだが、案の定、照日御前は的外れの音をかき鳴らすばかりである。このままでは父の名誉回復になるわけがない、どうにかせねばならない。

中将の姫は即興で音を紡いだ。はずれた照日御前の音に合つ音を求めて弾いた。

まるで異国の調べのようじや。

ある公卿は夢見心地に、ほう、と深い吐息を漏らす。

また、ある公卿は息浅く、意識を失つたかのように微動だにしない。

耐えかねた照日御前が琴の爪を投げ出した。にわかに夢を覚まれ、眉をひそめる面々。

姫は突然、激しく箏をかき鳴らした。そして氣を逸らそうとしたのだ。

渢流のごとく衝突する旋律は、殿上の人々をはつとさせ、中将の姫ひとりに視線が注がれた。期待と好奇に満ちた目が姫一点に集中する。その期待を裏切るまいと、姫は持てる技巧のかぎりをつくした。

殿上人らは姫の音に心奪われた。彼らの目にはもはや、ほかの何者も映らない。爪を投げた照日御前など、皆が忘れた。まるではじめから存在せぬかのように。

そして最後に、姫は柔らかく心和む調べで音曲を結んだ。

すべてを終えた姫はひどく震えていた。さきほどまで無心で動かしていた手が、今にも腕から落ちそうな感触がして、両方の手首を

離すまいと、それぞれをしつかり握りあわせた。そして震えをさえながら、つくり笑いを浮かべて前を見すえると、誰しもが我を忘れたように放心し、しかし満足げに口元を緩ませているのが分かつた。

無事に大役をつとめあげることができたかしら。

ほつと姫は胸をなでおろした。

……そのはずだつた。

「どのような結果を招いたか、『ご存じか』

男が冷淡に問う。

「うかがつております。みかどがどう、おぼしめされたのか」

姫はなにやら思いついたか、急に早口で問いかけた。

「もしや、みかどのお怒りに触れたのでしょうか。だからわたくしは死をもつて報いねばならぬと」

「みかどはかく仰せになつたとか。その琴の妙手は並ぶ者なし」

姫はなにかを言おうとして、口をつぐんだ。

「あなたは御前に、みかどと殿中の人々の中で恥をかかせた」

「そんな！」

「恥をかかせるつもりは毛頭ない、その場をつべひつのに必死だつた。おつしやりたいことはよく分かる。

だが元来より御前は姫憎らしとの『ご存念』。姫の善意を素直に善意と取りはしますまい。姫のために、おのれの不調法をことさら世に知らしめられた、と屈辱に思われた

姫の瞳は潤んでいた。

「どうすればよかつたのでしきつ

「逆恨みの理由など、突きつめても無駄なこと」

男は素つ気なく言つた。

とても慰めようという口調ではない。

しかし姫を責めるでもない。それが気遣いなのか、率直な意見なのかは分からない。

ただひとつ、想像できたことがある。彼は命を下した照日御前を

「主人」に仰いではいらないらしい。子飼の下人ならこんなものの言い方はしない。「逆恨み」といった、照日御前に非のあるような言い方は。

「あなたさまはどういった身の方で」

「名は、春時。御邸の門の守り番」

（それにしては、あなたのお顔を拝見したことがありません）

（疑わしくはあつたが、姫はあえて尋ねなかつた。）

「春時どの。これよりどういたしましょ」

「……とりあえずは危険はないと思うが」

（素つ気ない春時という男がはじめて困ったような表情を見せた。）

（もしかして、いきあたりばつたり、かしら）

（そう推測すると、姫は春時になんとなく親近感をおぼえた。数刻前、刺客として刃を向けられたことへの恐れそして継母の理不尽な仕打ちへの悲しみは、どこかへ消えうせたようだつた。不思議なことに、こんな中でも心が安らいでくる。）

「追つ手はもう、いないのでしょうか」

「首領は倒したが、確實ではない」

「でしたら、姫、姫と呼びかけるのは、よろしくありません」

（春時が向き直る。）

「どうお呼びすれば」

「これよりはわたくしき、れん、とお呼びください。本当の名は、

（藤原蓮子。真名で、蓮華の蓮、と記します。）

（男　春時は皮肉交じりの笑みを浮かべた。）

（承知しました。前の右大臣の郎女、中将の姫^{いらつめ}）

（だから、れんだつて申しましたのに）

（と、姫　れんは口をとがらせた。）

第一話 落飾（一）

街道わきの山道を馬の背にゆらされる男女。

女はまだ齡若年で色白く可憐さを残す。しかし可憐ながら堂々とし、典雅な雰囲気が漂つ。

男もまだ年若かつたが落ち着いており、凜々しい顔立ちで物腰に粗野な振舞いはみられない。

「では、忍坂おっさかの山中に、わたくしを捨てるつもりだと」

女 れんの尋ねに、男 春時は短く答えた。

「そうです」

「それだけでよかつたのでしょうか、捨てるだけで」

「尊貴の方はおれのような奴とは違つて、いろいろ大変だから」

春時は皮肉つぽく笑つた。

「と、申しますと」

「殺すと怨靈になつてしまわれる。恐ろしいものです」

れんはさも恐ろしい、とばかりに身ぶるいした。

「え、ええ、そ、そうですわね」

「さらに怖いことには祟られた上、首謀者が分かつてしまつ」

「それも、そうですわ……ですが」

れんは口元に袖をあて、考えこんだ。

「なにか疑問でも」

「もし……もしもですよ。忍坂でわたくしを捨てて、命を絶たないままでしたら、山の辺の道をかよつて、都に戻ることだつてできるかもしだせん。わたくしがどうにかして、都に帰りついたとしたら、継母上たちば、どうするおつもりだつたのでしょうか」

「悪口雑言を並べたてておけばよ」

「……それだけで？」

「厳しくあたつた御前はまこと正しかつた。邸に戻つてもこなた様に同情する者は誰もなく、さぞかし肩身のせまい思いをするでしょ

うな

「悪口雑言とは、どういった」

春時は少し考えるようすを見せると、にわかに苦笑いを見せた。

「春時どの。なにをお笑いなのですか」

「男とできて家を出た、といつた」

「えつ……ええ？ あのつ」

れんは頬を赤らめた。

「もしかして、ええと、あの、はた田から見て、春時どのとわたくしとは、その……いまもそのように見えるのではないか」

「それはお答えできませんね」

「ど、どうしましょ、うつ……」

「なにが」

「だつて、それは」

れんはこれ以上となく真っ赤になり、春時の顔を見るだけで精一杯だ。

「い、ご迷惑なのは」

「仕方ない、お答えしましょ。こなた様をどう眺めたって色恋の雰囲気はありません」

「それは……どういう意味でしょ、うか」

れんと春時は同じ馬にまたがり、山道をゆく。

道々話をしてもくうち、急速にうち解けつつあった。

不思議なくらいに自然に、お互に知己であったとさえ思える。

（中将の姫 れんがそうさせたのだ）

れんは刺客である春時に臆することなく話しかけてくる。春時はそれを無視するわけにはゆかなかつた。相手をするつむ、いつしか垣根は低くなつていた。

れんの警戒心のなさは驚きに値した。れんに人並み以上の度胸と胆力があるのは間違いない。しかし、深窓の姫らしい世間知らずが、怖いもの知らずのふるまいに輪をかけているのではないだろうか。（追いはぎに「来い」と言われて、ばか正直にのこのこついて行き

かねないな)

春時は不安を覚える。

あの山の破れ屋でもそつだ。中将の姫はただ心の赴くまま琴を奏でた。

(あの妙なる調べは人に恍惚の光を^ヒえ、鬼神さえも心震わせる。
……おれも一時、心奪われた)

だがその美しさが徒^{あた}となるはずだ。嫋々たる余韻も去り、人の心が闇を取り戻すとき、かの奏者こそは中将の姫よと氣づくだらう。現にそれは起こつた。

琴をやめさせすぐに逃げようとしたが、ほどなく追いつめられた。八条王に命じられた遺棄場所は忍坂。その忍坂よりさらに東、泊瀬^{はつせ}に向かい、都から追尾する八条王の一党を振り切つたはずであつたのに、集団で待ちかまえられていたのだ。琴の音のせい、と考えざるを得ない。

八条王配下の関わる者は、おおかた息の根を止めたはず。首領の八条王もおそらく死んだ。だが確実ではない。八条王以外の手先の存在も考えておく方がよい。この姫はまだ狙われているかもしれない。

春時は思慮を重ねながらも迷いが去らない。

泊瀬からほどんど離れていない場所に、姫をひとり残してゆくのは危険極まりない。とはいえ、今後を考えるなら。

「まあ、村に出ましたのね」「

れんが無邪気に喜んでいた。

確かに林がどぎれると、畦道があらわれた。秋の田は刈取りを終えて久しく、稲を刈った株以外なにもない。すべての用が済んださびしげな田のさまを眺めつ、馬の背にゆられ行くと、目の前を赤とんぼが飛んでいった。あつ、と小さく声を上げたれんは、追いかけるように手を伸ばした。すると体が傾きそのまま落馬……寸前で、脇を抱えて引き上げたのは春時である。

「あ、あの」

春時はただ、ため息をついた。心配の種は勿れやつにない。小屋が見える。

やいまでやつへつと並んで揺られ、軒下に馬をつないだ。

第一話 落飾（一）

「一時、都へ戻る」

春時は旅装を解かず、せわしなく荷物を床に置き直している。手伝おうとしてかえつて邪魔者扱いされたれんは、ちよこんと床に座つていた。

「わたくしは」

「ここで隠れていってもらいたい」

春時は包みをれんの前にすえた。

「入り口のかめには十分な水がある、この包みは干し飯が入つている」

「はい」

「干し飯の食べ方は」

「存じています」

「一、二日で戻るから、これを食して」」」」」」と静かにしている
ように」

「はい」

春時がれんに命じるさまは自称「右大臣家の門番」に似合わぬ居丈高さだ。

「我慢いただかねばならないことが」

「なんでしょうか」

「髪を頂戴したい。それもかなりの量を。童子頭になるくらいに」

れんは反射的に頭に手をやつた。

まげを解くと腰まである、黒く染め抜いた絹のごとく艶のある髪。それを隠そうというのだろう。当然、隠せるわけがない。

れんはひどく動搖していた。

無理もない。髪を切る。「落飾」は出家し尼となること、切つた時から世を捨てたと同じことだ。とはいって、今のれんの境遇は世捨て人そのものだが、とにかく横佩大臣よこはせのおとひしの姫、三位中将内侍にと

つては恥ずかしくて、とても人前に出られる姿ではない。動搖するのも「じく自然な反応だつた。

「おまかせいたしますが、わけをお聞かせ下さいますか」

「そう言つてから、れんはあわててつけ加えた。

「決して春時どのを信じないのではないのですよ。でも、その……」

「つむきがちになりながら、田は救いを求めている。

「こなた様を死んだ」とします

「……！」

「これ以上、追つ手が掛からぬようにするため」

「そこまでしなければなりませんか。継母上を謀るのたばかはともかく、父上や義兄上たちがお嘆きになるのは耐えられません

「ではこつ申しましようか、中将の姫」

春時が厳しい目を向けた。

「こなた様を始末した暁には、多くの褒美が約束されている。それが田当てです。なぜ褒美が必要か。いただかないことにほ、ほとぼりが冷めるまで逃げるにも食つに元手もない」

「食つ、元手」

れんにとつて食べ物は、決まつた時間になれば女房が用意してくれるもの。継母の意地悪で食事を得られないことはあつたが、食べるため元手、資財が必要と思つたことはなかつた。

藤原南家、右大臣の家で食事の苦労などありえないし、父が左遷されたとて暮らし向きは変わらない。

「食つ、元手」

れんは数度、くりかえした。

れんには思いもかけぬ話であつたから、意味を正しく受け止めら
れているのか、ことばを言いかえたしかめる。

「おつしゃつてこるのは、ものを食するにも食べ物が手に入れられぬ、とこつことですか。だから、わたくしの髪の束で購あがなおつと」

「い」理解いただけましたか

「どうやら考えは合つてゐるらし」

れんは小さくうなずきかえすと、さうに考えた。

「でも……継母上に収めるのですよね、この髪を。この髪をして、わたくしに呪いをかけたりなどはしないでしょうか。河原で拾つた觸體とくたいに入れたり」

「死者を呪殺できますか?」

「あつ」

「怨靈祓いの呪法や祈祷くうじくはやるだらうが」

「そうですね、たしかに」

まだ不安はぬぐいきれていない。

だが容赦なく、春時は宣告した。

「ご理解いただけたなら切らせていただく」

れんは「自分で切る」と口元まで出かかったところを、飲みこんだ。潔く切れればよいが、中途半端になつてしまつと未練と思われる。

(そう思われるのは、いやだわ)

春時に任せて切り落としてもらつまつが、ましといつもの。れんは黒い数珠を両手の指にかけ、包み込む。目を閉じ意を決し、きゅつとくちびるを引き結んだ。

「おまかせします」

春時は小刀を抜いた。

頭の頂点に軽い振動が伝わる。見ることはできないうが、伝わる振動で分かる。髪がそぎ落とされてゆく。そしてひとつさ、ふたふさと、髪の束が床に落ちてゆく。

(軽くなつてゆくわ)

髪が落ちるたび、頭が軽くなる。

(今までなにか、重いものを背負つていたみたい)

梅雨のころの湿り気のように、望まぬのに肌にまとわりつく。重くてわずらわしい、正体の知れぬなにか。今までにそれをふり払つている、そんな気がしてきたのだ。頭が以前より研ぎ澄ませたようにも思えてきた。が、

逃すものか……

突如、女の手がむずと後ろ髪をつかむ。
れんが息をのんだ瞬時、周囲は闇に満ちた。
れんはただ一人、女の声を聞く。

けして逃さぬぞえ……中将内侍……

第一話 落飾（II）

田の前はただ漆黒。手を伸ばしても何も触れることがなく、ただ空を切る。

（これは）

れんは自分に言いきかせた。

おかしい、これは現のことではない。先程までは顔だつた、夜のわけがない。

春時もいきなり姿を消した。

そんなわけがない。迷つてはいけない。

呪詛。

忌まわしい」とばが頭をよぎる。

（「、こんなときは、流されはいけないのだわ）

氣をふるい起こして闇のいすこかに焦点を定め、問いかける。

「ど、どなたです。わたくしの、髪を」

髪を切るか。おのれまんまと逃げおおせると思つてか……

女。

その声、れんには聞き覚えがあった。

しかも記憶に新しい。口がな刻まれつづけた記憶に。

頭が重い。

れんは半ば無理やり首をかたむけ、後ろを見やる。

「……」

声が出ない。

切られようとしている最後の長い一房。それを、白魚のよつな手がしつかと握つている。

さりに片手が闇より現われる。れんの首に絡みつく。

いや逃さぬぞ中将内侍。

「は、は……」

両の腕を包み込むのは艶やかな朱の衣。伽羅きやらの香り芳しいその衣

の主は……

「継母^{ははうべ}上さま！」

さくり、と最後の一房が落ちた。

「しばらくは我慢願いたい」

れんはしきりにまばたきした。

今は曇だ、ちがいない。

（夢からうつつへ、戻つて）

春時が刀をさやに収め、怪訝そうにれんを見ている。

「れん」

「ええ、あ、はい。いいえ」

れんはあわてて首を横にふった。

「我慢など。すつきりしました。長い髪は動き回るのに難渋します」

「あまり動き回られても困る」

「あつ、そういえば」

春時はまた、ため息をついた。

「よろしいか。戻るまでの間にことどまつ、動いて人目につくことのなきよう願います」

「はい」

「それから、人が来てもじつとしていること」

「はい」

「もし見つかっても人を待つているからこのまま待たせて欲しい、と頼むこと。自分のことは決して語らぬこと」

「はい」

れんは素直にうなずいた。

不審の目をむける春時だったが、結局は時が惜しいとばかりにさつさと小屋を出て行つた。

去り際に、馬が荒い鼻息を吐いた。

数刻の間

。 むじ

れんは筵の上にまづねんと座つたままでいた。

「まだわ

ようやくして、ぽつんとつぶやことには。
「また、置いてけぼり」

とはいえ、今度はあまり不安はない。

昨晩はひどく不安だった。「置いて行かれるのでは」と懸念したし、「置いていかれたらどうしよう」そればかり考えた。真夜中でもあつたし、人里はなれた破れ屋にいたためもある。なにより、春時がどんな人間か分からなかつた。逃げようと連れ出されたが、本当に逃げているのか、それとも罠なのか。今は信がおける。みずからに害をなすものではないだろう。まだはつきりと人柄をつかんでいないが、悪人ではない、とは信じている。

「わたくしのために、破れた袖とお髪をたずさえて行つたのですから」

れんは破れたすそをたぐつた。

髪と同じく、証拠とするために破つたあとだ。

「置いてけぼりじやなくてお留守番。ことばを間違つてはいけないわ」

じいっとしていると、昨日の晩が思い出される。

夜通し奔り抜けた　まさに激動の夜。

自ずから目を覚ましたら春時の襲撃を受け、かわしたら手をつかまれ、逃げよと誘いかけられた。ふり払つこともできず馬上にあれば、いつの間にやら泊瀬の谷。はつせ廢屋を一夜の宿とする事もなく、さらに逃げねばと山中を歩き、八条王やしろおうとかいう凶漢たちに囲まれる。見知った人々であつたろうに躊躇なく、春時は斬り捨てた。

「思えば春時どのは」

そういう人なのだ。

「わたくしを、殺しに」
信じていいのだろうか。本当に……？

そう考えると不安が身に刻まれた恐怖に変わる。にわかに震えが来、止まらない。

第一話 落飾(四)

(なにを今じろる恐れていの)

右手の震えを左手で抑え、唇をかみ、無言で血らに言い聞かせる。
(わたくしは今、きちんとここにいて、息を吸い、吐き、つまらぬ
ことに思いをいたし、今のありようを迷つてゐる。

わたくしは今、助かつてゐるのよ。あのお方はわたくしを助けてく
れたのよ。なにも恐れることなどないはしないわ)

落ち着きなさい、と声に出でずに命じた。

掌中の数珠を揺らしてみる。

かち、かち、と石がぶつかる。

そのわずかな音だけに耳を傾ける。

やがて 自分の吐息に気づくと我にかえる。れんはてのひらを
広げ、数珠を眺めた。からだの震えは知らないうちにおさまってい
た。

軽いため息をつき、ふたたび思慮を重ねてゆく。

「そうだわ、はじめにわたくしが襲われたときのことだわ。わたく
しが、春時どの刀をかわせるはずがない。春時どの気配に、眠
つていたわたくしが気づくのも不自然なこと。あれだけの人だもの、
何人も敵に回して切り抜けられる、そんなお方だもの。気配を絶つ
ことだつて、実は造作なかつたのでは」

れんは手をきゅっと握り立ち上がった。

顔を下げたまま手を口元にあて、ぐるぐると土間を歩き回りはじ
めた。

「このは考へられないかしら……春時どのはわたくしを観察する時
間を得ようとした。この眠れる女は本当に横佩大臣の郎女、三位中
将内侍であるうか。この邸よりつれ出すべき女であろうか。いざい
ざ、見極めん！」

そして、れんはぴたりと動きを止めた。

「ええ、これなら、きちんと説明がつきますね」

自分の推理に満足したのか、ほおがほころぶ。

「なんにしたって、怖がっているだけでは始まらないわ」

れんはそう自分に言い聞かせると、顔をひきしめ直し、腹に力を入れた。

きゅるる……。

おなかが鳴つた。

「いろいろ考えたら、おなかが減つたみたい」

さつそく干し飯のお出ましらしい。

水を用意せねばならない。器は、春時が置いていった一式にある。

「水は筒にあるけど」

外にある。

「水はかならず要りますものね。筒の水は夜に置いておくとして今は、裏にたしか、しみずがあつたわ。明るいうちはあの水を飲みましょう。夜に出歩きたくはありませんもの。

ほらほら、やつぱり、春時どのおつしやる通り、こじで、静かに、じいーっと、なんてしていられるわけないわ」

れんは喜々として独り言を述べては楽しんでいた。

すでに静かに、じいーっと、などこれっぽっちもしてはいない。

「そうだわ。外には干し飯のほかにも食せるものがたくさん、あるのじやないかしら。草とか、草とか、草とか」

草の名がひとつさに思いつかないが、自信たっぷりだ。

その自信の根拠は、彼女なりに確固としたものがある。

ものじこひついたときから、母・紫御前は病の床にあつた。幼いれんは医師の薰陶を受け、母に薬湯を煎じていたのだ。

「身分の低い者のすることですよ」

と諭されても、れんはかたくなに煎じつけた。

父も困った顔で小さな姫に理由をただしたものだ。

「どうしてじうことを聞きわけないのだね」

れんはうまく説明できなかつた。

どうしてもやらなければと、つよく信じていた。

最後にはみな、あきらめてくれた。薬湯より祈祷を信じていたし、姫が涙に袖をぬらし続けるよりはいいと思ったのだ。

わがままを通した理由、いまのれんは分かっている。

（母上がわたくしを授かつたとき、夢で觀音さまが『子を授ける代わりに母上のお命をお縮め申しあげる』とお告げになつた。母上の苦しみはわたくしのせい。だから、みずから手で母上をお救いしてさし上げたかったのだわ）

あじけない姫だというのに、れんは懸命に学んだ。

最初は薬師の言つ通りにしかできなかつたが、じだいに自らの判断も交えることもできるようになった。むらに興味が深まると唐土の薬書『新修本草』もひもといた。身近にいる家同のむすめにも处方したことだつてある。

「食せるものも、お薬になるものも、きっとあるに違いないわ」

「ない状況などいっさい考えていないらしく、

「どんなものがあるかしら、楽しみだわ」

と、期待いっぱいで外に出てゆくれんだった。

第一話 落飾（五）

れんはまずしみず、つまり井戸から水をくんだ。

水を満たした桶は重かつた。昨晩の琴など比べ物にならない。しかも、くんだまではいいが疲れきってしまった。小屋へ運ぶことはあきらめ、その場にしゃがみこんで手ですくい飲んだ。といつても全て飲みきれず、井戸に水を戻したほうがいいのかどうか迷つたあげく、少しずつ周囲にまいた。

「今度からは、手間でも飲む分だけくみましょ」

今回学んだ教訓である。

それから小屋から離れ野に出た。食するための草をつむためだ。

「これはどうかしら」

しゃがみこみ、田の前の背丈の低い草に手をのばしたそのとき。

「食えねえよ。腹こわすよ」

どこからか声がした。

顔を上げ、あわてて周囲を探るものの、人はいない。すると、また声がかかる。

「ここだよ」

自分のひざ元だ。れんは目を丸くした。そして、見下ろした地面に声をかける。

「あなたなの」

「そうさね」

間違いない。声の主は、れんがつもうとした草だった。すると右手からまたしても声がかかる。

「私なら食べてもいいよ。どうぞお取り」

ひと回り大きく育つた草が、淡く小さな花を揺らしていた。

「あなたは」

「蓬。^{よもぎ} ゆでたら美味しいわよ」

れんは少し考えた。

「あなたが蓬だといつのは承知しておりますが
なぜ話せるのか尋ねたかったのだが。

(まあ、いいわ)

れんは思い直す。

昨夜までの緊迫した事態に比べたら、頭を悩ますほどでもない。
れんはのんきにそう考えた。

「蓬といえば」

れんは記憶を探つた。

「煮出した汁は化膿止めになるし、消化にもいいし、お通じの悪い
時には煎じて飲んだらいいし。乾かしておけば灸治きゅうじにだって使える
し。いくらかお薬をつくりておこうかしり

つくりて……。

れんは思い悩む。

「だめだわ」

「どうして」

「だつて、あなたをつんだら、なんだかかわいそう」

「かわいそうでもなんでもないわ。根さえ抜かねば、また伸びるも
の」

「そうだよ。伸びるんだしさ」

ほかの草も横からすすめる。

普段、薬を煎じるのに草をすりつぶしてこる。

なのにいまさら「かわいそう」だなんて、変な話だとれんは思つ。
でも、今はこつになく後ろめたい。

(お話してしまつとなんだか。ふしきといふか、困つたものね)
他の命のかけらをつむのは、健やかであるため。これまでも気づ
かずに命をもらひ、健やかに過ごしてきたのだと思つと、れんはな
んだか申し訳なく感じた。

「では、つみますね」

と断わつて茎に白い指をのばした。

引きちぎれる音がかすかにだが、耳に残つた。蓬が「痛い」と小さ

く泣いたような気がする。

蓬も摘まれればその身を断ち切られ、痛さに泣くのでは。

「ごめんなさい、ありがと」

蓬は返事をしなかつた。

そんなれんの姿を、野辺の路から見つめる者がいた。

竹籠を背負つた女だつた。頭を布で覆いながら髪はほつれ、すりきれた袖からのぞく色の濃い腕は、泥が白くこびりついていた。

「どこかの貴きお方じやろうか」

それにしては供もつけずにひとり。女は、何度か貴人が山を越えた寺社に参詣するようすを眺めたことがあるが、かならず目を見張るようにつらびやかな行列で、しかも車や馬を連ねていたものだつた。このようにひとりで座つていようはずがない。

なにより、玉のようすに可憐な顔立ちの少女が草と語りつゝは尋常ではない。人ならぬ身であるならば天神地祇の類いか。

「もしや、天女が」

れんは立ち上がると視線に気づいた。

しまつた、と思つた。

女はふらふらとひきつけられるように近づいてくる。

「もしやあなたさまは」

れんは身をこわばらせた。

(どうしよう。逃げる、小屋の中へ逃げれば)

「もしや、天女さまではございませんか」

「……はい？」

れんはあっけに取られた。

「とんでもございません、わたくしが、天女さままだなんて」

と、細かく首を振つたそのときである。

「ぐうう……」

と腹の虫が大きく鳴いた。

第一話 落飾（六）

れんは、自分のおなかをじっと見つめた。次いで女を見た。女はどこか陶然とした目でれんを眺めている。彼女の目はきらきら輝き潤んでいた。

れんは全く当惑し途方にくれるばかり。

（ど、どうなつているの）

邸にいたころの中将の姫としてなら納得もしよう。よく手入れされた長いねばたまの髪を結い上げ、華やかな单衣を重ねてまとった姿なら。

だが今は、髪をぱさりと短く切ったあられもない姿。

（どうして、こんなことをおつしやるのかしら）

それゆえか、

「おなかが空いておるんですか」

「はい」

反射的に答えてしまった。

（ああ、なぜ答えてしまつの！）

れんは自分のまぬけさ加減に頭をかかえたくなつた。

「さようでしたらわが家においてぐだされ」

「そ、それは」

困ります、とも言い難かつた。

（断つたら、きっとひどく落胆なさるわ）

もとより好意を袖にするのはあまり気が進まない。断り方も知らない。

一方で、去りぎわの春時が残していく言いつけが、幾度となく頭の中でくり返される。

人が来てもじつとしている」と。

(無理!)

れんは必死にいいわけを探した。

(ええ、大丈夫。よこしまな考え方をもつ方ではなさそう、ですもの)
根拠無しだが。

ただ、田の前の人から受ける印象、それは素朴で穏やかで清々しい心地よさだった。

この人は疑うべくもない方だ、とれんは思った。

というより、この期に及んで疑いたくなかった。

「お尋ねしてよろしいですか」

「へい」

「あなたさまの館は、ここから遠くはございませんか」

「いいええ、すぐそこ、林を抜けですぐです」

「さようですか」

それならちよつと行つて帰つてくるだけ。ちよつとくらくなら。

「では、お連れくださいませ」

女の顔に無邪気なよろこびがあらわれた。
断らなくてよかつた、とれんは微笑んだ。

荷を下ろした室からまた杉林を入り、坂を下りてゆくと、小さな集落があらわれた。そこは狭隘な谷間で、北側にあたる山の中腹にできた狭い台地に数戸の集落が身をよせあつてゐる。女はその集落を迂回し、さらに道を下る。

「ここは、なんと申すところですか」

先を歩く女の背にたずねた。

「吉隱の里です」

「じいが……」

吉隱とは歌に聞く里。

そして幾人もの皇子、皇女たちが葬られし岡。

降る雪はあわにな降りそ吉隱の猪養の岡の寒からまくに

やがて冬を向かえれば、この雪に覆われた里は、雪化粧に彩られるのだろうか。

記憶にあるとこ、だけで、どこか不安も少なくなる。不思議なものだ。

「あなたはなにと呼びすればよいでしょ？」

「よく」

れんは名乗り返さうとしたが、聞かれるまではと思いついた。

自分のことば決して語らぬこと。

第一話 落飾（七）

椀の中の、華やかに赤いものは猪の肉らしい。青いものは山野の野草、蓬もあるかもしない。れんには得体の知れない小さな穀類も、といひじいの因子のように固まっていた。

れんは一日、なにも口にしていない。山を縦走したり乗馬したりと、常にありえぬほど動き回っていたから、緊張のほぐれた今となつては空腹が耐え難いほどだった。しかしそれでも「獣の肉は」と一の足を踏む。

見てしまつた猪の頭。それはまさしく死骸だった。
血にまみれ、魂の抜けた屍。毛皮を剥いで、赤々とした肉と脂を削ぎとる。

それがこの椀の中の猪の肉。

あれを口にするのかと思うと、吐き気をぶり返しかける。とはいえ、いびつな椀からあがる湯気。汁椀のぬくもりも指先をして全身へと伝わり、気がつくと安心しきつてしまつとしている。その一方、相反する惧れと罪悪も感じている。

（そうよ。肉さえ食べなければ）

れんは汁をする。

ほのかな甘みと温かさが口にひろがり、胸に流れこんでゆく。

「いかがでしょう」「……あたたかい」「それは良つ」ざこしました

きよくがうなずいた。

「今日は天女さまがいらっしゃるから、神さまがご用意なさつたんじゃなかろうかと思つとのです」

「神さまが」

「へえ」

なんて穏やかな顔をなさるのだね。

れんはそう思いながらきよくの言葉に耳をかたむける。

「猪がかかつて葉がたくさん採れてこれだけものが食えるようになつたのは、天女さまと神さまのおかげです。」

「いつもは、どうじつたものを、食されているのですか」

「この、粟をうすめて煮たもんです。」

きよくは椀の中の穀類の固まりをかきませた。

「それを、一食」

「へえ。冬の終わりにはそれもなくなりますがねえ」

れんは器の猪肉に視線を落とす。

いつもの食事は、一汁一菜、すなわち汁物におかずが一品ついでいたはずだ。それに米の蒸し飯。季節だからといって一食を欠くことはまずなく、たまに一日一食となることがあつたのは、継母の意地悪のせいだった。育ち盛りのれんは一食を抜いただけでも辛く思つたものだ。

「それで、足りるのですか」

れんが心配そうに尋ねると、きよくは穏やかにうなずいた。

「足りる足りぬと言つても、ねえときははねえですかうね」

「……」

「どんなにひもじくとも、切羽つまつてもうだめだというときには、必ず助けてくれなさる。だから今、こいつしておれるんですわ」

れんは再び、椀より立ちのぼる湯気を眺める。

(ほんとうに、肉食は悪いことなの?)

戒めや禁令に沿えば確かに悪とされでこる。

では「神さまがくれたもの」とすすめるきよく親子は悪業を勧める悪人であり、れんが拒んで口にしないのは戒めに従う善行なのか。いいえ、そんなはずはないと、れんはかぶりを振つた。

この人々は粟のかけらで日々ようやく命をつなぎとめている。それが獸の肉を得たのなら、腹をいっぱいに満たしたい、そう思うのは自然なこと。しかも天皇や殿上人、れんのよつたな高貴の者の殺生だからと獸肉食を禁じることのできる 豊かな暮らしは、租

税を収めた残りもので生きてくる、ややくのよつた民が支えている。

(食う元手…… そうだわ、これが)

気づかず、勝手に獣の肉食を悪と決めつけってきた自分の高慢。

(では、どこからが悪で、どこまでがそうでないの?)

再び昨晚を思い起こした。

杉木立の暗闇。かつて仲間として関わった人の命を奪う、春時の姿。

れんは改めて思いをはせる。まぎれもなく自分が「奪わせた」のだ。殺せとは口にしていない。願つてもいない。しかし、こうして自分が生きてくるのは、数々の命を間接的にしき、奪つてきた延長にある。

「…………るとかびの…………」

「ほひ?」

きよくが心配わつに顔をのぞきこんで問つ。

「え」

れんはつくりむすびにあわてて微笑んだ。

「ええ、なんでも」やせこませんわ

そして猪肉を口にしよう、と決意した。

(早く戻つてきてください、春時どの。わたくしは、あなたに謝らなければ。あなたを疑つたこと、ほかにもいろいろ、謝らなければ) 口にした猪肉は、ことのほかさつぱつとして甘かった。

第二話 散華（一）

横佩大臣が家の家司・堅虫の律義ぶりはつとに有名であった。筒形に巻いた漢籍を入れ、積み上げた箱を背にし、謹厳そのものという顔で端座している。夜というのに衣乱れはなく、襲ねの色目さえ気遣っていた。応対する相手が、たとえ出自も知れぬ若者であつたにせよ、だ。

「姫はご無事です」

夜半、春時は堅虫のもとに訪れ、ことの次第を告げた。照日御前に姫の身柄の遺棄を依頼されたこと。姫は無事であること。そして、れんから預かつた上衣のあしきぬの端切れ、切り落とした髪の束を示し、その身は無事でありこれらの品も姫の了承の上の持参、とつけ加える。

「これぞまさに証し。姫はいざこに」

「陰謀の正体をつかみ姫の安全が確保できるまでは、居場所は明かせません」

「そなた自身がかの御方の手先ではないとの証座は」「証せねば、姫を救う手だては講ぜぬ、とでも」

堅虫がはじめて顔を曇らせた。

さらに春時は冷淡に言はず。

「これを偽りとみるかは貴殿のご器量次第」

「そこまで申すなら了解するしかあるまい」

堅虫の声は平静なままである。

「ならば卒爾ながら尋ねたい。これよりいかにする所存であるか。私はなにをすれば良いのであるつか」

「私は姫を始末したと伝え、かくして油斷を誘います。その間に貴殿には、女狐の悪事の尻尾でも見えぬか否か見張つていただきたい。大臣おじいどの耳に入る中将の姫にかかる悪口雑言も、気づかれぬよううちに消すように努められたい」

「かの御方は疑り深い。ことばのみでは信用すまい。錦や髪だけでも不足とみゆるが、いかがであろう？」

「おおせの通り」

春時が眉をよせた。

堅虫もまた、顔を歪める。

沈黙が続くなか、堅虫は田の前の若者をじっと見すえた。彼の心を占めていたのは、今後の策よりも春時といつ男だった。いや、もつといえは、惚れこんだのだかも知れない。

貴殿の器量次第、とせまられたときには「この若造が」と思つ一方、堂に入ったもの言いに納得させられた。それに加えて人品卑しからざる凜々しくも端正な面立ち。身分を隠したいはずこの子弟ではなかろうか、とさえ思つ。

さらには「照日御前は信用せぬ」とつっぱねると、彼は率直にみずからの策の欠点を認めた。若者にはありがちな、賢明さをひとたら誇りうとするがゆえの危うさもなく、思慮深い。切れ者だ。

「堅虫どの」

春時がようやく口を開くと、堅虫は眉をあげた。しかし春時はことばを繼がず、逡巡する。

そのときだつた。几帳のむこうより、

「父上」

と呼ぶ、か細い声が届いた。

「父上、お話が」

「なんだ瀬雲、客人がいるのだ。あとにしなさい」

「……あの」

少女の声だ。ひどくふるえた声だった。

春時が一礼して堅虫に告げた。

「私にはおかまいなく」

「いいえ」

堅虫は憤激し声を荒らげた。

「どうしたことだ、人払いしてよせつけられたはず」

「でも……」

少女は明らかにおびえていた。

しかしさの声、春時にはなにか切羽つまつた色も帶びていゆつに思え、

「……では、私はひとまず退出いたします」

「待たれ、しばらく」

春時は几帳に向かい呼び止めた。

「今は一大事、わがむすめになどかまう時では」

「いえ、何か。どうぞお話を」

春時は座を立ち、几帳に歩みよつた。

几帳のかげには白い寝衣に朽葉色の衣を羽織つた少女が小さく座つていた。

「お邪魔いたしました」

春時のあいさつに瀬雲は顔を上げた。

ひどく顔が青白い。手もふるえていた。

(病持ち、か)

油田の炎に照らされた瞳は、今にも涙をこぼしそうなほど潤んでいた。泣いているのか、それとも熱に侵されているのだろうか。瘧おじりを起こして寒気がし、ふるえているのかも知れぬ。そんな身体をして話があるところ。よほどのことに違いない。

(れんは無事だろうか)

村の小屋に残してきた中将の姫を、ふと思ひおこす。

姫は狙われている。それにあの姫を一人にしておくと、なにが起ころか分かったものではない。できるだけ早く帰らねば。

「堅虫ど」

ふり返つて春時は言つた。

「少し思案してまいります。つきましては、堅虫どにお願いが

第三話 散華（一）

春時は早朝の都大路を急いでいた。

ふところには堅虫より手に入れた上等の縄。東国の金を一袋。さすが右大臣家の家政を預かるだけのことはある。これで一生涯、寝て暮らせるといふもの。

（こまま雲隠れしてやうか）

なんて思うと、その次にはれんの顔を思い出す。

ほがらかで無垢な笑顔を。

「……ふん」

なんて人のいい奴だうつおれは、と春時は自嘲した。腹蔵はあつた。

ただ、堅虫に伝えるのはためらわる、そんな策だったからだ。目指すは「ヒトヤノツカサ」。

知る人があそこにはいる。しかし知る人がいることを堅虫に知られたくない。

それもまた、策を語らず邸を出た理由のひとつであった。

都の左京、人どおりの少ない寂しげなところに「ヒトヤノツカサ」はあつた。刑部省の管轄で、奈良の都における犯罪の刑罰をつかさどる役所だ。

門の前には梅檀せんだんの木が落葉後りようがというのに、実をつけたままだつた。門柱に掲げられた看板には「囚獄司しゆごくし」とある。薄汚れた門柱はところどころ腐食し、金具には緑青の鏽さびが浮いていた。そのくせ扉は幾重にも閉じられており、厳重に内外の行き来をさえぎっていた。

春時は懐刀を取り出した。

金色のさやに無骨な革張りの握り手。異様な風格を持つ逸品である。

春時は複雑な表情で、手の中のそれを見下ろしていた。

（どこの馬の骨、とあしらわれるよりは）

門番に懐刀を見せ、素早く口上を述べる。

門番が走り、やがて入れ替わりに初老の男がゆっくりと戻つてきた。

「「」案内します」

無表情で告げた初老の男のあとを追つた。

朝は早かつたが、竹簡の束を抱えた数人の仕丁しちようとすれ違つた。その束の多さは、この「ヒトヤノツカサ」で扱われるべき刑の執行数をあらわしている。もしくは執行後、処分すべきモノ・ヒトの数。あの竹簡にある名のうちいづれかは、夕刻になれば門外の梅檀に首がさらされるのかもしれない。

石造りの獄舎へとつづく暗い廊下を横目に、春時は奥へと歩く。つきあたりの房に案内されるまま入つた春時をむかえたのは、中年の、顔の丸い男だ。机の上の竹簡を持ったまま、顔を上げて春時に声をかけた。

「ああ、なつかしい」

「お久しぶりです。善永さま」

「東大寺の大仏開眼の儀以来かな。あれから数年、あんなことがあつてどうしているのか気にはかけていたのだよ。面差しは変わらぬが、すっかり大きくなり……」

囚獄大令史・善永は言葉は丁寧だが、態度は横柄だつた。
(後ろ盾を失つた若造には礼儀さえも惜しい、か)

春時はただ慇懃いんぎんにあいさつを返した。

「諸国を回遊し見聞を深めておりました。無沙汰をおわび申し上げます」

「それで突然、しかもこんな朝早くどうしたというのかね」

「かつて亡主のもとに貴殿がいらっしゃったことを思い出し、わらをもすがる思いで参りました」

「罪人の知り合いでもいる、という話かね。でも判決の後だとどうしようもできないよ。もつ竹簡を削り終えてしまつてはいるならなおさら」

「いいえ、そうではありません。このことは内密に願いたいのですが……どうかお譲り願えないと頼みにきたのです。罪人のしかばねを。それも身元知れぬ若い、できれば見目のよい少女を」
善永は薄気味悪そうに春時を眺めた。

「どういづ」

「東国の人産です」

春時は懐から親指ほどの袋を取り出し、善永の目の前に置いた。
さくり、と耳さわりのよい音がした。

「これは」

「大仏の年に献上されたものと同じ」

天平勝宝元年の東大寺での毘盧遮那仏開眼供養、これと同じ年に、
陸奥より黄金が献上されている。ありがたい大仏の開眼を演出する
このめでたい話は、世に広く知られ、ましてや都の役人なら末端まで
知つてしかるべきであった。

（これ以上説明させるなよ）

春時は無言で訴えた。

小役人が砂金袋など、まともに働きつけたところで一生に一度
挙めるものではない。

こんな物を持ちこんだ背後には、いざこの権門がついているか、
もしくはもつと別の何か、があるはず。すこし田端の利く役人ならば、
そう勘ぐるところだろう。

善永ののどが動く。ちらと春時を見やる。

春時は「手早く黙つて受け取れ」と念じつつ、だめ押しを述べた。
「司の物部のみなさまにぜひおとりなしを」

「了解した」

善永は袋をさつと袖口に隠し、

「ほかでもない、我が身にこの職を世話をしてくれた、亡き大將軍さまへの恩返しのつもりで引き受けよう」と細かく何度もうなづくと、部下の物部を呼びつけた。

ほどなく現れたのは、門からここまで案内した初老の男だ。彼に

案内されるままついてゆくと、牢獄の裏手の広場に出た。広場の真ん中には石畳があり、おんぼろの台がすえられている。落葉した木陰の裏に肉塊がのぞく。

刑場だ。

春時が物憂げに木陰に目をむけていると、一抱えある麻の包みを手渡された。初老の男は終始無言だった。春時も口を閉ざし、頭のみ深く下げた。

その足で、右大臣邸に向かつた。

(堅虫どのに)

報告は必要だらう。

(いや、事後報告でいいか。なにより時間が惜しい)
すっかり日輪が中空に輝いていた。れんを右大臣家の屋敷よりさらつた、三日田の朝のことである。

横佩大臣豊成公の室、照日御前。

美しい女性である。整然とした田鼻立ちはどこか作りものめいで
おり、冷たく輝く、冬の夜の星のような印象を与える。

照日御前はその美貌を牡丹図の扇で顔を隠し、目を細めていた。
春時は庭先に平伏している。外にいてもなお香料の香りがつよく
匂つた。

というのも、照日御前は床几でも御簾でもその身をへだてず、賤
しき輩である春時に、じかにその姿を見せているからだ。家にある
女がなにも間に置かず男と対面するなど、異例のことである。

「遺棄せよとのことでしたが、かような仕儀とあいなりました」

春時は麻の包みを板にのせてさし出した。

尊貴の方の首実検、本来ならば美酒をひたした唐櫃に納め、御首
をなぐさめるもの。だが、そんな敬意はまったく払わぬぞんざいき
わまる扱いを春時はしてみせたのだ。

照日御前は眉ひとつ動かさずにいた。一方、御前の横に侍る小侍
従なる女房はあからさまに身をひいてのけぞつた。さらには金切り
声でさわぎたてた。

「おぞましや、御前様にさようなものをお見せできようか」

「では証拠の品は、髪と、上掛のあしきぬくらべ」

「それでよろしく」

音は低いが、どこかなまめかしい。

その声の主こそ照日御前であった。

御前は桧扇ひのきあわせをもつ手をゆらりと上げて、小侍従に指図する。

小侍従は立ち上がりつて歩み出、春時を頭上から見おろした。

春時は緩慢に頭を上げて半開きの目で小侍従を見、首を後ろにや
つて代りに髪と錦の片へんをのせさせた。受け取る小侍従は春時の手
にわざと触れて、彼の顔をじっと眺めた。

「中将内侍はいかがであった」

御前の問いに、春時は淡々と答える。

「お幸せな最期」

幸せじゅと 照日御前は不愉快とばかり、むりに口を締めた。
「一晩明くるまで、楽しみました」

照日御前の眼が輝いた。冷ややかな表情に垣間見える微笑は、まるでねずみを捕らえた雌猫のようで、ひどく残酷な印象だったが、それはまた凄惨なまでに美しく見えた。

その微笑をして彼女は雄弁にその胸中を語る。

観音菩薩の慈悲により生を受けたという清らかな少女、それを盜賊まがいの男にさらわせ、凌辱させた上で命を奪つた。そこまでしたことを見かしてようやく、照日御前は満足をしめした。捨てよとは命じ、家から追い出し「中将の姫」を消した。しかしそれだけではあきたらず、が、心底には殺意があり、しかも女として姫を徹底的におとしめて存在を消し去りたかったのだ。

あらためてこの女の底深い怨念を見せつけられた思いがし、春時はわざかに眉を歪める。だがその顔はのぞかれまいと、ゆっくりと低頭した。

「ときに、八条悪王はいかがした」

「死にました」

照日御前はいかにも満足そうに微笑した。

「春時とやら、苦労であった」

厚く褒美をとらせよと命じる声に次いで、すそをはりつけぬ擦れが春時の耳に届く。御前は室の奥へと下がつたのだろう。

首のことには触れずに。

春時の顔にもじわりと笑いがこみあげてくる。

それを認めた小侍従が不審顔で言った。

「なにがおかしいのです」

しまつたと舌打ちしたいところを、

(ここは言いくるめるが無難)

と、あえて春時は冷笑を添えた。

「八条王を出し抜いたことを驚かないのには」「御前様は見抜いておいでよ。凡下の臣にあらず、盗人の頭」ときの下風に立つ者ではないと」

春時が顔を上げ小侍従に険しい目を向けると、「おお、怖い顔だこと」

と言いつつも、小侍従は軽やかに笑み、媚びを見せた。

「それより褒美をいただきたい」

「お立ちなさい。案内しましょ」

第二話 散華（四）

通された部屋はどこも外に面していない板間だつた。

中には葛籠^{つづら}や唐櫃^{からひ}がいくつも置いてあり、その間を人が通り抜け
るようで狭くるしい。日がささほの暗く、人が通つたとしてもさ
つと身を隠せるその空間は、真昼の密会に適しているといえそうだ。
この館に春時は数度出入りした。

だがこのように中にまで入り込んだことはない。

「小侍従どの、通してよいのか。お宝狙つて押しこむぞ」

「ふだんは大したものは置いていないわ」

小侍従はそう答えて流し目をくれた。

「おれの名を知つていたな」

「御前様が？ ええ、そうね」

「なぜだ。名乗つた覚えはない」

お前がもらしたのか、と春時は小侍従を問いつめた。

名を知つていたことはまだいい。だが、小侍従が言った「凡下の
目にあらず」は、春時にとつては捨て置ける話ではない。自らの身
の上を調べられたのでは……。

「意外。私とのこと、名を売り込むためでは」

「右大臣家がいかなるものか聞かせ給うただけだが」
小侍従がふうん、とどうでもよさそうに納得した。

「お尋ねになつたので答えたわ」

「御前が聞いた、と」

「後腐れがなければ良いのよ。その点、のちのちこの件を持ち出し
て厄介^{ごへん}ことになりかねない、卑しげな人相の自称王よりは、その後
ろで黙つて低頭しながら剣呑に目を光らせていた、そなたの方が良
いと」

「どうも春時の懸念は杞憂^{きう}らしい。

「それは日つきが悪いと暗に言つてゐるのか」

「黙つてると確かに怖いわね。口を開くと可笑しいけど……まあそれで御前様は、顔は覚えておられたので話を下問あそばされ……ああそうそう、その銅錢もまとめて持つていいって」

「姫の玉簪はどこだ？」

「その箱よ。物の怪に変じぬよつ、丁重に埋めてしまつてちょうどいい

「その分の代をもらえればね」

「わかつてゐるわよ」

白いあしきぬに巻かれた箱の中を春時は確認する。淡くなまめかしい白色の色合いと冷たい肌触り。玉を磨いてつぐられた簪は、中将の姫十歳のころ、天皇より下賜されたといつ。春時は丁寧に包みなおし、ふとこの奥にしまつた。

「ところで春時。御前様への話、本当なの？ あの女になつて下さいない、あてない中将姫なんかに」

「年増に飽きた」

まあひどい、と小侍従は派手にそっぽを向いた。

「この埋めあわせ、今宵してくれるのでしようつね」

「褒美を独り占めしてこの身が危ないんでね、すぐに京を離れる」

「まあ、まことひどい人！」

褒美の品をまとめ終えた春時は、早々に庫裏くりを出た。肩越しに小侍従を見て素つ気なく答える。

「先知れぬ賊の一夜や一夜の密か事など、とつとと忘れてしまつがいい」

「去りぬる秋ゆえに飽き果てられた、とこりとこりかしづら

小侍従は、強気に笑つてみせた。

かつて春時は小侍従から聞き出していた。

人に頼んでも中将の姫を始末する、照田御前の心底とはいかなるものかと。

それはなぜか。

春時は家の内実を知りたかったのだった。

なにが横佩大臣藤原豊成にとつて手ひどい打撃か、その中で春時が実現に動くことができるのになにか。それを見極めたかった。ために、賊徒の首領・八条王にも内密に小侍従に近づいた。

「御前様は以前は宮中に仕えておられ、従四位下、尚侍局じょうとうきょくづとめでおられたの。ところが右大臣さまの正妻とおなりになつて、先妻の「子息こむすこ」を「見け」覽らになると、みな自分と同じか、位がお高たかくいらっしゃる」

「中将の姫はたしか正三位下」

「「」子息の方々は宮中にお仕えですが、なかんずく姫は、琴を称賛されただけで三位、宮中に仕えもせぬのに尚侍局の中将というのだから、小憎らしいと思われたことでしょう」

「小憎らしい、とはいえ殺意までは覚えまい」

「良く思わない理由は他にもあつた。御前さまは男子をお生みになつたものの、右大臣さまが豊寿丸さまを可愛かわがられなかつた。中将の姫がいるからよ」

「三人の息子がすでにいたからではないのか。男子はこれ以上必要ないと」

「御前さまはそつお受けとめではなかつた。それもこれも、右大臣さまが亡き紫御前さまの面影を中将の姫に見出だしておいでだからよ。紫御前さまは皇孫にあらせられ、御前さまのご実家は橘氏、皇孫とはいえ臣籍だから、御血筋のうえでもかなわない。一重の意味での嫉妬を感じていらつしゃつたことでしょう」

「それが原因にしては
「いいえ、それも遠因ね
「では何が」

「直接の理由は、姫が豊寿丸さまを殺したこと」

「姫はまだ幼いはずだ。

なのに「殺した」とは、尋常のことではない。

「続きを」

「もとはほんの小さな恨みでしかなかった。でもそれが積年のうちに折り重なり、ついに御前さまは中将の姫に毒を盛ろうとお思いになつた」

「毒殺を？」

「いえ、死んでしまうとまずいでしょ？ 量は加減するの。それにあの変わり者の姫つたら毒や薬には詳しいから自分でなんとかするわ。でも苦しむくらいはするでしうから、おのが田の前でもがき苦しむのを御前様は見たかつたってわけ」

それほど忌避されている中将の姫とはどのような姫なのか。
琴の手は評判だがそれ以外といふと、この女の話からは悪印象しかいだけない。

まあ、その方が依頼の遂行 連れ去り遺棄するには、良心がとがめなくてよいが。

「だから御前様は姫を呼びつけて親子ともに甘いものを食すこととした。片方に毒を入れてね。でも企ては成らなかつたわ」

小侍従は笑いともため息ともつかぬ、小さな息を吐いた。

「姫が自分の白湯を、毒入りの白湯を、こともあろうに豊寿丸さまに飲ませてしまわされたから。小さな若君にはお命にかかる量だったのでしょうか、その夜昏睡し、翌明け方にはあっけなくこの世より旅立たれてしまった」

「不運というほかないな」

「そうね、不運ね」

姫が豊寿丸を殺したとするのは無理がある。

そのことは小侍従も分かつていいようだつた。不運、とさうりと
言い切つたのだから。しかし、この女は主人である御前の面前では

「姫のせい」と憤つてみせるに違ひない。

「その非業の日から、御前さまは中将の姫をわが子の仇とお定めに
なり、生靈におなりになるやもしれないほどの憎しみを抱いたとい
う話よ」

明らかに逆恨みだ。

そう断じる一方で、春時は照田御前の心情も理解できた。
ひとを憎むということは、理屈を越えた話だ。意に染まぬこと、
気に食わぬこと、他愛のないこと。それらが氷解することなく幾重
にも積みかさなるほど、憎しみは増幅する。やがて膨張しあえき
れなくなつた憎悪は、ぶつけるべき対象を手近な者に定めなければ
消化しきれない。御前はその矛先を姫に向けたのだ。ほかの誰かの
せいにしなければやりきれない悲嘆、それを姫を苦しめることで緩
和し、やがて姫の存在そのものを消し去ることを選んだ。

（同情はするや。だが、知つたことじやない）

藤原豊成が溺愛する姫を陥れ、そして褒美を得る。

春時の興味はただ、おのれの利得のみ。

第三話 散華（六）

そう、春時はおのれの利得にしか興味は持たないはずだった。にもかかわらず……。

かつて寝物語にのせて聞かされた話。

それらを思い起こしつ、春時は河原にひざまずいていた。見おろしているのは河原の盛り土。盛り土の下には、今しがた首と錢とを埋めたところだ。首の主は名も知らぬ若い女罪人。錢はある世へわたるための手間賃と、地守神への礼金。

この女は右大臣の姫の身代りを果たしたのだ、せめて地中より向こうでは「姫」であれば、春時は堅虫より得た錢の大半を、首にそえた。おそらくはこの若い女が一生かかっても持ち得なかつた額だろう。意味のないことかもしれない。自己満足かもしれない。

（この女がどんな罪でこのような結果に至つたのだろうか）

春時は無言のまま、漠然と思いをはせる。

つまらない盜み、殺し、あるいは冤罪。

女の首塚はいすれ訪れる明日の姿だ。いや、こうして葬られることさえなく路傍に果て、犬に食われて醜い姿をむらすのかもしれない。そんな末路を春時は恐れてはいないし、覚悟はできている。だが空しいゆく末だとは思う。

（れんなら経典でも読んだかもしない）

中将の姫は毎朝長谷寺にむかい、経典をひらき唱えていたという。ならば、今生からの旅立ちにふさわしい教えをこの首に説けたかもしれない。

春時は送るべき経典の一節さえも思い浮かばない。

経典に書かれた仏陀の教えを知れば、往く魂は今生に迷いを捨て、仏のおわす苦しみのない樂土へと旅立てる、という。かつて都のある寺で若い僧から聞かされた。あれは自分の存在に苦しみ、行く末

を迷っていたころだつた。ゆえにその話は春時の心をつよへとひく
続いている。かつての立場を捨て去つた今でさえも。

（もし真実なら、その教え……）

春時は首をかるく横にふつた。

早くことをすませて戻ろう。堅虫の元へゆき、後は褒美の品を今
後の隱遁生活に都合のよじよじ、わばかねばならないのだ。

そうだな、都ですべてをわばくのは危ない。道々で開いている市
などを回つた方がいいだろう。行く先を探られぬ程度に。そうして
いる時間がかなり要る。愚図愚図している場合ではないぞ。

春時は立ち上ると今一度、盛り土を見た。

布にくるまれたこの首を見、じう口にした女を思い出した。

「おぞましや、か」

その「じよば」を口にしてにわかにわき上がる、吐き気がこみ上がる
ような激しい不快感、胸につく嫌悪の念。

この悪感情を早々に消し去るべく、春時はかすれた笑いをもらつ
た。

「おぞましののは一体、誰だ」

堅虫は自らの上衣をむすめにかけた。

涙にまぶたを濡らすことを、おのれに禁じた。

平城京は霜月ともなれば真昼も冷える。火櫃の中には冷たくなつた炭の燃えかすだけが残つてゐる。堅虫はそれと知らず、ごく自然に指先をかざした。炭は燃えていはず、指先を暖めるものもない、指先は堅くかじかんだままだつた。ああ、炭がないのだ。しばらくして気づき、長い袖に腕をからませた。

春時が足音も立てず堅虫の寝所に忍び入る。冷たい指をさすりつづけている堅虫は、春時に気づかないままだつた。

「堅虫どの」

堅虫がわざかに顔を上げた。

春時はなによりも先に、広げられた堅虫の上衣に手をやつた。

「我がむすめ、瀬雲です」

唐突に堅虫が告げた。

その刹那、刑場の光景が春時の脳裏をよぎつた。木の陰に隠れていた肉塊。青白い脚や、黒くくすんだ面、幾重もの筋が竹の枝で刻まれた体、横線と模様を入墨した腕。不吉な想像をすぐさま否定して頭から追いやつた。

「看取つてやつてはくれませんか」

堅虫の顔に日がさすと、春時は軽い衝撃を受けた。

堅虫の顔は急に老いたかのよう。白っぽく乾き、目の下がふくらみ、肩を落として小さく縮んでいた。昨晩の颯爽とした精氣や意力がまぼろしのように残らず消え失せてしまつてゐる。

春時はすすめにしたがい上衣を取つた。

きつとそこには受け容れ難い事実があると分かつていながら、正面から受け止めるために。

ああ、と嘆息が漏れる。

「瀬雲どの。どうして」

「聞いていただけますか」

春時はただうなずいた。堅虫はうなずき返すと、あなたが去つた後のことです、と思いつめた口ぶりで話しあじめた。

「むすめは私にかく申しました。『私の首を差し出して下さー』

堅虫の切り出しに、すでに春時は気圧されていた。

堅虫は紫色の唇をなめると、続けて語つた。瀬雲は中将内侍さまと同じ年で、同じ階級好です。お顔も恐れながら、似ております。瀬雲の首を持参すれば御前様も信用するでしょう。

死ぬといつのか、と当然のことを見つ父親に、瀬雲はかぶりを振つた。

「姫さまの妙薬のおかげでいのち永らえていたこの身です。中将内侍さまがいらっしゃらねば病で先は長くありません。ほんのすこし、時期が早くなるだけのこと」

瀬雲の青白い顔はますます青くなつた。しかしその唇には強い意志が、まじりには固い決意が見える。堅虫は弁をつくして翻意を説いてみたが、瀬雲は肯首しようとした。刻を重ねたすえ、どう説きふせようとも決意をくつがえすことはない、とみた堅虫はこれ以上、なにも口出しさはできなかつた。

「姫さまよりいただいた薬」瀬雲は笹の葉の包みを広げて話す、「多くを服せば体内の臓腑に力がかかり死に至る、朝夕にひとつずつ分けるよう」と、姫さまはおおせでした。

その笹葉に乗せた白い粉末を、瀬雲は一気に口に入れた。

ささやきを春時は聞いた気がした。

いや、まさしくやきは確かに届いた。それは春時を心の底からふるえさせた。

「この首を、あのかたに……」

瀬雲の顔は静かにすべてを待つようだつた。

その永遠に向かつて眠る姿は、服用後に背中から転倒し、喀血し

て息絶えたという壮絶さを認めることができない。

春時は、莊厳とさえ感じる彼女のなきがらより田をそらせずといつた。

「この親子に不幸をもたらしたのは、自分なのか。

春時の血にまみれた手と、研ぐほどに使いこまれ鋭い光をはなつ
刀は、これまで幾つもの命を奪つてきたが、今回は罪業深い一つの
ものは使つてはいない。にもかかわらず どうしてだろう、より
深い後悔にさいなまれる。春時はひざの上で拳を握りしめる。

「私が参上したばかりに」

堅虫は首をふった。

「かように申されでは、我らは救われません」

「しかし」

春時が苦渋に満ちた顔でつぶやいた。

「手をうつた後なのです。替え玉の首を御前に……」

堅虫の目が大きく見ひらかれた。

「よもやその首、疑われはしまいか」

春時は顔をゆがめ、そしてさらなる後悔の念にしづめられた。

第三話 散華（八）

十中八九、疑われよう。持参したのは瀬雲の首と 照日御前は聰い女だ。

瀬雲のことを隠すわけにもいかない。物忌みに障るからだ。命ぜられた通りにすればよかつた。「山中に遺棄して戻つた」と言えば、それで照日御前の望みを果たせた。なのに首を用意して虚偽を告げ、それがよけいな疑いを招く種となるうとは。

いや、後悔ばかりしている場合ではない、と春時は思案する。行動は一刻を争う。照日御前が嗅ぎつけ追つ手をはなつ前に、春時はれんの身柄を確保し逃げおおせねばならない。

「ともかく早々に失礼致します」

礼もそこそこに立ち去りうとする春時を、堅虫はとどめた。

「しばらぐ」

彼は机に向かうと木簡を手にし、筆を走らせた。

「この簡を持つて姫さまをお連れになり、難波津へ」

「難波津」

「右大臣さまとなれば、かつての京都には別邸がござります」

「つい先ごろまで、大臣ご自身は太宰府へ下らずお過（つかさ）」になられていたとか」

「左様です。その難波の別邸の司（つかさ）は我れの知己で、姫さまの御生母であらせられる紫さまにお仕えした者の縁者。姫さまをかくまつてくれるに相違ありません」

そして我れよりは時宜をみて右大臣さまに事の次第を申し上げ、姫さまが晴れて都へとお戻りになれるよき折りをはかるうと思います」春時はまたも自分の浅慮に愕然とした。

襲いかかる魔手から逃れるのは喫緊の回避策で、あくまで当面の話。それが堅虫の思案だ。中将の姫が家を逃れるのは不自然で、邸で暮らせるよう尽力するほうが自然なのだ。なぜなら中将の姫は前

の右大臣の姫なのだから　家司である堅虫からすれば至極当然の
考えだつた。しかし春時は、逃れ続けることしか考えなかつた。

春時は瀬雲の眠る姿に目をやる。

穏やかな顔で、悲壯な陰りはどこにもない。恐れもせず動じもせず、おのが身の最期を受け入れたのだろう。

そして堅虫。彼は認めたくない事実を受け入れ、別人のごとくやつれはしたが、判断力は衰えていない。

（それに引きかえ、前後なく浮き足立つた自分は）

なんて未熟な、とおのれを責めたい。が、責めている時でもない。

「僭越な申しようかもしませんが」

春時は顔を上げた。

「」の堅虫、右公様の「悲嘆が今ようやく身にしみて分かりました。瀬雲を失つて初めて……ですから、姫さまには瀬雲の分まで、お幸せであつていただきたい」

堅虫は力をこめて言った。

「貴殿にお任せいたします。貴殿の元にあらば姫さまは」無事でいられる。信じております」

声が震えていた。春時にも無理しているのが分かる。

春時も無理に力をこめ、

「承知」

そう言つた。

夕刻。

日は陰り、風が強い。

春時は都を発つ乗馬の背で肩を狭め、片手でつよく衣服の胸元をつかむ。

堅虫のことば　　「信じる」とことば。

それは、思いもかけないほど大きい不安を春時に与えた。
(どうして俺を信じようなど)

春時は苦しさに耐えかね、丘に至つて馬をとどめた。

すすき原の向こうに都を望む。

日が翳くなり、風がさらりと吹きすさぶ。晴天なら立ちのぼる炊きの煙は厚い雲で見えず、また風でかき消えた。枯れすすきがあおられ、はげしく揺れ動く。

早く都を離れよ、と心は急いでいる。

しかし春時は、まだ馬の背にあつて遠方を眺め、胸をつかんでいた。

継母が憎悪に身をゆだね幾度も殺そうとし、一方では瀬雲という家司のむすめが身を呈する。双方に両極端な感情を抱かせ、春時に畏怖の念を起こさせた、十五歳の中将の姫。その中将の姫を自分に任せれば、無事でいられる、信じられるといつた。なぜ彼は明言したのか、自分にはきっと力不足だらう、ましてや自分の未熟さに気づかされたすぐ後だから。

重い荷を背負わされた。そんな息苦しさを春時は覚える。それでも彼は、自らに言い聞かせるように低くつぶやく。

「決して無駄にしやしない」

枯れすすきがつぶやきを受け入れるや、彼らは再び、夕陽の中を疾駆した。

第四話 蓬粥（一）

れんはひとり、朝の食事をしていた。

小屋の中はまだ暗く、かわらけに乗せたわらくずの、小さな炎をちらちら揺れている。れんはその光を時折確かめながら、食む音をかすかにもさせまいというように、ひつそりと食べていた。

春時が去り、一日が過ぎた。

れんの顔には疲れがみえる。夜もろくに眠つていらない。

一日めの昼は食事こそ吉隱のきよく親子に馳走になり、火をもらつて帰つたが、そのあとはすぐ元の小屋に帰つてきて、じつと帰りを待つていた。

（ここにいなくては、春時どのがおさがしになる）

れんは同じことばかり考えていた。

たまに違うことを考えたら火をじいと見つめて、（火も絶やしたら、わたくしではおこせないんだわ）と思ふ悩むばかりだった。

きよくは親切だった。

泊まつてゆくよう勧められた。

人を待つてているので断ると、吉隱の里は夜は冷える、と新しい筵むしろを持たせてくれた。一番立派な薪たきぎに火をともしてくれた。

れんは返すものも持たない。だから読経をあげた。すると、きよくの老母は涙を流して喜んだ。老母は仏心厚い人だったが、經典は知らなかつた。「ありがたや」と、れんに向かつて手を合わせ何度も拝みさえした。

よくよく話を聞くと、きよくの老母は若いころ、美濃國の住人であつたという。若かりし日に将来を誓つた恋人は、仕丁しちょうとして労役を果たすため都に赴いたのだが、そのまま戻つて来なかつた。悲嘆に暮れ、美濃の十一面の尊顔を持つ觀音菩薩に願いをかけて、恋い慕う人を追うこと六年。彼女は吉隱の里にたどり着き、思慕つるる

恋人と再会を果たしたのだつた。事情は問わずとも知れた　彼は帰らなかつたのではない、帰れなかつたのだ。寄る辺なくその日の糊口をぬらすこともままならず、吉隱の里の奥でひつそりと生き延びるのが精一杯の暮らしをしていたからだつた。それは再会より幾十年、ともに暮らして自然に身にしみて分かつた。

二人はもはなくとも幸せだつた。幸福の中で十年を過ごし、やがて背の君に先立たれた。それでも老母は嘆かなかつた。きよくという娘があつたからだ。

なにも思い残すことはない。そう思つていた。

でも欲を申しますなら。

老母は深い皺をよせ、れんにうちあけた。

死ぬ前に、あの觀音さまに、お礼を。

干飯の粥を食べ終わると、れんは力をこめてつぶやいた。

「わたくしがおばさまの代わりに、参ります」

外で、なにか物音がしている。

れんは箸を置いて立つた。妻戸を注意して開けそつと顔を外へのぞく。

曇り空の早朝だからか、あたりはうす暗く、風がかなり強かつた。刺すような冷氣に衿えりをかき合わせて、れんはちらと裏手をのぞいた。

第四話 蓬莱（一）

「ぶるぶる、とこきり立ち、馬が鼻を鳴らしてこる。

「まあ！」

れんは思わず声を上げた。

「まあ、お帰り、あお

「あお？」

馬の陰からひょっこりと顔がのぞき、れんは驚いた。

「ああ、びっくりしました。春時どのですか」

今まで馬に隠れて見えなかつたのだ。

春時はけげんそうな顔をしていた。

「」無事でお帰りになつたのですね。春時どの

「」の馬はあお、とこりのか

「」の子の名前です」

右大臣家の厩から家人に黙つて拵借し（要は「盗み」）、右大臣邸から泊瀬、この里までの往復を連れ回つた、この若い葦毛。名を「あお」というらしい。右大臣の姫が馬の名を知つてゐるとは驚きだ。もしかすると「あお」は名を持つ駿馬なのか、いや、そうだろう、それだけの働きをこいつはしたんだからな　数日をともに過ごした春時は「あお」に対しかなり感傷的になつていたらしい。たてがみをなでて独り言じみたことを言つ。

「頑張つてくれた。都の行帰り、品物の始末、いろいろと出来たのはこいつのお陰だな。よく休ませてやらないと

（春時どの、人でも違つたよつ）

彼の饒舌ぶりに、れんは「頑張つた」といつことばの重みを感じた。

「そんなに、大変でしたのね」

「」の馬、あお、という名だったのか

「今、わたくしが名付けました。良い名でしょ？」

春時は水をやる手を止めた。それは一瞬のことだったが、やがて
まったく疲れきったように長く、ため息をついた。

「春時どのはお疲れですわね」

「まあね……」

春時はぞんざいに答え、小屋に荷を入れて整え直した。

つづらの中には小さな袋が十ほどあり、あしきぬ数本はかなり質
のよいものだ。高価なものを少量持ち歩き、道々で普段使いの品や
食料に替え、暮らすつもりだった。

春時は、置いていった干飯がまだふたつ残っているのを見ていた。

余分に置いて去ったはず。ふつうであれば残るのはひとつだけ、
のはず。

「食を抜いたのか」

「えつ」

れんは虚をつかれて答えあぐねた。

春時が厳しい目を向ける。

「人と会つたのか」

(なんと勘のいい人でしょ)

驚きつつ、れんは正直に話した。

「夕餉を馳走になりました。の方たち、よい方たちでしたので「
「あなたにはよい方に見えただろうが、だましたり偽つたりするの
は難しくない。まして」

春時は言いよどみ、

「などと今さら、しかたないことか」と

と言葉を切った。

だが、れんの頭の中でせりふが続いていた。きっと春時は「」と言
いかけたに違いない。

おまえは世間知らずだ、分かるわけがない、と。
心にちくりととげが刺さる。

(たしかに、わたくしはものを知らないわ)

髪を切るくらいで猪を食べるくらいでおろおろと情けなく悩んだりした。食う元手のことを聞かされ、きょくたちの暮らしを見たあとは、なにも知らないのだと実感した。

それでも 分かることはある。

世の中にはたくさん的人がいる。食うために大臣の姫をさらう者もいれば、どこの者とも知れないのに親切な人もいる。それはものを知らなくても知っている。家を出てから知ったことだ。（なにも聞きもせず、親切にしてくれる人が、いたのです）

それはまぎれもない事実。

この目で見た、全身で感じた事実。

れんは自らにいい聞かせるように言いかえした。

「あの方たちはよい方でしたわ」

あきれたといわんばかりに、春時は首をふった。

れんは腹立たしくてならかつた。春時と目をあわせないよう馬に寄りそい、たてがみを優しくなでた。

「あお、あお。おまえはわたくしの話、聞いてくれるわね」

あおは、れんに応えるように鼻をすりよせる。

「よしよし、いい子ね」

れんはしつこい程に首をなでた。

「春時どの、短い間でしたが世話になりました。わたくし、巡礼の旅に出来ます」

「は？ 巡礼？ なにを言つ……」

春時は口にしかけた愚痴をとどめ、れんに向き直つて問い合わせた。

「いや、巡礼とはいつた、どこへ」

そんな彼を見ないように前を見、れんは声高らかに宣言した。

「美濃の国！」

第四話 蓬莱（二）

「ああだめだよ、」この先は。龍田の川が氾濫している「あれしきの雨で、ですか」

春時が首をひねった。

春時と同じく馬を曳いている壯年の男は、春時たちが向かおうとしている坂道を下つて戻ってきたところだつた。彼の馬の背には粗朶がのせてあり、粗朶の束にくくりつけた竹籠の中身は、まったく空っぽ。なんの仕事も果たさず帰つてきた、というところか。

「あれしきの雨でこんな具合だから、みな頭を悩ませているのだよ龍田の川の流れは川岸を削り、川がかき集めた泥の固まりが倒木を押し流している。轟々と音を立て、人が近づくことを許さない。

近寄らうとした祈祷の僧をも数人のみこんだらしいし、この前はどこそこの大連おおむらが濁流に流されたとか。川下の集落は農作物も水びだしでだめになり、自分たちが食つ分はあるか、今年払う租の分さえ残つていない。里の者は飢え死にも覚悟し、悲嘆に暮れているとか。そんなことを男は語つて聞かせた。

「なにしろ龍田川が使えねば難波津への行き交いもままならない。困つたものだよ」

「回り道はないのですか」

「回り道を使って峠を越えたところで、龍田の川ぞいは避けられん。無理だな。泊まろうにもこの山中のどの室屋むろやもひどいものぞ」

「龍田の神をまつる社殿の手前、あそここの室屋もですか。一段高いところにあつたはずですが」

「あれはまだ無事だつたが、分かつたものではないぞ」

春時はちらりと、あおの背に眠るれんを見た。

「きょうはもうすぐ夕暮れだ、山を降りて、平群へいぐんで宿を借りなさい」

「相談してみます」

「悪いことはいわない、無理はせんほうがいい」

春時が礼を述べると、男は念押ししてから坂を下つていった。
龍田川沿いを通れないなら、斑鳩からひたすら北、生駒の山より
北までゆくか、もしくは忍坂へ戻り南へ向かい、河内の方から。い
ずれにせよ難波津へ行くにはあまりに遠回りすぎる。

曇天で日陰もなく、時刻が解りづらいが、男が言い残した通り、
夕闇がせまっているのは確かだた。はやく今夜の宿りを決めねば
なるまい。

「れん、起きる」

「はると……」

れんが、ふらり、と態勢を崩して落馬しかける。

横からさつと春時が支えた。そして、あおにうつ伏せにしがみつ
かせた。

れんはまだ、ねぼけまなこだ。

「平群へ戻る」

れんはふつと、田を開いて背を伸ばした。

「平群、平群ですつて」

「この先は行けないようだ。一度出直す」

れんは田を丸くして、頭を横に何度も振りつけた。

だが、春時はあおの方向を逆にして、坂を下りる方向へと向けよ
うと手綱を曳いている。

主人に従い小刻みに方向を変えるあおのたてがみを、れんは必死
で引っ張つた。あおは勘弁してくれ、と訴えるように「ふるる」「ふるる」と
鼻を鳴らした。

「やめて、困ります」

「そつちこそやめひ」春時は鋭く言つた、「困つてこるのはあおの
方だ、どうしようと」

「夢を見たのです」

れんは思いつめた田で、春時を見た。

「川をなだめ、彼を救えと、わたくしに告げるのです。幾度も、悲
しそうに」

「だれが」

「それは」

「知り合いなのか」

れんはしばらく放心したようになつた。ぶつぶつと「だれ、だれ
かしら、うかがうの忘れてた」と唱えている。誰が告げたのか、そ
んなことは全く問題にしていなかつたようだ。

春時は軽くため息をついた。

「義理のない相手なら取り合つことはないだろう。それよりもう日
が暮れる。このあたりは狼が出るから、宿を得ないと命が
そこで春時は口を閉ざした。

れんはまぶたを伏せていた。春時の言い分など全く聞いていなか
つたろう。春時が「れん」と呼びかけると、れんはゆっくりとまぶ
たを上げ、どこを見るともなく宙に目をやつて、ため息をついた。
「わからない、どなただつたのでしよう」

春時は再び息をつく。まつたく……」の姫は。
「その夢は山に登りはじめてからか

「えつ」

「里で昼をとる前にその夢を見たのかどうかだよ」

「里を発つ前は、なかつた、はずです」

春時はうつむいて考える。

「今度は俺が譲る番かな」

「ゆずる?」

「れんは巡礼だかなんだかに行きかつたがやめた。俺は山を降りた
いがやめる。これで、おあいこだろ」

れんはじつと春時の顔を見つめた。

春時がばつが悪そうに微笑をし、

「龍田神の室屋で休む」

坂を上る方角へ、あおを向け直した。

「夢の主とやらを探すには山の中こいの方がよさそうだし」

「春時どー」

れんは飛び上がるほど喜び、また落馬寸前を助けられた。

第四話 蓬萊（二）（後書き）

現在、平群は「へぐり」と読みます。文中のルビは万葉かなの読みにあわせてみました。

第四話 蓬粥（四）

龍田社の室屋は龍田川ぞいの川下に建てられている。数十人ほどは収容できる大きさではあつたが、板葺きで、ひとたび強風が襲えば吹き飛ぶような粗末さでもあつた。

龍田川の濁流によつて、下流では何力所も岸がえぐり取られていった。室屋の下の地盤は無事ではあつたが、この先まったく無事という保証もなかつた。

室堂を仮の宿りとした旅人は、春時とれんだけだつた。川が氾濫しているうわさを聞き付けてか、行き交う旅人は元よりいない。日も落ちきつた今は底冷えがした。

春時が土間の薪に火を灯した。

闇の中だつた室屋の中が、ほのかな温かみを帯びた、黄色い光に満たされる。

「なにかを食べて体を暖めて眠るか」

春時の提案に、れんははりきつて縄袋から中身を取り出した。

「これ、昨日摘んだのです」

「蓬

「ゆでると美味しいとうかがい……」

両手にのせた山盛りの蓬はしなびていた。

（お世辞にも美味しいように見えない）

れんは自分で差し出しながらそう思い、口もつた。

「食べたことはない、か」

「はい。ゆでるつて、どのようにしたらよろしいのか、わからなくて」

「ゆでるとか以前に、湯の沸かし方に火のおこし方はれんはさらにばつが悪くなる。

「いいえ、存じません」

「見ておくといい

「はい」

「あ、火うち石がないな。いきなり難問か」

と、春時は棒どうしを組み合わせた道具を用意した。

「もつとも、難波津へゆけば火をおこす機会などないかもしれないが」

れんは少しだみしげな顔をし、春時の手際を見とどけた。手にした道具で互いをこすり合わせて火だねをおこし、わらしげ、炭とかけあわせて大きな火に育て上げる。一方で土鍋に水を入れ、かまどにかけた。水が沸いたところで米、そしてちぎった蓬を投入する。

れんは田の前の手順をはじめは座つて見ていたが、「春時どの、そちらに参つてよろしいですか」

肩越しにのぞき込み、または身を乗りだし、

「わあ、それはなんですか」

「もたれかかるな、危ない」

作業中に口を出し、質問を投げかけ、「なにをなさつているんですか」

「それは?」

さらには手をも出し、

「やけどするぞ!」

結局、最後には邪険にされたのだった。

「見ておけとおっしゃつたのは春時どんのじょ」

「見ておけばいいことは言つたが、邪魔しりとは言つてない」

「邪魔なんてしておりません」

春時の言行不一致と理屈っぽさには、れんもさすがに氣を悪くした。

が、あたたかな蓬粥よねがきがゆは確かにできあがつていた。

れん自身は嫌なことはとつと忘れる得な性分らしい。継母の意地悪を受けても忍耐強い、といつよつ氣にとめないで過ぐしてきたからだらつ。

春時が粥を器こよそおこ、皿に塩を持つてよしゅあひ、

「わあ！」

とはしゃいで不機嫌さもビリくやひ、器からあがる湯氣に顔を近づけて笑つた。

「あたたかいですわ」

「これで体も温まる」

「はい」

粥のなかの蓬は湯にひたされ、かぐわしい。

平たい棒でひとすくい、口こすると口の中こすりが広がる。

「美味しい。たいへん、美味しいです」

あんなにしわくぢやだつたのに。蓬さんがあつしゃつたことは正しかつたわ。れんはつれしかどひとときわ美味しいかも増すよつて思えるのだつた。

ふと、春時に田をやる。

春時もまんざりではなたれ。勢いよく食べている。れんは春時をまねして器を口こつけ粥をかきこんだ。

「あつづ！」

「慣れないまねをするから」

「ああ、舌がぴりりとします」

れんははじけるように笑いながら、田に涙を浮かべた。

「あたたかいものは、慣れておりませんもの」

邸では冷たいものしか食べなかつた。蒸したものも冷えていた。あわびに鮭、祝いの日には蘇チーズ 素材は贅を尽くしても、寒い中ならあたたかな粥の方が美味しい。

（難波津にゆき、そして都にもどればもひ、このよつな食事もいただけない）

れんは再び、ひとすくごくつ、惜しむよつて味わつた。

第四話 蓬萊（四）（後書き）

蘇の読みは「そ」。
飛鳥・奈良時代のチーズといわれています。
話中で解説するとテンポが悪いのでルビにチーズと書いてしました。

第四話 蓬粥（五）

粥を食べ終わったところで、春時は寝床の準備をはじめた。

土の上にじかに薄い板が並び、その上に筵い草が敷いたなりになつてゐる。寝床はこの筵だ。れんの昨晩の宿は床下のある小屋だった。さらにはひどい寝床といえる。

さすがに春時も右大臣の姫には苛酷と思つたが、板を真ん中によせ集め、

「板を多く重ねれば少しはましになる」

「大丈夫ですか」

れんは答えながら思つた。

きよく親子の住まいを訪れていて良かつた。かれらの住まいを田にしていなかつたとしたら、今日ほとんでもなことじりで眠らねばならない、と憂いたことだらう。

春時の心くばりも伝わつてくる。頭くびになしのもの言いだから、そうとは聞こえないけれど。

「春時どの、お気遣いありがとうございます」

板を重ね終えて手をはたこうとした春時は、ふと動きを止めた。

「難波津に行くまでに体を悪くさせたら後味が悪い」

「ええ。ありがたく存じます」

れんはこくりと笑つた。

それを見て、ことさら不愛想さを増した春時だった。

格子窓からのぞくのは闇。すでに外は夜のどばりを開いている。川の音は滔々とうとうと響きづけていた。

恐怖こわいとおぼえぬものの、安心もできない。

れんは笑顔を崩し、うつむき加減の顔に悲しみを宿す。

「まだ、誰なのか分かりません」

あれから声は聞こえない。

だが思い起こせば、耳の中にその悲鳴は鮮明によみがえる。やは

り声の主は分からぬ。ぴんとくるものもない。やはり知つている人ではないようだ。

ではなぜ、れんにだけ呼びかけるのだろう。

理由を知るためににはやはり、救いを求める声の主をさがし出すしかない。とはいえ今はその手立てどひにか、きつかけすら見いだせない。

「困りました。」そのまま分からぬのでは、

「あせることはないだろう」

春時はれんに背中を向け、かまどの炭を拾い入れながら答えた。

「あせります。助けを呼んでいるのですから」

「だれも行き交わないこのあたりで」

れんは訴えるように春時の背を見つめる。

「だからこそ、助けを欲しているのではないのでしょうか」

「正論だな」

「あれはきっと、幻ではありますん」

「助けを呼ぶ者がいないと思つてない」

「でしたら、わたくしたちしか」

すつと春時は立ち上がり、れんを見下ろした。

「足元も見えぬ中をさがし回るのか」

「それは」

れんはうつむいて口ごもる。

「今できる」とは休んで旅の疲れをとることだ

「わたくし、それほど疲れではおりません」

「居眠りして落馬しかけておいて」

れんは、ほおを真っ赤に染めた。

「わたくしは、馬に乗るのは、慣れていません、ですから」

「ここもいつ流されるか分かつたものじゃないから、しっかり眠るわけにもいかないが」

春時はれんの弁解を聞き流した。

「春時どのは、意地が悪いです」

「危険を避けるべく考えをめぐらせているだけだが、なにが意地が悪いって」

「分かりました。もう眠ります」

れんはほおをふくらませ、すねたように言った。そして顔をつんと背けると、春時を背にして体を横たえた。

しかし 床に伏したはいいが、眠れなかつた。

どうしてこう思つ通りにゆかないのだろう。つらつらと考えていた。

（たしかにこんな夜中にわたくし一人で歩くのは無理だわ。ついて来てもらわないと。でも、もし、春時どのでなくて、邸のだれかだつたら。怖がる？ いえ、怖がるどころか、夜闇の中、それも氾濫する川辺、だれもついて来てはくれないでしよう）

そもそもこの室堂に来るだけでも無茶だった。室堂には他にだれもいない。万人にも危険だから、人がいないのだろう。その危険をあえて春時はおかしたのだ。れんの我がままのために れんはそう考へると、自らの思慮のなさにあらためて落胆した。

なにも一人で歩けないのは夜中だけに限らない。陽光の下であれ、れんは方角を定めて歩くことすらできない。歩くだけでなく、どこかへ行くのも、食べるのも、眠る場所を用意するのも。万事に春時の手助けがなければ、なにもできない……。

それに、きよくについて行つたこと。頭ごなしに怒ることないのに、と思つたが無理もない。春時は出て行く前に忠告したはずだから当然、怒るはず。

迷惑ばかりかけている。

でも ただ迷惑だけで終わりたくない。せつかくここまで来たのだから。

「春時ど」

春時はため息まじりに答えた。

「まだ寝てないのか」

（自分こそ寝ていないのに）

と、少しすねる気持ちをおさえた。

「あの……春時どのは、猪を食べますか」

「猪を」

「はい。猪を」

「食べるが、それが？」

れんはうれしくなつた。

「あの、実は、昨晩、猪をご相伴にあずかつたのです。獸の肉を食べたのは、生まれて初めてでした。少し恐ろしかつたけど、おいしかつた」

春時のことばを少し待つたが、無言だつた。

れんは続けて語つた。

「だから……だからわたくし、お礼に美濃に行こう、と思いました。あのおばさまの生まれ故郷で、いま一度、觀音さまを拝したいとおっしゃつていました。あ、そのおばさまが、わたくしに猪をご馳走してくださつたんです。なにも聞かれませんでした。なにもわたくしのこと聞かないで、でも良くしてくれて。だから代わりに美濃へ、そう思つて。

わたくしにできるのは、そんなことくらいですから」

春時がようやく、ぽつりと答えた。

「それで美濃に」

「はい」

しばらぐお互に沈黙を守る。

遠くで、ぱしゃあん、と水音がします。川に大きなものが落ちたのかもしれない。

「いざれ機会はある。家に戻り着いたら全て望むがままだら」

望むがまま。

果たしてそうだろうか。少なくとも「一度と猪を食べぬ」とはない。

あたたかな蓬粥だつて。

「そうですね」

れんは筵をつかみ、その身を包みなおす。

(望むが、まま……)

ふさいだ田尻から涙がひとつじ、じぼれ落ちた。

第四話 蓬粥（六）

田を伏せる春時の耳に届く、童の声。^{わいべ}

わくらわくら

その声の主を探すべく、まぶたを上げた。
行く手は乳白色の霧に包まれている。

しかし、旅の道程で見慣れた風景はここにはない。あの気の滅入るような湿氣と行く手をさえぎる山々、その峰に重く垂れ込める雲はいざこへ去つたのか。草の薰りも血の臭いは。

ただ真白なる眼前の光景を どこへ向かうかも分からず、春時は歩きはじめた。

童の声だけを頼りに、方角も定まらぬままに。

童はひとり川辺に座つていた。

黒い髪とほんのり赤い頬は、白い面にひとりわ異彩を放つ。彼の足元には川が流れていて、その川は泥と岩を含んで濁り、折れた枝と河原の泥をも流していざこへと去ろうとしている。

童はそれをつまらなそうに、足をぶらづぶらづと揺らしながら眺めていた。

ふぶかぬままに ちりゆくを

にわかに風景が色づきだした。

川に沿つて紅葉が並んでいる。穏やかな晩秋の光のもとならば、次から次へと競い合つように落葉した紅葉は、川面を紅に染めて流れて行く。そして、川は燃えるように咲きさかるはずだった。だが今、天は乱れている。紅葉は鋭い風にとばされ、否となく濁流へと身を投げる。すると美しい紅の色は、見る影も無く土色に染まり、

やがて汚泥の中へと沈んで消えてしまつ。

しかし、春時の思考は情景の妙に流されることはない。

（なぜ紅葉の中で桜の歌を）

童の輪郭がはつきりと見えてきた。

歌声で春時を招いたのは、十歳に満たぬ、あどけない少女。髪を短く切り、顔は浅黒く汚れていて、粗末な衣服に身を包んでいた。

「まさき
真鷺」

春時はぐつと睡をのみ、そしてつづやいた。

「いるはずがない。こんなところに。だから、夢まぼろしだ相違ない」

女が泣いている。

振り返ると、女はすぐ近くにいた。

泣き叫び、狂ったように身もだえし、川へ飛び込もうとしている。春時が走り寄ると、女はとびかかり彼に両手でしがみついた。そして異様な声で泣きわめき、髪をふり乱して地団駄を踏むのだ。『わたくしの子が』女は叫んだ、『龍田の神にさらわれる、助けて助けてください！』

「あなたの子……？」

あわれとおもえ　たつたのかみかみ
すくいたまへ　すくいたまへ

春時は女の手を振り払い、川へと駆けた。

すると田の前で、歌っていた童の下の土が川の流れにえぐり取られ、童は土の龍と化した濁流の中へとその姿を消してしまつ。

「ああ！」

女の悲嘆が鋭く胸に突き刺さる。その一方、

闇の、その奥から。

ほど近くから、やああ、と流水の音が聞こえていた。

まるで大粒の雨でも降っているような音。石ころの転がる音も交

じっていた。

「夢……」

うつつの世。

そういうえば、眠りに落ちる前もそうだった。

（あれは龍田の川の音だ）

童、歌、叫ぶ女、そして。

「真鷺」

何だつたのか。

夢占など知る由もない春時は、それらがなにを意味するか、判じるすべもない。ただ、額から首から流れ落ちる異様なまでの汗が一層、得体の知れぬ不安をかきたてる。

「落ち着けよ」

彼は自分にいいきかせて汗を拭つた。

そして周りの様子を改めて確認した。

ここは龍田神の祀堂の川下に建てられた室屋。格子窓から光がもれてい。すでに外は朝を迎えていた。川と木々がせめぎあう音が耳につく。川が氾濫しているうわさを聞き付けてか、ここを仮の宿りとした旅人は、れんと春時のふたりきり。そのはずだ。

「……れん」

れんの姿はどこにも、ない。

春時の体に悪寒が走る。

「どこに消えた」

そして、新たな音。

龍田神の宮からだらうか。鐘音が響きはじめた。

第五話 神廟（一）

朝ぼらけの光にれんは目を細めた。

堂宇の棧の間から崖下に、ぼんやりとした視界の中に双影が形をなしてきた。影はふたり、いずれも僧形。ひざまで泥にまみれ、身を包む衣も朱塗を引きはがしたようなまだら模様であつた。彼らは速足で川沿いの土手を歩んで来る。朝日を望むや、平群へぐりの里から上つて来たのかもしねない。

「治水を祈願するそくな」

白い唐様の若者が一步、れんに近寄る。

「朝から御苦労なことじや。無駄なことと知りつつも祈祷をあげ、説法し、仏典を読む。今日は幾人が川に飲み込まれるのであらうな」
「無駄なこと。どうしてそはしきりと、無駄と断じるのです」
「龍田の川の龍神の怒り、望み。それを知りうともせぬ。ただ形ばかりの祈祷に頼ろうといつ心積もりらし」

「それは」

れんは迷いつつ弁明を述べた。

「あの方々は、命ぜられてここにいらしたのでしょ。ですから」「命令ゆえ、いたしかの思量もなくともよい、か

れんは黙つて考える。

「すめらみことは元来、我的ことばを聞く義務がある。ゆえに衆生より推戴されまつり」とを執る。にもかかわらず義務も果たさず、僧どもに我を治めよと命じたのだ。本末転倒とはこのことぞ。すめらみことは残酷なものであるよ」

「あなたも残酷です」

れんは思ったことをそのまま口にした。

青年が冷笑する。

「そなたに何が分からうか」

れんは一瞬、とまどつた。

(いえ、もの知らずがなんだというの)
しかし首をふり、思い直して言った。

「世の人々が困つております。お誘いどおり、わたくしは参りました。ですからわたくしの望みを叶えてください。どうか川を鎮めてください」

「中将内侍。ここは道半ば。参るのはここから」

「ついて参りましたら、鎮めてくださいますか」

青年がれんの顔を見下ろした。

美しい顔立ち。だが微笑をたたえる冷たき面相は、人間離れしていた。

れんは心底寒気がした。畏れ、だらうか。これ以上田をあわせていられず、ごまかすようにみずからの衣を見直した。

乾いた泥がこびりつき、さながら灰色の衣のようだつた。僧と同じ田にあつたのだから。

この堂にたどり着くまで、どれだけ難渋したことか。峠を越すと道は下り、曲がりくねつていた。しかしそう左手は山、崖がそびえ立ち、右は川が濁流を作りだしている。山道はひどかつた。ただでさえ狭隘な足元は泥まみれで、こじりこつした石がいたるところに転がり足をとられる。土崩れで半ばふさがれている箇所もあれば、水びだしですねの半ばまでが浸かってしまうぬかるみもある。ひどいところは濁流に道の半分が流されかけていた。

青年はそんな道を雲の上を歩くように進み、れんをこの堂に導いたのだ。

(この方は人にはあらず。もしや、龍田の神)

「始まつたぞ」

摩迦補陀羅

陀羅尼の誦経

それは先程の僧たちの仕業である

う。

神南大龍神、
結界三里内、

使打出水流、

急急如律令 束、

青年の身に葛かずらで編いじんだ縄なわがからみつく。

「こざかしい練行僧だいぎそうども」

彼は嘲あざるような笑わらみをうかべた。

「踊おどれ」

彼は両手指先を動かした。大きく、円を描くように。やがて川面はゆるやかに、渦を描きはじめる。

一方、鉢の連打とともに僧らが唱和する。

縛 大龍神、
緊 大龍神、

(この方は龍神)

やはり、とれんは思った。

(龍田の川の龍神。この方が、この川を荒れ狂わせて)

ぎりぎりと葛縄は青年を締めつけた。まるで意志を持つ生き物のよつに、捕らえた獲物をけつして逃すまいと、腕・足・胴の動きを許さない。青年の真白い束帶もろとも幾重にも重なりあい、指の動きすら封じこめ、首から下は身じろぎすらかなわなくなっている。

「しつこい奴やつこらめ」

青年がふつと笑わらい、そして大音声を発した。

「解わか!」

突如、川に渦巻く中心から一筋の水が噴きあげた。激しく空をはしる水は青年の体をかすめ、荒縄を切り裂いた。断片を霧が包みこむ、縄は微塵になり、全く形をどじめず消え去つた。

「それ、返り討ちにしてやる!」

彼が腕をふり上げるや、

「返!」

川から泥水が噴きあがる。

あつ、とれんは叫んだ。

一僧は鉢を投げ出し、立ち上がり逃げよつとした。が、なすすべなく中腰で 叫ぶ時すら『えられぬまま、濁流に丸飲みにされた。

れんは再び震えた。ぼつ然と、龍の背の『』とき乱れた川面を見つめた。

青年はふふ、と笑う。

「すめらみことの病の治癒は得意なれど、水難は不得手と見ゆる」

助けて、助けてくれ。

れんははつと息をのんだ。

（助けなくては！）

思うや否や泥の『』びり付く袖をなぎ、堂の外へと飛び出さうとするも、寸前で足をとどめた。

「そんな……」

走るべき道はなかつた。この祠は荒れ狂う川を田下に、中空に浮かんでいた。

第五話 神廟（一）

「ああ……」

れんは嘆息をもらし、なすすべなくしゃがみこむ。
残酷な光景はまぶたを閉ざしても、目に焼きついている。

二人の僧たち。

その、流されるその瞬間。

（流されていった、目前で、なのに、わたくしはただ
なにもしなかった。）

この祠堂の中でつまらない言い争いをしているより、誦経を聞いて
いるより、他になにかができただらうに。

（そう、なにかができたはず）

彼らは闇中、並んで端座し呪詞を唱和していた。

（川を鎮めたい、それはわたくしの祈りと同じ。でしたら
その一言一句、れんは思い起^シこす。）

龍田の川よ鎮まりたまえ、

頭に、身体そのものに、じわりと染み入つてくる。

龍神よ怒りを鎮めたまえ、
ちからなき人々を救いたまえ……

「神南大龍神、結界三里内、
使打出水流、急急如律令」

節回しをそえて自然と口をついて出た、それは僧らのと違わぬ呪

言。

「何だと」

しかし違うのは青年 もとい龍神があわてはじめたこと。

れんは変化に気づかない。僧たちの鎮めの祈りをなさん」とだけに集中する。

「やめ……」

龍神は激しく息をつき、身じろぎする。やがて苦しげにひざをついた彼は、れんをつかもつと腕を回しもがく。しかしその腕は空を切り、やがては行き場もなくだらりと垂れる。

やめろ。

さらには口を裂けんばかりに開いて叫んだ。やめろ、中将内侍！
れんは望みに従つたかのよう、誦経を止めた。

「あなたこそやめぐださ！」

そして手のひらを龍神にかざし、印相を結んでその双眸をとらえる。

「わつとお困りになるのは、わづく、おばばせぬ……みたいな、いつも困つている人たちなんです。みかども、民のことを考えているはずです。だからあなたを鎮めよと、聖の旨わざをまことにお命じになられた

よつやく龍神の口から音がもれたが、うなるだけで声にならず、ただ口惜しそうにれんを睨めつける。

「あなたさまも、苦しみから逃れたいはず、」
れんはたじろがなかつた。

「さあ、川を、鎮めてくださいませ！」

龍神の白い顔はなお蒼白になり、懇願とも怒りともつかぬ相貌があらわとなつた。

はじめに約したとおりだ。

「わたくしが行けば、よろしくのですか

龍神はうなずいた。

「偽りではありませんね」

「我は神。神は偽りを口にせぬ。言葉の力を備えるため、偽

りは許されぬ理。^{ことわり}

「言挙げとは、発したことばがほととぎになるところ」

そうだ。

れんは思案した末、

「あなたからお先に、川をお鎮めください」と、龍神に要求した。

そなたが先じや。譲れはせぬ。

「どうしてです」

人は嘘をつく。

「わたくし、嘘なんて申しません！」

れんが印相を結ぶ手に力をいた。

龍神はわずかに顔をしかめるが、れんはそれに気づかなかつた。

「だいたい、あなたが急きたてたではありませんか！ 早く来ねば室屋を流してしまうぞ、つて。わたくしは、せめて文でも置いて行こうかしら、と思つていたのです。それをあなたさまが、あんまりおつしやるから」

我が知ることではない。

「龍神さまは、ずっとと、この今までよいのですか」

よからう。術が解けるまでこの今までいよう。

龍神は笑うそぶりを見せた。

そなたより我の方が長く生きるぞうしな。

「そんな。ずるいわ！」

確かに今は自分が優位にある。しかしそれは龍神にとつて脅威ではないのだ。ただ待てばいい。

龍神の傲岸な態度ははつたりなどではない。

(春時どの)

れんは頼りなげな目を泳がせる。

(どうしよう。このままだなんて。春時どのは、わたくしをさがしまわっているかしら)

さがしていれば申しわけがない。

さがしていなければ？

（やつかい払いできた、と思っているかも）
ふとれんは悲しく思つたのだが……。

（いいえ、そんなことを考へてゐる場合ではないわ）

れんは氣をとりなおす。

「龍神さま。そもそも、わたくしがここに来たのは、川を鎮めてもらうためです。助けを呼ぶ声がどなたなのか、それで助けることはできはしないかと、やつて來たのです」

呪詞を返されて川にのみ込まれた僧たち。かれらは「助けよ」とはじめに告げた者とは違つた。声が違う、そして雰囲氣も。では、だれなのか。

（声を聞いたのはわたくしだけ。このままでは、川は鎮まるかもしれないけれど……わたくしはすべて……投げ出してしまつ）難波津にゆき、味方になつてくれるという右大臣家別業の者に会わねば。

美濃に行くこともできないかもしない。きよくの老母に約したはずなのに。

それには。

（春時どの……）

れんの印相がゆるむ。

龍神はそれを見逃しはしなかつた。

「解！」

龍神、渾身の雄叫びが轟いた。

周囲の水が一斉に水滴をはじき上げ、何本もの水柱が激しく天上へと噴き上がる。

叫ぶ間もない。れんははじき飛ばされた。思わずかたく眼をつぶつた。

落する。驚愕の声すら上げられぬまま いつまでもいつまでも、落ちきる先もなくひたすら落ちていった。それを「落ちる」と呼ぶのか 「下」から抵抗を受けながら「上」からも抑え込まれ

る感覚に包まれていた。

れんが怖々、眼を細める。

ただ下へ下へと暗闇に向かっている。

（せめて、わたくしは、川を鎮めねば）

今度はしつかり両目を開いた。

ハつ頭の水龍が視界にとびこんだ。

水柱が林立する中、獣は誇るがごとく咆哮し、その声はれんの全身を震わせた。

「龍神」

逆さまに浮遊している。

落ちてはいない。

上下が逆転しているなんておかしい。

「これは……」

なにかが分かりかけた　とたん、れんは水の中に投げ出された。れんはもがいた。泥水に袖がからまり腕が動かない。衣は水を吸い重くなり、いざれ溺れ沈もうとしている。それでも、もがく。ほかになすすべがない。

第五話 神南（二）

春時は目を細めた。

川岸に打ち上げられている、黒い姿に気づいたのだ。

「人、か」

れんではない。黒衣ならば。

春時はそれに速足で近づいた。

なんでもいい、てがかりが要る。闇雲にれんを探すよりはましだ。足元は泥まみれで、走ることさえままならない。速足もひと苦労で、下手を踏むとぬかるみに足を取られ、川に転落しかねない。背負う剣を杖がわりに、慎重に、しかし急いで、岸に身をよせた。

黒い姿は剃髪ていはつの僧形一人だった。

ぐつたりと体を横たえ、意識は失っている。

春時は僧の胸元に手と耳をあてた。

息づかいがほとんどない。しかし胸の鼓動はしっかりとある。胸を何度も圧迫した。

僧が息をふきかえした。苦しげにあえぐ。

川上から流されてきたらしい。着衣はさほど乱れていない。つい今しがた川に流れつき、運よくすぐに助かつたところだろうか。そういえば室屋を出るまえ、社殿のある方角に鉦しょうの音を聞いた。治水祈願でも行う練行僧が打ち鳴らしていたのだろう。だが今はその音もやんんでいる。ということは呪法は終わったのか。それもこの川の流れだ。結果は失敗に。

とすれば、この御仁は。

「しつかり」

「は……」

僧があえいだ。

春時が背中をたたくと、僧は少し水を吐いた。

「上の社で」

僧はときおり咳をまじえつつ、息を整えゆっくり話した。

「聖上の御勅により、龍田の川を治める祈願を」

「人を見ませんでしたか」

「春時には天皇の勅願などどうでもよい話だ。」

「人を」

「童子頭の女子です」

「い、いや」

僧は幾度となくかぶりをふつた。

「我らは朝から川下の、水びだしの里からここへ登り着いたが、道途もそのような者は、見かけなかつた」

「確かですか」

「確かだ」

春時はひとたび黙した。

（一体どこへ行つたのだ、れん）

「若者よ。その童子とやうはそなたの」

「血縁の者」

「然様か……残念だが流されてしもうたのでは」

（そんなことはとつくに考えたさ）

「といらつく春時だつたが、
助けて。

「えつ」

「と、とつさに身をこわばらせた。

「いかがした」

僧がけげんそうに春時を見る。

春時はすぐ冷静さをとりもどした。

「いえ、なにも」

僧には聞こえなかつたのだろうか。では先ほどのは空耳か。

（いや、今、是非を問うのは早計）

空耳か否か。よく見きわめて……

助けてください。

今度こそ春時は確信した。

夢で泣き叫んだ母親だ。春時にとりすがつた女だ。確信するだけではない。彼はさらに推測を深めた。
(もし、れんが聞いたのと同じ者ならば)
れんもさがし回っているのではないか。

闇夜の中でさえ飛び出して行かんばかりだったのだ。いてもたつてもいられず、朝一番で室屋を出たのかもしれない。ものおじせず、後先も考えず動く姫のことだから。毎度、迷惑な行動だと思うが、もうどうでもいい。

それならば。

世間知らずの姫にしつこく「助けよ」と告げた、いつそはた迷惑な願主とやらをさがし出せばいい。れんも同時に見つかるかもしれない。

ほかに手がかりもない。だめで元々だ。
(もつと呼びかけてくれないだろうか)

春時は神経をとき澄ませた。

やがて、か細くすすり泣くかのような嘆きを受けとめる。
わが子が、流されてしまつ。

「もつと上に」

春時は即、ぬかるむ坂を登りはじめた。

「上は行けぬぞ、危なすぎる」

僧が忠告したが春時は聞く耳を持たなかつた。
(あなたは黙つてくれ)

うつつの声は聞き取りの邪魔となる。夢とおぼしき声のみが頬みの綱。その綱をたぐり寄せながら、追いかけ、進む。春時ど。

「れん」

春時は心高ぶつたが、落ちつけと直ちに言つてきかせた。かすかな

希望に期待が過剰に高ぶり、無意味に空回りせぬよう。

「待ちたまえ！」

僧もまた、春時の背を追つてあやうい足取りで泥道を登つてゆく。やがて彼らは川面に人ひとりの姿を認めた。

第五話 神南(四)

「厳妙どの！」

練行僧が叫んだ。

その先には中年の僧。沈みかけて、首から上だけを川面から出し、なんとか命をつないでいる有様であった。

「おお、厳妙どの、よくぞ流されずに」

「あの細木が命綱となっていたかと」

春時が指摘したのは僧厳妙の両腕が抱えている細い木の幹だった。

「しかし細すぎる。早くせねば木もろとも流されて」

まさに厳妙の命は風前のともしび。川の流れは強い。つかまつているだけで精一杯。自力で岸に上がる力は残されてはいまい。

「厳妙どの、今、お助けします！」

かたわらの僧が喜び半分に呼びかける中、春時は落胆していた。

(れんはいない)

声に従つたがれんはいなかつた。

れんが訴えていたのもこの僧たちではない、と春時は結論付けた。練行僧らは今朝、山に来たと言つた。一方、れんが助けを求めていふと訴えはじめたのは昨晩から。時間が前後している。ゆえに、れんに救いを求めた「別のだれか」が存在するはず。

しかしそれは何処にいる？

助けてください！

今度ははつきりと聞こえた。

「だれを？ だれを助けると」

せかされた春時はいらだちをあらわにした。

道連れに、流されてしまします！

「道連れ。ということは僧とともにいる

僧は一人だ。では人ではない？

信じ難いが、衣服か、持ち物か。

厳妙が手にしているのは細枝くらいだ。その木の根元は脆弱で、
厳妙が引っこ抜くが早いか、根こそぎさらわれるのが早いか
妙か木か、いずれかが力つきれば、いずれかの「道連れ」に
「あの細い木が！」

「たつ、助けてください」

厳妙がかすれた声をしぶりあげた。

「玄岳どの、どうか、後生です、お助けを」

「厳妙どの、今少し耐えてください！」

僧玄岳が岸から身を乗り出し、やみくもに腕を伸ばした。

「危ない」

春時は彼をとつおさえ、

「貴僧まで巻き添えになる」

と言いながら考えをめぐらせた。

（まず僧、それから若木の順だ）

時間はあまりない。木の根元はすでに危うい。厳妙も力尽きるこ
はほどないだろ？

春時は周囲を見まわした。道のわきの折れ枝が山積する中、太く
長めの枝がある。それを春時は見てとった。ひっぱり出すと二尺は
あり、しつかりした枝ぶりである。

春時は肩にかけた剣の革ひもをはずし、枝に結びつけた。

「剣をかける輪の部分に手を入れれば、水からひき上げやすい」

「名案！」

僧と春時はさっそく枝を降ろした。

「つかまつてください」

「輪に手を通して」

厳妙はおそるおそる小枝から片手を離したが、

「おお！」

と叫んだと同時に流されかけた。

が、離した片手はしつかり革ひもを握っていた。

「今だ」

玄岳と春時は一息に引き上げた。

「今、少し！」

引き上げきつたとたん、彼らは泥の地面にそろって崩れ落ちた。

春時が身を起こしながら、

「御身ご無事か！」

と叫ぶと、声ならぬ呻きを厳妙は声をもらした。玄岳も厳妙も身を起こす余力もないのか、そろつて顔だけ上げ荒い息を吐いていた。春時は苦みまじりの笑みを一瞬のみ浮かべ、泥から起き上がった。若木の枝。すでに葉は流されあわれな姿だ。やがて枝も折られ、根元から濁流の藻屑と消えるだろう。

どう「救う」のかは難題だった。相手が人なら「つかめば引き上げよう」と言える。相手が動けない木では、春時が動くしかない。人ひとり助けるより危険かもしれない。

（なぜこんなことに必死になつてゐるんだ）

ふと思つたが、春時は腕を伸ばした。

届かない。

さらに身を乗り出した。

「若木を抜こうといふのですか」

玄岳が背後から尋ねた。

春時は無理な姿勢でいて、声も出せないでいる。玄岳はそれ以上尋ねなかつた。

「手伝いましょう」

春時はちらりと彼らを見、「ありがたい」と口だけを動かした。

「我はここで枝を支えています。貴殿は革ひもを身にしばつて下へ」

春時は再度言い直した。

「ありがたい」

玄岳の申し出どおり、春時は革ひもで自身をしばりつけた。厳妙なる僧も回復したか、二人がかりで地面にさした棒を支えた。地面が泥まみれなため、それでも万全ではない。僧たちは力をこめた。春時もできるだけ上の二人の負担にならぬよう、そろりと岸の斜面

をつたい降りた。

枝葉の上で足をとどめた。若木は足元、すぐ下だった。春時はそろりと中腰になり、手を伸ばした。平地ならばなんのことはない姿勢も、ぬかるむ岸の斜面では厳しい。無理な体勢をじわり、じわりと動かし、ようやく枝に触れた。指がふるえる。

春時が息をのんだ。刹那、根元をにぎりしめた。

(抜けたか)

手元を動かした。根元はゆれている。

いま少し春時が体を伸ばす。と、

「水がつ！」

僧たちが狼狽の態で叫んだ。

春時が顔を上げると、土色の龍が牙をむき襲いかかっただ。春時と僧たちもろとも呑みこもうとするその時、彼らはただぼう然と、その恐ろしき顔を眺めるだけだった。

第五話 神廟（五）

「意のままにならぬなら、我の水で封じこめ連れ去つてくれようか。

「荒れ狂つた渦巻く奔流にとらわれ、れんは息もできずひたすらもがきつづける。五感はおろか冷たれやれ忘れ、意識が薄らいでゆく。

（こや……）

てのひらの数珠をつよく握りしめた。意識をつなぎとめるため、決して離すこと。

（こ……すめ……な……いと……わたく……）

（まな）
田を開あ……見よ……。

誰かが命じる。

れんは従つた。ふたたびまぶたを開く。

泥の中なのに前が見える。なにかが見える。

（……蓮）

幻か。蓮は泥沼の中で咲く。でもここは川……
れんは手をのばす。手首に揺れる数珠が輝く。蓮の茎に、手が届く。

（もひりし……）

思ひおつにはならぬぞ。

龍神は息をのんで頭上を見上げた。

（荷葉の座）

荷葉　　蓮の葉がゆつくつと、龍神の田線までおりてくる。
葉の上には、白土一色に染まつた異形の者が胸をおさえて激しく咳きこんでいた。それがれんだとこいことは即座に分かった。

「中将内侍、いや觀音菩薩のしわざか。我が術を……かくもやすやすと破るとば」

れんは蓮の葉の上で荒い息を整えていた。川から引き上げられたばかり、無理はない。全身泥まみれだが、ぬぐつことも忘れて空気を確保しようとしていた。しかし、れんはなきない顔で龍神を見上げた。

「つゆ、龍神さま」

龍神は黙つてれんに険しい目を向ける。

「仰いましたね。まだ道半ば。参るのせ、ここから、と。わたくし、お供するのは、かまわないのです」

と龍神は空咳をし、その後深呼吸をしてから続ける。

「……ですが、時を、くだれこませ」

「時をとな」

「はい。まず……わたくしは家に帰り、父上に安心してもらわねばなりません。そして美濃に、觀音菩薩のもとへ、お参りせねばなりません。おばざさまの為に、代わりに参りますと、やう約したのです」

「本当に父とおばざさまのみが為か」

「本当に、と、お疑いなのは」

「分からねばよ」

龍神はわざかに笑つた。

「それから、まだあります。どなたから、川を鎮め彼を助けよとのお声を聞いております。あの声の方は、あなたさまでは」「ぞいません。祖の主がどなたかは存じませんが、わたくしはその方を助けねばならないのです」

「ふむ」

龍神は氷の「」とく厳しい容貌に戻る。

「だれがそなたにこうしているか、私は知つてある」

れんは狼狽した。

「ど、どなたですか」

「教えてやるつぼじに、そなたは時来れば我が元へ来い」「ほんとうですか。教えてくれるのですか」

れんは満面の笑みで龍神にすがつた。

「偽りは申さぬ。一度そう言った」

「ほんとうに、教えてくれるのですね」

「そなたの名に誓えば」

「はい。中将内侍の名に誓つて」

「よろしい。龍田神南明神の名に誓おう」

龍神は大きく息を吐いた。その深い息づかいに木々は震撼し、小枝は折れ飛び、地面の泥が宙に乱れ散つた。

れんも風にあおられ、重い袖を上げて顔をおおう。やがて、風がおさまると、れんはこわこわと袖をおろす。眼下に

龍神の姿をとらえた。

龍神はれんを見上げている。

「蓮の葉！」

れんは今さらながら座つてている場所の異常さに気づく。

「それも、宙に浮いて」

龍神が片腕を上げ、なにかを指し示す。蓮の葉の下には荒れた川が轟々と流れている。そして 老木一本、川の半分に覆いかぶさつている。その木がある場所は濁流に地面がえぐり取られ、埋まつていたはずの根がむきだしに見えた。

「見えるか。あの年老いた」

「木でしょうか」

「そなたを呼びだてたのはあの川辺に生きる桜の親子」

「桜の、親子」

その桜に人の姿を認め、れんは腰をかがめて田をこらした。

老木の根から面に降りんとする若者。その彼をささえ縄を引っ張る僧たち。

「春時どー！」

れんは田を大きく見開いた。

「それに、聖のかたたち」

春時が手を伸ばす先には、まだ腕一本分にしかならない若木。

（わたくしを呼んだ方を、わたくしが申し上げた方を、春時どのが助けようと……）

れんは声も出せず涙があふれた。

（春時どのが）

「しかし、助け出せるかな」

龍神の声をとらえ、れんはふり向いた。

上流から 流水の音が激しくこだまする。れんはその音をとらえ、その正体を追つた。いや、正体は分かっている。濁流だ。濁流が激しくうねり、崖を削り木々を幹までのみこみ、迫り来ているのだ。

春時たちのいる場所はすぐ間近。

れんは悲鳴を上げ、春時に届けと叫んだ。

「春時どー！ 逃げて、逃げて！」

龍神は冷笑し、つぶやく。

「拝見させてもらおうぞ 仏の遣わせし女、中将内侍の力の源を叫びは春時には届かないのか、春時たちは気づきもしない。れんは自分を乗せている蓮の葉を力いっぱいいたたい。

「蓮の葉さん、降りて、降りて」

蓮の葉はただ、川の上をふわふわ浮いているだけ。

「降りて！ 春時どのに知らせないと」

桜を助けるどこのりではない。桜も春時も、濁流にのみこまれてしまふ。

勝手に一人で龍神について来なければよかつた。いや、平群に戻ることに異をとなえなければ。助けを呼ぶ声がすると話さなければ。私がよけいなことばかりを 後悔の念がれんの心をさいなむ。

れんは大きく首をふった。

「考へても、なんにもならない」

れんは立ち上がる。眼下の桜を見すえ、

「こぎり」
と、荷葉の縁から足をふみ出した。

第五話 神南（六）

やわらかな風につつまれた瞬間、春時は両手を伸ばし、空から舞い降りる白い者を受け止めた。

「れん！」

れんは答えず空へと数珠を掲げた。

「お助けください！」

どう、と荒波が押し寄せ、二人を呑みこむ。

春時は川面を呆然と眺め、立ちすくんだ。

川が治まっていた。日に映るのは穏やかな流れ。

最前の波こそが荒れ狂い流れつくす最後の力であったのだろうか。その脅威は黄土まじりで木つ端を浮かべた水面に面影を残すのみ。空はすでに晴れ間さえのぞいていた。

そして春時の腕のなか。

「重い……」

春時は苦笑した。

れんと小さな男の子が眠り、ちいさな肩をあずけていた。次に疑問がわきあがる。突如、空から降ってきたれんは、受け止めるに羽のように軽く感じた。なのに今は人なみに重さがある。もつとも、空から現れたことがすでに不条理な話。真相を追及するだけ時間の浪費だろう。

「あなたさま」

声のする方へと春時は向きなおした。

弱々しい女の姿が見えた。髪もすがたも夢で見た時と同じだ。ふり乱れた髪にくずれた衿。^{えり}記憶する姿と寸分たりとも変わりない。しかし今、現実に目で見る彼女の方が、夢の中より存在感に乏しくはかなかであつた。おぼろ雲に姿を隠す月の「ごとく微かな風にさえ

揺らいで消えてしまう、そんな印象を受ける。

「ありがとうございます、ほんとうに、ありがとうございます」
女は笑った。しかしその笑みは疲れきっていた。精も根も尽き果て、ただ感謝を示すことだけで精一杯のようだった。

「わたくしの、坊……」

「このとおり無事だ。お返ししよう」

春時が両腕にかかる二人をさしだすも、女は力無く首をふった。
「わたくしにはもはや、冬を越す力はございません」
冬を越す？

春時はいやな予感がした。

「どうか……お預かりいただけませぬか。凍える冬を越え、あたたかな風待つ春まで。どうか、その子を」

「預かるって」

女は満足そうに笑つた。足元から消えかかっていた。はかなげに見えたのは、本当にはかない命だった、ということか。

春時は笑い返すどころではない。

「待て。預かれなどとそんな」

女は　消え去つた。

「了承してないぞ！」

春時の背後で忍び笑いがもれた。

「誰だ」

「しがない龍田の川守よ」

春時はその青年、龍田神を睨めつけた。

「貴様のしわざか。川の氾濫も常識はずれの荒波も、そしてれんがどこかに消えてたのも」

「大意では肯であるな」

龍田神は楽しげに笑みを浮かべた。

「そのさくら木、余が預かつてもよいぞ

春時はさらに警戒した。

「なにが望みだ」

「代わり、中将内侍に命ずるのだ。そなたから我が元へと赴くよつ
に」

「お門違いだ。そんな立場はない」

「中将内侍のゆくすえはそなた次第」

「おれ次第？」

「そなたが逃げよと告げれば逃げ、難波津と告げれば中将内侍は従
うた。天にゆけと燐めたならばまたしかり」

春時は肩をすくめた。

「そななはずがあるか。おれの言つことなど」

「否、そなたの言挙げは中将内侍にとつては強力」

「言挙げ、それは」

「都から其を連れ出した折りを思い出すがよい」

龍神は白い指をれんに向けた。

「刃を握りし狼藉者の誘いに、なにゆえ中将内侍は従順について來
た。脅して連れ出したか？ さはあるまい」

まつたく同じ疑念は春時にもあつた。なぜ見知らぬ男について來
たのか。姫がこわいもの知らずだからか。疑うこと知らないから
か。ただそれだけ なのか。

うつむくとれんが眠つていた。春時に支えられ安心しきつてゐる。

「中将内侍はやつかいな女だ」

龍神の声に春時は再び頭をもたげ、

「それは知つてゐる」

くく、と龍神は笑つた。

「我と手を組め、春時」

「おれと？」

「そなたは我と同じく仏の意に添わぬ存在よ。いづれ觀音菩薩を敵
に回す」

「觀音菩薩……どういづことだ」

「中将内侍は觀音菩薩の分身として生を授かつた女

「何？」

「その女は余を鎮めた」

「……」

「人ならぬ力を持つ女。神も仏も物の怪も、この女を欲しておる」

春時はれんの寝顔を見下ろす。

高貴な生まれで少々風変わりな、ただの乙女でしかない。

「そんな、たいそうなものにはまつたく見えないが」

馬上で眠りほうける、強情をはってはすねる。どこをどう見て菩薩の分身と思えというのだ。と言い返したい春時だったが胸におさめる。

「そしてお主は、共におればかなうやや中将内侍を殺す」

「そんなことは」

「ないと言い切れるか。刺客だった者が。春時は目をそらす。

「……難波津に送り届けるだけだ」

「いざれ解る時がくる」

龍田神は太刀を投じた。春時が受け取ると、龍田神が微笑した。持つてゆけ。必ずや役に立つであろう

「なぜこれを」

「そなたと我は深い縁。^{えにし}水神の舞を伝えし我を忘れしか、眞春よ」

「その名を！」

「鋭く叫んだ春時、すぐに戸惑いの色を浮かべた。

「思い出したか」

春時は平静さを装い龍神を見返す。

「持てと言つなら。ただし龍神よ、これは貸しじゃない。桜の子も預ける気はない」

すべて見抜くかの」とくに、龍神は酷薄な笑みをもらした。

「詮無いな。だが、それでよい」

川はゆるやかに流れている。まだ水は泥や木の屑を含んで濁つていたが、空はすでに青く深く染まり、林が木漏れ日で光り輝いてい

た。

すべてが過ぎ去り、新しいなにかに生まれ変わったようだつた。春時は不意に軽くなつた腕の中を確かめた。少年がいなくなり、代わりに桜の若木に姿を変えていた。おそらくこれが本来の姿なのだろう。そして若木はれんの両腕に抱かれていた。

れんはまだ眠つている。川を鎮めた疲れだろうか。それも春時の想像にすぎないのだが。

れんの小さな身体を抱きなおし、立ち上がる。まぶしげに崖の上へ目をやると、上から声がした。あの練行僧たちだ。二人も濁流から逃れ、無事だつたらしい。

「ご無事か、若い人」

「いの通り」

一人は良かつた、と口々に言いあつた。

「その女人は」

春時はもう一度、れんを見おろす。

きっと誰もこの女が川と龍神を鎮めただなんて、思いもしないだろう。そんなことを考えながら、春時は僧たちを見上げた。

「探していた……いもづとです」

第六話 難波（一）

おだやかな日の光を受け、甍が輝く。

難波津 そこでは多くの民が行き交っている。それも異相が多い。

奈良の都も異国の民は見かけるが、難波津の比ではない。難波津は大和の海の玄関口と、その光景がしめしている。

皇都として遷せられ「難波宮」と称されること一度。一度は天智天皇の御代。そして先代、聖武天皇のころ。異例なことに、天皇ご自身が難波でなく恭仁の宮にいるにもかかわらず、皇旗が翻つたときもあった。

それゆえ殿上人は、難波に「別業」つまり別邸を構えていた。いつまた皇都となるか知れないからだ。中将内侍の父・藤原豊成はかつて右大臣から太宰府帥に左遷されたが、太宰府に向かう船に乗らず、この難波の別業で過ごしたことがある。

今、れんと春時はたたずんでいた。

難波宮の大極殿の甍をすぐ北に望む、長く延びる築地の日陰。築地の向こうは豊成の別業である。

「これを、門番に渡せば、よいのですね」

れんは竹簡をにぎりしめて言った。

横佩大臣の家司・堅虫が春時に託した竹簡だ。

「春時どのは」

れんはためらいがちに尋ねた。

「いつしょにいらしてくだされば、お礼などできますのに」

「人さらいがのこのこ顔を出せるか」

「でも、わたくしを助けてくださいました」

「礼なら充分いたいでいる」

「継母上からですか？ それは、お仕事の報酬でございましょう」

春時は虚をつかれた。

れんの口から「報酬」という言葉が飛び出したことに。この姫には無縁だったはずの言葉だろう。邸より逃れて以来、前の右大臣の姫・中将内侍は今までかかわりのなかつた仄暗い世間をのぞき、素直すぎるくらいに吸収している。

そして、春時は迷う。告げるべきかどうか。

「春時どの？」

「……堅虫どのだ」

「堅虫、どの。平城京の、家司の」

「あの方から礼物はいただいている。この難波に住まい、時を置いて都に向かえるよう段取りを図つてくれてもい」

「まあ！」

「都に戻つたら大臣おとねに堅虫どのの忠義をたたえるよう申し上げてほしい」

「はい、かならず申し上げます」

れんは納得したか、にこりと笑つた。

「父上にそつと。母上にはもらさぬように、申し上げますわ」

大丈夫だ。れんは分かつていて。

「頼んだ」

「はい」

れんは深く一礼し、

「春時どの、お世話になりました。くれぐれも御身を大切になさつてくださいませ。では、『きげんよう』

顔を上げるとしづやかに門へと向かい歩んでいった。一度足をとどめたが、しかしふり返らずに再び進む。

春時は身を隠しそのなりゆきを眺める。

れんを門番がとがめた。しかし竹簡を渡すとすぐ、門を通り抜けていった。

ふう、と春時は太い息を吐く。

（これで終わりだ）

胸に広がるのは安堵感。

自分がさらつた「れん」は前の右大臣の姫、中将内侍に戻つていつた。

(襲うつもりが人助け、か)

この皮肉なめぐりあわせに、春時は思いをはせた。
なぜ助けたのだろう 潔い態度。そんな理由を口にしたこともあつたが、あれは、でまかせに答えた理由にすぎない。

分からぬでもいいか、とも思う。もう一度と会うことはないだろう。かたや藤原氏の姫、かたや住まう所も名も籍にない逃散の者では、住む世界が違いすぎる。

春時は腰に手をやる。

手に触れる冷ややかな感触に、腰に佩いた太刀の存在を思い出す。
この神具は不思議と重さを感じない。

記憶に龍田龍神の声がよみがえる。

おぬしに預けるぞ。

(分からぬ。なぜ太刀を預けた)

まだ都への道が憧憬の対象であつたころの幼い自分と、龍神。

そして中将の姫を望む龍神。

姫の短い旅の道行きとなつた自分。

これは偶然ではないのか……。

(いや、もう終わつたことだ)

姫が無事に難波に到着した、と堅虫どのに知らせよう。
それでこの話は、終わるはず。

第六話 難波（一）

「なんとこ'り……」

「ひどいひやいります」

と侍女たちが口々に嘆くさまが、れんには不思議に思われ「なにがでしょつ」と問い合わせた。

侍女たちは声をそろえていわく。

「そのお髪でござります！」

れんは得心いったらしく、後ろ髪に手をそえてほほえんだ。

「でもね、かえって、すつきりしたみたいです」

「姫さまはたいへん優しいの心持の御方ですわ。みなに心配かけぬよ」、氣丈にふるまつていらつしやるのですね

年かさの侍女がわけ知り顔でひとり納得すると、ほかの侍女も、「まあ……なんと」

「おじたわしいことですわ」

と、そろつて袖を濡らせるのであった。

そんな大げさな。そつ思いつつも、れんは口をつぐんだ。わざわざ場の空気を悪くすることもない。

袁比良おひらという侍女を筆頭に、四人の侍女が傍らを離れることなく、れんの世話を焼いていた。正直、世話を焼きすぎる。れんがそんな感想をいだくほど、彼女らはきわめて甲斐甲斐しい仕えぶりをみせている。

（少しほひとりにしていただきたいけれど）

れんはそれが高望みだとも分かっているから、口にはしない。誘拐され戻ってきた後だ。警護上、許されることではないだろ。

そんなんれんの胸中を知るや知らざるや、袁比良は自身たつぶりと言つた。

「姫さま。」安心なむちくださー。」これは姫さまの御母上、紫御

前さまゆかりの方ばかり。みな、姫さまのことを心よりお慕い申し上げております」

「わよりです。そんなに氣丈にお振舞いにならずともよひしこのですよ」

「そうですよ。髪が結えぬとお知りになれば、右相国さまのお嘆きはいかほどか」

「これ、よけいなことをおつしゃいますな」

「あつ」

叱られたのは若い侍女だった。名はたしか安佐女といつたろうか。肩をすくめて両手で口をおさえている。

「でつ、でも大丈夫です。なんでも北の方にゆくとかで、右相国さまはしばらくは難波にはいらつしゃいませんから」

「この邸では皆、藤原豊成のことを『右相国』と称している。豊成公が右大臣から太宰府だざいじゆのそち帥へ降格となるも赴任を嫌つて滞在し続けたのがこの難波だ。それゆえ邸の者はあるじが『右大臣』であることにこだわり、右大臣の唐名を呼称とし続けているのだった。それはさておき、れんは少しばかり肩を落とした。

「父上が嘆かれるのですね」

無理もない。この短い髪はとても世間に出せる姿ではないのだ。縁組や参内はおろか、右大臣の姫の名で寺へ詣でよつにも姿をさらせない。おばばさまの代参をするための美濃行きなど、もつてのほか。人前に出る「ひとがこと」と「ばばかられぬ」のである。由々しき問題だ。

「どれくらいで、元どおり今まで伸びるかしり」

「元どおりになるには三、四年はかかるでしょ」

れんは目をぱちくりさせて驚いた。

「三、四年。そんなにかかるのですか」

思いがけない長い年月。「すつきりした」とのんきに構えていた自分が、やはり考えなしだった、と情けなくなる。

「それでは、その間、父上とお会いすることも叶わないのでしょうか

か

「いえ。さすがに右相国さまとの面会を幾年も行わないわけには参りますまい」

れんは思わず身を乗りだした。

「妙案があるのでですか」

「挿頭花をして短い髪を覆えばよろしいのです」

なるほど。短い髪は仏道に入つた者を表す。ならば世俗の者らしく飾りたてよ、ということか。そう知れば急に望みが高くなるというもの。

「ああ、今すぐにも父上にお会いしたいわ」

「右相国さまがごく自然に難波においていただけるよう、とり計らつております。姫さま、しばしのご辛抱にござりますよ」

「その日が楽しみですわ。それでは……そうだわ。竹と筆はないかしら」

袁比良が首をひねる。

「なぜそんなものを」

そう問うので、父上に消息を知らせたのだとれんは答えた。

と、そんなものは侍女に書かせればよい、と袁比良が言つ。高貴な姫が手づから文を書くなど考えられないといわんばかりだった。「せめて、わたくしの筆になるものを、父上にお送りして差し上げたいのです」

「わかりました。しかし、姫さまのための御筆をとりよせねばなりません」

数日ほど待つ間に袁比良は告げた。

今、邸にあるものでいいのに、とれんは思つた。なぜ数日かかるのだろう、とも。新たな筆をとりよせるにしても、難波津の市にゆけば筆はいくらでも手に入る。小ぎれいな衣に替えるため、春時に連れられて市を回つたので、れんはそのことを知つていた。しかし反論する気も起きず、れんは小さくため息をついた。

(春時どの)

もう、お会いすることはできないのかしら。

春時とす「」した数日は貴重なことを知った。邸の内にいれば何年かけても学べないことだらう。筆など市にゆけば手に入る。知らなければ、数日待つことに異論もなかつたるう。

（もう火をおこすなんてこと、ないのじょ「」ね）

ふつと笑みが漏れた。

確かに春時の言つとおりだ。ここにいれば木つ端をこすり合わせて火をおこすことなどない。「逃げよ」と告げられ、従つたことも結局はよいことだった。彼の言は正しい。

その春時の最後の頼みは、堅虫どのの忠義なはたらきを称揚することだ。

堅虫どのを……

「あ」

「姫さま。いかがなさいましたか」

堅虫のむすめ、瀬雲のことを思い出した。

瀬雲の胸の薬はじき切れる。早く作つて送らねば、瀬雲は発作で苦しむことになるだらう。

だがここに、煎じるための道具はあるだらうか。なにより材料となる薬草は。

市には多くの唐人がいた。筆以外に草木の束も見かけた。きっと売つてゐるに違ひない。邸内を探させるよりは購入するほうが早いよつにも思える。

「薬草を、頼みたいのです」

「薬草で」「」やりますか」

「ええ。これは、急いでいただきたいわ。ないと病で苦しい思いをします。今夜には煎じて冷まさねばなりません」

袁比良はまた首をかしげ、

「病でしたら薬なんかより祈祷がいちばんです。すぐに僧をお呼びします」

「いえ、薬草が必要です」

れんはきつぱりと叫びた。

「唐人のいる市なら、あるはずです。市にゆき、探しにきてください。今から必要な草木の漢名を書いて……筆がないのでしたね。では、お話しますから、それをそのまま、薬の商人にお伝えなさい」袁比良は納得いかないようすだった。病には祈祷がいちばん効くというのが貴族の常識。あやしげな薬草を姫が所望するとはいかなる了見、といったところだろうか。

しかし、他の侍女の前で姫の要求をなおざつにするわけにはいかない。袁比良はみずからすぐに市にゆくと答えたのだった。れんは少しだけ期待した。

(ついでに筆も調達してくれたらよいのですが)

第六話 難波（二）

ざわめく酒家の中、なまりのある言葉に春時は顔を上げた。

春時が手で了解を示す。と、浅黒い顔の男がにんまりと笑つて座り、春時のそばの高壇に手をのばす。大きく手をたたく音に遅れて、「啞！」

といつた小さな叫びが座台に響いた。了解したのは相席だけだ、と春時が軽く笑うと、男も手をぶらぶらさせつゝ懲りない顔で苦笑した。

肌の色は濃くざらざらした田、小さな身体にそぐわぬ隆々とした腕。男は津に停泊する外つ国の船 新羅あたり に乗り、それも歴年の水手 かき であろうか。

「海を渡り、唐土で暮らすか」

悪くない、と春時は思いつつ、ひさげを傾ける。

とはいえ、思いつきで飛びこめる世界ではない。多くの船は狂った波にもまれた果てに沈み、選ばれし船こそがこの地を隔てる海を越えられる。目の前の男はよほど海神 わだつみ に恵まれているに相違ない。だが、海に消えるのも悪くない しかばねは海の底に眠り続ける。人知れず海原の底にたゆたい、やがて朽ちて藻くずとなり消え去るのだ。刑場の露に消え獄吏の手で処理されるよりは、路傍で蛇 あぶ にたかられる醜惡な姿を衆人の目にさらし、狗に喰われるよりは、よほど報われる終焉ではないか。

そんな虚無的ともいえる想像から、いまひとりの少女の姿を連想する。

（刑場の露 首の女。そうだ、代えの首、堅虫のむすめ、瀬雲といつたか）

れんが都に帰れば瀬雲が死んだと必ず知るだらう。いや、難波でも伝え聞くかも知れない。瀬雲が姫の身代わりにと服毒した、と。その事實をれんが知つたとしたら。

(いや、堅虫どのが漏らすまい)

春時は即座に否定した。

が、すぐに否定もできないと思い直す。話の出所は堅虫だけとは限らない。家人や出入りの下人からうわさを聞きつけることもあるう。

瀬雲のことを知った時のれんの嘆きはいかばかりだひつ。やはり堅虫の名を出したのは失敗だった。彼の忠義と奔走ぶりは、恩賞で報いなければならぬほど安っぽいものではないはずだ。

「かわいらしいお方だつたよねー。父上」

「え?」

横には色白の男の子が座っていた。

「だれだ」

「かわいしあなさい。一日前のことなのに、もう忘れられて」
そう言われ、ぴんときた。

「桜の小枝か」

「おうよー」

桜の木に助けを求められ、龍神に剣を託され、次は桜の小枝。春時はもう驚く氣も失せている。ため息をつき、男の子から田をそむけた。

正面では例の相席の男がニヤニヤしてこる。

「イ専的兒子」

(おまえの子供つて。俺はそんなに老けてるか。どんな若氣の至りだ)

顔のはじで不満を表明する春時に、桜の枝の少年がにっこり笑つていわく。

「よろしく頼むぜ、ちちつえ」

「それが父上に対する態度か」

春時が皮肉を交じえるが、桜の小枝はまったくこたえていない。
「ところでさ、あのかわいらしい方は戻つてこないの」

「かわいらしいとは」

「川からここまで馬に乗せてた、あの女人の人れんのことだ。

「戻つてこないな。この難波津のお邸に来るのが目的だつたから」「そうなの。残念だなあ。天女さまにお仕えできてうれしかつたのに」

「天女さま」

いぶかしげに春時が問つ。

桜の小枝はまじめな顔になり、卓の上で両手を結んでまぶたを伏せた。

「水龍さまがお怒りの中、ずっと天から声が聞こえてたんだ。母上とは別の、若い女人の声、あの人すごく似てた。いま少しこちらで、必ず、助けるから」

「そうやって励まされたから濁流の中も流されずにすんだ」

「かも。いや、絶対そう！」

桜の小枝はぱつと笑つて、ひさげを手にして春時の高杯に酒を注いだ。

天からの声。あの状況下ではれんがその主、そうとしか思えない。ほかにだれがいるだろうか。桜の小枝を励ましつづけるよつな、悠長で奇特な少女が。そして、

観音菩薩の分身として生を授かつた女。

龍神にそう語らせた、不可思議な力の持ち主が、ほかにいたどうか。

桜の小枝が春時の袖をひっぱる。

「父上？」

「ん？」

春時の傍らに若い男が立つていた。春時の目に、男は上流の者と映つた。身を包む袍は新品同様で、頭巾は麻ではない（世間ではあまりお目にかかるないよつな）良い衣を使つてゐる。人相も穏やかで卑しさがみられない。

「商人か」

「まあな」

かたわらに堅虫から託された荷をあいている。間違われても無理はない。

「すばらしい太刀だな」

「これは売らぬ」

春時は即座に言いはつた。

「吾は良い太刀とみれば糸目はつけぬ。どうだ、交換は米か、錢がよいか、それとも絹がよいか」

「無駄だ」

「言い値でよいが」

「あきらめてもらおう。」う見えて金には困つていない」

男は退かず、春時の斜め前に座つた。春時が太刀を引きよせた刹那、女が通りすぎてゆくのが見えた。

(あれば)

春時が立ち上がると、

「おいおい、あからさまにすぎるぞ」

若者は不平を口にすると春時の肩に手をかけた。

「急用ができたのだ」

その手を春時は穏やかにおしどごめ、

「再び縁あらば俺も一考しよう」

「気が変わつたら都の田村第を訪ねてくれ。『刷六^{よしろく}に太刀を見せる』と伝えればよい」

田村第 左大臣の藤原仲麻呂^{ふじわらのなかまろ}の屋敷。仲麻呂は前の右大臣豊成の弟、れんの叔父にあたり、兄をもしのぐ権勢をほこる。その縁者としたら、酒家ではじめて会つた男の太刀の代に大枚はたく醉狂も、氣まぐれのひと言で片付く程度のものか。

春時は若者から顔をそむけると、わずかに顔をゆがめた。
(仲麻呂、その名を思うだけで忌々しい)

卓に銅錢を置いて早々に店を引きはらう。桜の枝も立ち上がり、春時を追つた。

同じ卓子の男は春時の残した銅銭が「おごり」と分かると、大声で次々と酒を要求しはじめた。太刀を求めたあの若者も、そのタダ酒争奪戦の喧騒にまきこまれたか、それとも素直に「この場は」いつたん退いたのか。春時を追いかけてくることはなかつた。

第六話 難波（二）（後書き）

相席の新羅人には朝鮮語でなく當時の国際語である唐の言葉でしゃべらせました。

第六話 難波（四）

女は、春時に気づくことなく去ってゆく。
土壙の影に身をひそめる春時。かの姿には見覚えがあつた。いや、
顔かたちだけのみならず、女についてはそれ以上のことも知つてい
る。

（小侍従）

れんの継母である照日御前の侍女、小侍従。
あの女がこの難波津にいる。ひと波乱があるのか。龍神が告げた
「いざれ解る時がくる」 あれはあながち間違いではなかつたか。
ただ難波に送り届けただけではすまないといつのか。春時は腰の太
刀に手を触れた。

（いや、だが待て）

「小侍従さま」

枯れ松の下、いま一人、女がいた。女は侍女筆頭の袁比良その人
であつたが、春時は知る由もない。ひそやかな会話をはじめる一人。
周囲には彼女らのほか、気配もない。

春時は顔を伏せて通りすがりをよそおい、至近の築地へと動いて
身を隠した。話を盗み聞くためだ。

「……なのですが、いかがいたしましょう」

問いかける袁比良。対する小侍従は、

「薬草は買い与えなさい。むしろ都合が良いわ。今晚は生薬と土瓶
のそばにかかりきりになるでしょう」

と指図した。

「筆もお求めですが

「右相国さまの手に渡る証跡の一片でも残されてはならない」

「しかし市に行きながら筆を手に入れないのは、不自然で」

「姫にふさわしい良いものがなかつたとでも言えぱよいでしょう。

それくらい頭をお使いなさい」

「申し訳ありません」

「とにかく貴女は戻り、中将の姫を安堵せし、門番を取り込む。それだけよ」

袁比良がこくつとうなずく。

「それだけで、貴女はこの難波の別業の主になるわ。良いわね」

「はい」

「では明日、あけぼのの刻に」

会話を切るや、一人は足早に別々の方向へと立ち去つた。春時は息を殺したまま、短い会話を組み立てる。

袁比良のことは知るよしもない。だが別業の侍女だろうと、会話を察しをつけた。しかも小侍従の配下もしくは協力者であり、照日御前の思惑に従う者である、と。春時もとい堅虫にとつては痛恨の事態だ。姫の身を御前の手が及ばぬよう遠ざけたはずが、姫を陥れんとする者がなにくわぬ顔でれんのそば近くに控えていたのだから。

だが悔やんでもしかたがない。それよりも「明日のあけぼのの刻」だ。明日の日の出とともに、あの侍女の差配でなんらかの動きがあるとみていい。だがなにが起こるのか。門番を取り込むというのなら、御前一派を邸内に引き入れるのか。それともれんを連れだすか。端的に示すことばを会話から見いだすことはできなかつた。

では、ひとまず彼女らを泳がせるか。それとも先手を打つか。

(なによりも大事なのは)

春時は足元に視線を向けた。小さな木の芽にすぎないそれは、寸時前は少年の姿をしていたものだ。

「桜の小枝、もういい

すると、どうこうわけか木の芽はぐん、と伸び、少年の形をとつた。

「やれやれつと」

「桜の……まどろつ」しこな。おまえ、なぜ

「ない。つけてよ」

「では、桜だから佐久^{さく}」

「適当すぎない？」

「そのとおりだ。で、佐久には重要な任務がある」

春時の耳打ちに桜の小枝 佐久はにこりと笑つた。

「できるよ」

「託したぞ。天女さまを救い出すんだ」

佐久は春時の期待に応じるべく、こぶしをふり上げて宣言した。

「まかせて！」

再び舞台は横佩大臣^{よこはせのおとしん}の別業へと戻る。

時は夜更。れんのいる西の対屋の母屋まで、ほのかな月あかりが差しこんでいる。

袁比良は拝礼し、入手した薬種を載せた高杯^{たかつき}を母屋のあるじに献じた。

「ありがとう」

目前に控える侍女筆頭に、れんは謝意を示した。やはり筆はなかつた、と内心落ちはしたものの、一方ではやはりそつのない仕事ぶりに感心していた。口伝で五種ほど頼んだというのに、間違いも欠けもなかつた。なじみのないもの求めるのは難しいものだし、しかも求めるものは覚えづらい、漢名の薬種なのだ。

れんは薬種を手にとり吟味をはじめよつとした。するとそこへ侍女が、

「姫さま、姫さま」

と喜々とした呼びかけをくりかえし、とびこんできた。安佐女だつた。

「なに」とです

「右相国さまからのお文で、ござりますー」

そう述べて安佐女が差し出したのは、木簡の束とすすきの穂。袁比良はするどく詰問を浴びせかける。

「右相国さまのお使い、おはなんと申したのです」

安佐女が困惑の態でいると、袁比良はたたみかけるように聞いた
だした。

「名乗りはなかつたのですか」

「あの、都の右相国さまのお差配と申しておつました。おは、うか
がいませんでしたが」

「どこの者とも知れぬのにやすやすと信じて受け取つたところの
？」

「あ、あの、口上も立派でしたから」

「不埒な輩みながみな、あやしげな物言いをするはずがないでしょ

う

安佐女はもの言えず顔も青ざめ、縮こまつてゐる。険悪な雰囲気
の侍女らを見るに見かねて、

「袁比良、あまり責めないであげてください」

と、れんが仲裁に入る。

「されど姫様

「安佐女は、わたくしが喜ぶであろうと、早く渡そうとしたのでし
ょう」

さすがに袁比良もこれ以上責めるのは分が悪いと察したか、姫の
面前で騒いだことをわびた。安佐女はまさにほつと息をつき、元来
楽天家のようだ、顔色ももとの紅をさしたようなほおに戻つた。
安佐女のようすに胸をなでおろしたれん、氣をとり直して木簡の
束を広げた。すると、ひざ元に小枝がはらりと落ちた。れんはその
小枝を手に取り、次にすすきに田をやり、そして五本の木に記され
た文字をしげしげと見つめる。

「まこと右相国さまからでしょうか

袁比良がたずねた。

れんは木簡から視線を外すと、おもむろに歌を朗じはじめた。

秋萩の花野の薄穂には出でず

わが恋ひ渡る隠り妻はも

「すできな恋の歌ですね」

感じ入っている安佐女に、袁比良が違つと一蹴。

「右相国さまはなんと情けないことをおおせなのでしょ」

れんはただ愁眉をよせた。

秋の花野のすすきのよつに、表に出ぬよつ隠している恋しい妻はどうしているのか 歌は恋情にあふれていた。しかし『隠り妻』に仮託した姫のありよつは、世間より隠れ人目を忍ばねばならない身の上。いいかえると、しばらくは都に戻すわけにはいかない、そつ命じられているも同然なのだ。

れんはいまひとつ、淡々と詠じる。

山の峰をの上の山桜咲かむひる

難波の浦に寄する釣船

袁比良が確かめるよつに言つた。

「右相国さまがここ難波に来られるのは桜のころ、とこいつことですか」

「半年以上も先のことではありますんか！」

まるで我がことのように安佐女は憤りをあらわにした。

れんは袖口でまなこを覆い、物思いに沈んでいたが、やがてかすれた声でふたりに告げた。

「今宵は、わたくしひとりにしてください」

侍女たちは思つた。姫は寄る辺なき身を嘆いてひとり涙を流した
いに相違ない、と。でも侍女がそばにいる限り、髪を短くされよう
が、半年は会わぬと宣言されようが、気丈にふるまう。それが中将
の姫なのだ。そんな痛々しくもけなげな姫の心をおなぐさめするに
は、おひとりにしておしあげるべきだつ。それに警護がなにより
大事とも言ひづらい。

袁比良は静かに礼をし、安佐女とともに侍廊の奥へと下がったのであった。

そしてただひとり母屋に残ったれんは、小さく嘆息する。

「春時どひて、やつぱり意地が悪いわ

第六話 難波(四)(後書き)

「秋萩の花野の薄穂には出でずわが恋ひ渡る隠り妻はも」(「万葉集」卷10 2285)

第六話 難波（五）

ややあつて、れんは音もなく立ちあがつた。

そろそろと西の孫庇まいひわらしへと歩み、足をとどめる。

外は闇。数歩先でままならぬ。

れんは思案した。邸内と大路を隔てる塀まで、どれほど離れているのだろうか、と。闇の先にあるはずで、灯りを差し出せば判るかもしれないが、女房たちの耳目を集めることはしたくない。日も高い時分には考えもしなかつたことと、れんは苦笑した。

あらためて耳を澄ますも、周りに人の気配は感じられない。虫の音さえない静謐の中、草木と風のせせやきや、灯りのゆらぎさえも聞こえそうだ。

れんは軽く安堵の息をつく。

ゆつくりと背後の母屋へと田を向けると、蓮向かいからはわずかな光りが差し込んでいた。れんは暗闇の中に浮かぶ人影を認めた。

「お話ししてもよろしいですよ」

月あかりを背にして少年が立っている。れんは彼に問う。

「桜の、小枝どの？」

「はい。佐久といいます」

少年の声は少し緊張の色を帶びていた。

一方、れんはその答えに納得した。木簡の束よりこぼれ落ちた小枝。それを見るや、れんは予想した。小枝は龍田川の濁流から春時が救い出し、連れて来た桜。そして木簡の送り主は春時に違いない。れんは佐久に近づいてゆく。彼はおのれより小さな子どもだ。

「佐久どの。ことづてがありだそうですね」
佐久はぎこちなくうなずいた。

「桜が訪れたから、釣船、寄せてもいいですか」「釣られるのはわたくしですね」

れんは固まつている彼の手をとつた。

「行きましょう」

佐久はうつむいたままだ。

「ええと、では、春時に知らせてくれます」

「どのように?」

「外までひとつ走りを」

「いけないわ、捕まってしまいます」

佐久は驚いてれんを見上げた。

「じゃあ、どうしたら」

「狼煙のゆじをあげてはどうかしら。今から、この場所から動きます、と煙でお知らせすることができます」

しばらくの沈黙ののち、佐久が一言。

「目立ちます」

「狼煙は、目立つものでしょ?」

「姫さまが、目立ちます」

「大丈夫ですよ」

れんはにこり笑つて答へつつ、矛盾だらけだと思った。先ほどまで目立つまいとした。が、今そのこだわりはない。れんが捕まつても身の危険はない。なら、佐久や春時になるべく害が及ばないよう、注目はおのれにのみ集めた方がいい。

「これよりわたくしは、薬を煮たり煎じたり、することになつてします。物音を立てたり、煙をあげたりしても、それほど不自然ではありません。物音を立てたり、煙をあげたりしても、それほど不自然ではありません」

「でも」

「大丈夫ですよ」

れんは再度言い切ると、早速せつせとそこらのものを集めはじめた。荷造りだ。あとは着替え。この邸でくつろぐ姫の身格好ではまづ逃げ切れまい。

佐久はもう反論できないと悟つたか、細い小枝に戻つた。れんが外へ飛び出すその時を待つばかりだ。

袁比良は奥の控えでひとり悩んでいた。

姫が邸に入られたのがつい昨日、今夜は薬とやらをお作りだ。そんな中、邸内の者に不審がられぬよう姫を外へ連れ出せ、というのが小侍従の依頼。無茶をおつしやる、と袁比良は心の中で愚痴をこぼした。姫が外へ赴く理由づけは難題にすぎる。

小侍従は焦っているらしい。十人を超える供まわりの男を集め、夜中に船を出して木津川を下り、難波津に入ったという。（姫がおひとりで難波にいらつしやるなんて、前代未聞。小侍従どのが焦るのも無理ないわね）

当の横佩大臣・豊成公から歌まで届いている今、焦つたところで手遅れだらう。が、知つたことではない。姫を託す役割さえ果たせば済む。それで袁比良は前の右大臣家の難波津でのあるじも同然の立場になる。

袁比良は姫のようすを見ようと座を立つたのだ。

「けむり……！」

彼女は底の中からあがる煙を認めた。そして庭を横切る孤影。瞬盜人と見まがうが、目を凝らすとその小さな影は姫に違いない。

「誰か！ 姫さまがお外へ……」

侍女たちも奥から表に飛び出してきたが、袁比良が姫の追跡を命じても、

「走られているのが姫さま？」

「あつ、築地をお登りに」

と、狼狽するばかりだった。

「門外の小侍従さまにお知らせせよ」

と、その場を仕切ったのは若い男の声。築地を追いかけるのは間に合わない、馬を曳け、と次々に指示が飛ぶ。小侍従の連れて來た供まわりたちだ。

その若い男が袁比良以下、別業の家人たちに告げる。

「ご心配には及びません」

「されど」

「もの狂いの姫さまは必ずや吾らにて都へ連れ帰ります」

「もの狂い……」

「夜ごと邸を抜け、いかがわしいふるまいをなさるのです」
あの姫は物狂いであつたのか。ならば話はつながる。姫が突然現れたのも、姫の短い髪も、妙な薬づくりや父からの便りに淡々としていたのも。夜を徹して難波へと下り、姫の引渡しを求めた小侍従の行動は、世上のうわさに上らせないため。小侍従が別業の外に身をおいたのも姫に顔を知られているからこそだ。筋の通つた説明に、難波の別業の者たちは納得した。

ただ一人、袁比良を除いては。姫を逃した失態、まずあるじ『右相国さま』への悪印象は免れないだろう。彼女は悔しさに歯噛みした。

れんは日に映つた桧垣によじのぼり、築地堀の上から飛びおりた。周囲を探ると人がいて、目が合つた。どちらともなく笑みがこぼれた。れんは安堵の笑い、春時は、苦笑。

「春時どの」

「佐久はどこに」

「あ、はい。ふところに」

れんは衣の袖をさぐる。

と、『るん、と小さな香炉が転がり落ちた。

「それは」

「きっと、食う元手になります」

「……確かに」

「でしょう?」

得意げに微笑したれんは香炉を拾い上げた。

精巧に金格子細工の逸品で、確かに高値には違いないのだが。
「盗賊の所業だろう」

「ぜんぶ、父上のもの。むすめが、少しばかりお借りするだけですわ」

れんは悪びれず、答えを返す。

れんは背中に妙に大きい包みを背負い、玉で装飾を施した懐刀を腰帯に差し、男の童の姿でいる。本人としては万端の旅支度を装っているわけだ。賊からすると歩く宝のようでも。春時はわざとらしく嘆息するが、これ以上触れないことにした。時間の無駄だ。

築地塀の向こうが明るくなる。邸内が騒ぎはじめたのだ。

「佐久、馬を。例の場所へゆけ」

「わかった」

香炉とともに転がり落ちたか、いつの間にか人になつて、いる佐久が走つていった。

「佐久はあおを操れない。だが、あおはれんの言うことなら聞く。佐久から行く先を聞いてれんがあおを走らせるんだ」

「春時どのも、ともに行かないのですか」

「寸刻ほどはな」

「なにゆえ」

「客人だ」

闇から突如、黒影が飛びかかる。

春時は抜き打ちに影へと一刀。

「……ぐ……つ」

激しい音がし、男が飛沫を上げ、転倒した。

「春時ど」

「難波も魑魅魍魎の巣窟らしいな」

れんは小さくうなづくと、れん姫さま、と佐久が呼んだ。

「あおを連れて來たな」

「うん」

すぐ近くでたいまつのかかりがいくつも浮かび、次々と怒号が上がつた。

「いたぞ！」

「賊じやー。」

春時はすばやく告げた。

「くじ止める、早く行け」

「春時どのは」

「一人では、怖いか」

春時が揶揄するように笑つた。れんの小さな顔は血氣をなくして
いたし、指先は細かに震えていた。だが、自らの手で、切り抜ける
覚悟をさせねばならない。

れんはくちびるを結んだ。春時を強く見返し、すそをたぐつた。
あおの手綱を持つ佐久が、姫さま、と再び声をかけた。春時の言
うとおり、佐久はあおを動かせないらしい。ただ、背には乗れるよ
うで、佐久は曲芸師のようにあおに飛び乗つて見せた。れんは佐久
にあおの背へと引っ張りあげてもらひと、あおのたてがみを柔らか
くなでて懇願した。

「あお、行つて」

れんの願いにあおはひとつ荒い息で合図すると、駆け出した。

第六話 難波（六）

春時はあおのひづめの音を聞いた。ひとつ豪うべき材料が減つたところだ。

「さて、姫も消えた」

相対する者供、逃げ道を断たんとじりじりつめ寄りつつある。その数、十人は下るまい。

「このあるはすべて、都の御前の手の者か」

答えはない。かわりに刃の垣が縮む。

春時に彼らが何者かを知るよしはない。ただ、覚えのある顔が見える。八条悪王の手下であつたころに見た顔だ。そんな素性の悪い輩もあり、事実かくの如く問答無用で刃を向ける好戦的な連中なら、姫が館にあつてもその身の安全は保証のかぎりではなかつたろう。つまるところ、難波津も姫の安息の地にはなり得なかつたのだ。

左手から一人が矢のよう打ち込んだ。

春時は右足を下げる身をひねりざま、太刀を前に繰り出し左へ動く。敵がどつと足元に倒れた。

また背後右手より、突きが入る。と、正面より上段から叩きつけられる。挟殺の形となる中、半身を返した春時、

がつり

と打金が響くとともに、一刀が空を舞つた。

正面より踏み出す一人が勢いのめり転倒すると、背後の男が瞬時、動きを止めた。隙を逃さず春時は太刀を打ちこんだ。血飛沫が舞い、ひとりはひざから崩れ落ち、今ひとりは横転。そして春時は元の位置、元の態勢に戻る。

その間、息わずか五つ。

「回り込め！」

「わきをつめ！」

「落ち着け！」

短い叫びが春時の耳朵を襲う。

「姫を追うのが第一だ」

首領格か。かなり後方にある。首領をしとめて混乱に乗じて逃げるのは……無理か。

「しかし」

「すぐ助勢が来る」

それはまずい。十人足らずならば凌駕する自信はある。しかし、まともに戦えば無傷ではいられまい。助勢が加わればさらに危険は増す。必要以上の足止めもくらう。

逃げよう。

春時は即断した。追つ手を減らしたかつたが、そこまで危険をおかすこともない。れんが逃げおおせる時間を確保すれば、あとは遁走あるのみだ。

「春時」

聞き覚えのある女の声。

氣をとられた刹那、猛然と白刃がひらめく。

（しまつた）

避けるとつさに足元が揺りび。右横に倒れかけるといひ、

唇を離せ。

（分かつてゐるー）

太刀の望みどおり手放し片身で受け身をとつたところから、空いた手で地を払い、回転の勢いで立ち上がり駆け抜ける。定めた目標は名を呼んだ者。覚えのあるその声の主は……。

「ああ！」

女の叫び声は春時の両腕の中から上がつた。

さらに声をも封じるように、春時の左手が女の喉元にあでがわれる。

「動くな」

「小侍従様！」

やはりと春時は納得し、抑圧する腕に力を込めた。

小侍従は全身をくねらせもがき、なんとか逃れようとする。が、抵抗するほどにその動きを押さえ込まれ、動くことさえままならなくなつてゆく。悲鳴を上げようとするも、声ならぬ吐息が漏れるだけだ。

春時は相対する『敵』に強圧的に迫つた。

「下がれ」

彼らには目に見えた動きはない。

「下がれ！ この女の喉を絞めつぶす！」

じわりと包囲がゆるむ。距離は歩数にして十歩あまりか。邸の灯りが頼りの暗がりの中、かるうじて互いの立ち位置が分かる程度の距離だ。これなら小侍従を派手に突き放して、かく乱させた隙に逃げおあせることは可能だろう。

だが三歩ほど先に太刀を転がしたままだ。太刀は回収したい。龍神の太刀といふこともあるが、それ以前に手持ちの得物がないのだ。

「この場にあるはすべて、都の御前の手の者か」

春時は再度、同じ問いを投げた。時間稼ぎだ。小侍従を抱えながら、徐々に歩を進めて太刀へと近づく。

「答えられないか。右大臣どのの御意向は、刃を以つて姫を追つことではないからな」

答えはない。なくともよい。出まかせだからだ。太刀を拾おうとする動きを気取られぬよう、搖さぶりをかけるための問いに過ぎない。これはどうだ。さらなる動搖を誘おうと、

「見覚えがあるぞ。そうだ、都の十輪院で……」

「……！」

追手の者たちの間に動搖が走つた。今しかない。

小侍従を締め付ける右腕をゆるめ、太刀に手を伸ばした。小侍従はすきを逃さず、自由となつた右半身をひねり、背後の春時に肘撲ち。太刀に気をとられた中でのわき腹への衝撃に、春時の左手も思

わざゆるんだ。好機とばかりに小侍従が渾身の力で春時より逃れようとする。が、春時は頸部に手刀を振り下ろす。小侍従はその場で崩れ落ちた。

「小侍従様！」

「春時は足元の太刀を悠然と捨いなおし、
「おつと、動くなよ」

と、倒れる小侍従の背中に刃先をあてる。

「今度は喉を潰すんじゃなく、背中を突き通してみようか」
形勢は変わらない。距離も時間も十分稼いだ。もう逃げ時だ。
「みようか、ではないな。突き通そう」

そう宣言した春時は、大きく太刀を振り上げ、振り下ろす。

大丈夫ですか。

この身に呼びかける声が重なつて聞こえる。意識はある。だが空ろだ。後頭部には鈍痛が残つていて。それでも小侍従は痛みをおして身を起こした。そして、おのが身を支える若い男に告げる。

「問題ないわ」

虚勢だと男は見抜くが、あえて気づかわざ本題に入る。

「春時、とおつしゃつてましたか。ご存知なのですか」

「……八条悪王とかいう悪党の一味よ」

「なにゆえその賊の一味が姫を助け、連れ去るのですか。ましてやそんな小者が十輪院の衆を知つていたり、賊の一味が右大臣どのの御意向うんぬんを口にしたりするものですか」

「知らないわよ！」

小侍従が顔を上げてわめくや、また顔を伏せた。両手を握りしめて痛みをこらえていよいよ。この小侍従が髪が乱れるのも忘れてくつてかかるところ、春時という者は相当小侍従の情緒に触れる存在らしい。

だが小侍従も取り乱したと悟つたのだろう。毅然と頭を上げ、冷

静さを誇示するよつに男に流し田をくれる。

「……嘉羅」

「はい」

「姫を追つて

嘉羅と呼ばれた若き男、肩をすくめて小さく笑う。

「なぜ？ おそらく中将の姫は都に当分還らぬでしょうし、充分外聞の悪いことになりましたから、これ以上は人手を割くこともないと思うのですが」

「姫がこの世にいる限りはそなたの本望に障りがあるでしょう」

嘉羅は答へず近くの者を呼び、小侍従の身柄を預けた。そして立ちあがると素早く撤収の段取りを指図する彼に、小侍従は鋭く問い合わせた。

「追わないというの？」

腰の刀をすえ直しつつ嘉羅は答えた。

「すでに追つています」

「ならそう言いなさい」

「安請け合いはよくないですから。あ、そうです。小侍従様にお願いがあるんです」

「なんです」

「傷が癒えましたら都へお戻りを。わざわざ、このよつな場に足を運んでいたかなくともよろしいので」

小侍従は分かつたわ、と切り捨てるよつに答えた。

嘉羅の言い方は丁重ながらも、小侍従を暗に責めるものだった。彼女が場違いにも顔を出した拳句、人質となつて追撃を阻んだ。一度としやしやり出て邪魔するなという非難なのだ。

たかが門番のくせに 小侍従は反発を覚えたが、確かに小侍従が春時の存在に気をとられ、彼らの足を引っ張ったのは事実だ。

なにより、中将の姫が難波に向かうと突き止めたのも、この若い右大臣邸の門番なのだ。加えて、物狂いの姫と吹聴して邸内での騒ぎをおさえた機転、十輪院から借り受けた者たちを率いた手腕も見

事で、彼の能力は認めている。小侍従は素直に引き下がった。ただし、都で吉報を待っている、と嫌味も忘れない。もつとも、

「ええ、いざれよい知らせをお届けしますよ」

と、まったく嘉羅にはこたえたようすはない。

「それと小侍従様にいまひとつ確認しておきたく」

「なに？」

「今度はあの春時は、斬りますよ」

小侍従はきつと厳しく目を細めた。

許さない　春時。今や行動のすべてが許せない。あの男はなにかの目的がある。その目的のために八条惠王も、そしてこの私も利用したに違いないのだ。でなければ中将内侍を守らんとする意味がない。その目的がなにか。それは分からぬ。けれど……知る必要もない。私を利用した。それだけで許せない。

そして中将内侍、春時の手により包囲網より逃れた横佩大臣の郎女^{つめ}。あの忌々しい姫も、どこに行こうとも追いつめてやらなければ。

「首を届けて頂戴」

小侍従を見下ろして嘉羅は微笑した。

「（い）希望の眞、了解しました。それでは御前様によろしく

第六話 難波（七）

れんはあおにしがみついてもう一度「お願ひ」と言つた。
あおはそのささやきだけで、れんと佐久を目的の地まで運んでき
た。足取りに迷いはなく、命ぜられることなしに足は止まり、
「着いたのね」

と、れんがたずねるとかるく鼻を鳴らした。

頭上を見上げると十八夜の月。その光は欠けゆく途とはいえ、未
だ明るい。れんは神経をときすまし、周りを観た。

まず、耳にするのは虫たちの声。多すぎてむしろ騒がしい。田の
前には大きな丸太がいくつも積まれており、右手方向へと多数の小
山をなしていた。丸太山の山脈の山すそには小屋があるようだ。左
手はとすると長いすすきや葦が茂り、正面は丸太の山のその先に大
きな湖が広がつていて。あおに乗りながらわざかに前のめりになつ
ているのは、湖までに傾斜があるせいだろう。

湖……いや、難波は唐ゆきの湊みなとがある場所だ。それなら、
「海でしょうか」

「川だそうですよ」

背後で佐久が答えた。

「あんなにも広くて大きいのに、川なのですか」

「ええ、川だそうです」

「海ではなく」

「春時が『この川岸で』どういひつて言つていましたから。おいら

も驚いたんだけど」

「わたくしも、たいへん驚きました」

たくさん水をたたえる 川の対岸は暗闇にとけ込んでいる。
寧良の都の東を流れる佐保川は、漆黒に包まれる新月や陰り夜でも
ないかぎり、向こう岸はじゅうぶん見えた。だが、目の前に横たわ
る「川」は水平線さえわからない。

「とにかく、春時どのは『川の三面で見る川』なんとおおせでしだか」

「待つ間は材木の陰にひそんでこるよ、ひとつ」

確かに隠れるにほうつつけだ。

「わかりました」

れんはあおの背中から下りた。すると、足が少し沈みこんだ。ぎょつとして足を上げ、そろそとまた地面に足を置く。

（こんな地面ははじめて）

妙にざらりとした感触でいて、やわらかく、湿り氣を帶びていて。削った氷に蜜をかけたよつた感じだ。しかし、泥の中のよつに足の上げ下げに難もなく歩けそうだ、と感じたれんは、手綱を腕に巻きつけた。

「岸へ、行きましょ、」

「岸へですか」

佐久は不安そうに言った。

「あおに、お水を差し上げよつと思こます。たくさん走つていただいたのですから」

佐久は迷う。川は怖い。濁流に流されかけたのは一昨日の話だ。

「佐久どのはここにいらして

「でも材木の陰に」

「あおが満足なさつたら、すぐここに戻りますから

しばらくなんだ佐久だが、

「すぐに戻つてくるつて言つてゐるんだしね」

言い訳がましく姫をまの言つことだから、と独り言をくつかえしながら、丸太にどんと腰を下ろした。

かたやれんは、川岸まであおと歩きながら、あおのおしりの両横に下がる荷袋が気になつた。春時を待つ間は、荷をおろしておけばあおも楽ではないだらうか。そう思つて、袋どうしを結ぶ縄に指をのばした。結び田は固く、川岸に着いてゆつべつほどにしても難しそうだ。

「やつぱり」

否、と首を横にふつたれんは手をひっこめる。

「春時どのが載せた荷ですし、春時どのにほどいていただいたほ
がいいかも」

今一度、両手をのばし、荷を下から支えてみる。麻袋は目が粗く、
持つと手指が痛くなりそうなさわり心地だが、中身は柔らかな感触
の品のようだ。袋そのものはさほど重くはない。

「あお。申し訳ないけれど、もう少し、負つたままでいていただけ
ますか」

そんなどちらでもいいよ、といわんばかりにあおは適当に首を
ゆらした。

「あお、ありがとう」

川岸に近づくと、右手のすすきと葦の茂みがなくなり、視界が開
けた。眼前に広がる川の大きさへの驚嘆もさることながら、茂みに
隠れていたその風景に、れんは息をのんだ。

「きれい……」

上流、といつても今立っているところからはほど近い場所だらう。
何十もの光が闇の中、静かに舞つていて。

川岸にはかがり火が等間隔に並び、そのあかりが川面にも映つて
いた。地上には高床の建物が並び、川には数隻の大きな船と、数え
るのを途中で断念してしまうほど多くの小船が停泊している。それ
らがすべて黄色い炎で曉色に染まつていて、まるでこの世のものと
は思えない壯麗な光景に見えた。

「祭礼、かしら。あんなに大掛かりなのは、見たことがないわ」

大きな川。無数の燈火。

なにを奉る祭礼だろう。間違つた名を呼んでは失礼だらうし、拝
趨せずにただ眺めているだけも無礼だらうし、どうしたものか。そ
うだ、ここを「川」と知つてはいる春時に聞けば分かるだらうか。あ
の火を捧げるべきが仏か神か。御名をなんと唱えるべきか。

「春時どのは」

その名を口にすると、思い出した。

最後に聞いたことば。茶化す口調までもそのまままで。

ひとりでは、こわいか？

あのときはからかわれたようだ、くやしかった。でも今は、

「……怖い」

が、正直な気持ち。

「春時どとの離れ、ここまで来るのは、怖くありませんでした。でも今は、もじりして待つのは、とても怖い」

今、ひとりになつて、気づく。

「もしも……春時どのが、来なかつたら。わたくしはどうしたらよいのでしょ？ 都にも帰れない。難波にもいられない。これが川で、あの火がなにで、右や左になにがあるかさえも分からぬ……なのに、春時どのおひとりを渦中に置いて逃げてくるなんて、なんの意味があつたというの……」

あおが荒く息を吐く。

れんははつと我にかえつた。

「そうね、あお」

れんは白い手のひらをあおの首によせた。

「きつとじ無事ね。そして今、こちらへ向かつてこらつしゃるに違いないわ」

あおに導かれてれんは砂の上をゆっくり歩んだ。再び、闇の中に広がる炎の宴はれんの視界から消えてゆく。虫の声は岸辺から遠ざかるほどに大きくなつていった。

が、その声がにわかに途切れた。

丸太の山と山の谷間でれんとあおは立ち止まる。

「佐久どの」

違う。大人だ。

「春時どのは」

違う。人影はみつつだ。

背後で、じゃり、と小石をこすりあわせる音がした。ふりかえると影がもうふたつ。影の足元でぎらりと銅光が鈍く光る。光る抜き身の刃のその先は砂にまみれていた。

何者かとたずねる間もなく人影がれんに飛びかかった。

あおがいななき、れんは大地をけり上げた。湿った砂がはじけた。

目の前の一人がひるんだすきに、横から小さな影が飛びかかった。

「佐久どの！」

「うわあっ……逃げて、姫さま！」

人影の肩にしがみついた佐久がふりまわされている。助けたい、れんは思った。しかし、いざとなつたら佐久は小枝になつて身を隠せるのだといいたる。

（今、わたくしがやらぬといけないことは、逃げる）
れんはあおの手綱をつかんだ。あおは鼻息荒く地団太を踏んでいる。

「あお」

そして手綱を腕にからみつけて、乗つた。あおが暴れだした。

「あお、逃げるのよ」

れんはあおの首にしがみついて命じた。あおは一人けり倒し、さらに興奮して前脚を何度も上げると、どこともなく駆けた。ふり落とされないよう、れんは渾身の力をしてしがみついていたが、いつたいどこへ向かっているかもわからない。

（どこへ行くの）

手綱をからめた腕が痛む。

（どこへ逃げたらよいの）

たてがみをにぎる手がすべる。

（分からぬわ！）

第六話 難波（八）

あおが竿立ちになり、れんのからだはいりきれず投げ出された。

れんの田の前の世界がぐるりと回った。川面が見える。月が半分、雲で隠れようとしている。丸太の山が縦に並んでいる。

自分の周りから水しぶきが上がった。

と思うと、背中や頭に痛みを感じ、次いで全身が水に覆われ沈みこんだ。

（川に落ちたのね……また）

妙に冷静にれんはそう思った。それと、この前の泥だらけの川よりはまだ、とも。

自分の周囲をあぶくが取りまいては次々と水面へと逃げてゆく。あぶくが消えると今度は、さらに細やかな光のつぶが右へ左へとちらちらと舞っていた。

おしうりが川底についたとき、水面は手をのばせば届くほどに近かつた。川は浅くて、立ち上がりればよいだけだ。川底の地面は川岸よりもさらにやわらかい砂場。立とうとして足をとられ、一度おぼれかける。今度は慎重にひざをついてから立ちあがると、胸から上がり水面に出た。

川岸を見た。あおが取り囲まれている。取り囲んでいるのは三人ほどだ。

「あお、助けないと」

れんは急ぎ、両腕で水をかき分け岸へ向かつた。

あおの横にいる男が香炉を手にしている。こいつは相当のお宝だぞ、と不愉快なしゃがれ声が聞こえた。いつの間にかれんのふところからこぼれ落ちたらしい……が、香炉はこの際どうでもよかつた。むしろ、香炉を落としたがゆえ、今までに、あおを危険にさらして

いる。そのことをれんはつよく悔やんだ　あおはわたくしが必ず
助けなければ。

喜々とした男の声がれんの耳に届く。ビリの若様のお馬をまだ?
まあいいだらう、お宝だ。荷の結び目を強引に切ろうとした。あ
おが抵抗する。

「やめてください」

丸太のわきに人のままで佐久が倒れているのが見えた。
あおは、手綱を強引に引っ張られ、首や尻尾を押さえつけられて
いた。

「やめてください……」

あおが全身をねじらせる。いらだつた男たちのひとりが刀をふり
上げた。この糞馬が！

「やめて！」

れんは懐刀を抜き、ひざ元の水をけりあげて走った。

「あおから、離れて！」

そのとき、川下より激しい勢いで水柱が立ちあがった。

賊どもが川へと顔を向ける。と、水柱は狂える三頭の大蛇の姿と
なり、走るれんの頭上を追い越した。

れんはにわかに覚えた恐怖で足をとどめた。

賊たちには見極めるときも、声を上げる間さえもなかつた。大蛇
は男たちに襲いかかつた。ひとりをはじき飛ばし丸太の山に叩きつけ、ひとりを葦の茂みに叩きこむ。と、それはすぐに姿を消した。

寸刻ほど

静寂があたりを支配した。

おずおずと、れんは後ろをふりかえる。

川はもどり穂やかな流れをたたえ、水面に月のすがたを映して
いた。少しばかりの風が通りぬける。と、映し身の月はゆらゆら
と形を変え、葦の茂みが揺れてすすきの穂どうしがささやきあつた。

(なにが、起こつたの)

わからない。だが、れんにはわずかに自覚はあった。すなわち、自身のあおを救いたいとの願いに大蛇は応じたのではないか、と。
(わたくし自身が、呼んだ……まさか、そんなことがあるはずが)
れんは頭をふつて一度、

「いいえ」

と強く言いきかせ、その考えをふりはらつた。

まだ油断はできない。あおは無事。だけど、あおの影にどつさに隠れて難を逃れた男がまだひとり、残っている。

れんはその男を見すえた。短刀を手にかたく握りしめ、胸元でかまえる。

「な、なんだ……今のは……！」

その男は叫んだ。なんなんだ、なにが起こつたんだ。幾度となくくり返し叫んでいた。

れんは氣づいた。男のすぐ後ろにえぐり掘られたような大きな窪みができていた。あの大蛇が大地に刻んだ傷跡だろつか？

さらにあおと男に近づくと、男はれんを見るやますます恐慌をきたし、わめいては後ずさりをした。男は悲鳴をあげつづけた。化け物、化け物だ、化け物があらわれた、近づくな、化け物、助けてくれ、殺される　後ずさつた彼は窪みに転がり落ちた。

「化け物。わたくしが、化け物？」

れんはうめき声を聞いた。葦の中に埋もれる男は苦しげに倒れ伏して、うめいていた。つづいて、丸太にたたきつけられた男。意識を失っているのか微動だにしない。そして砂の穴の中の男は支離滅裂なことをわめきつづけている。

れんはふるえた。

あらためて思う。怖い、と。

腕がふるえ、手がかじかみ、その手から短刀がこぼれ、砂上にとり落とした。れんは短刀には目もくれなかつた。ただ目の前の惨憺たる情景をぼんやりと見つめ、絶望を吐き出すようにつぶやいた

化け物。

「そこで何をやつている」

どこからか若い男の声がし、続いて子供の声がした。

「役人だつ」

逃げ来た方角、斜面の上には一、三の火がやらめいていた。その火が、れんたちのいる場所に近づいてくる。

もう一度、男の子がどこからか呼びかけた。

「役人がきたぞつ」

助けてくれと悲鳴をあげていた男はすぐに走り去った。葦の中に飛ばされた者もはつと目を覚まして身を起こすと、その火が近づくのを見てとるや、役人が来たと叫んで逃げ出した。

れんはその火が近づくにつれ、緊張や恐れがほぐれていった。そして自分に向けられる、皮肉がちなのに優しい、安心できることばを待つていた。

「大活躍だな」

「春時ど」

ふたりはお互に歩みより、向かいあつ。

「わたくしを、あおや、佐久どのが、助け……」

れんの双眸から涙があふれる。頭がいっぽいでろれつが回らない。「待たせて悪かつた」

あふれる涙をれんはぬぐおうとした。が、川に落ちて全身ずぶぬれになつたからか、黒髪がほおや鼻や額や目元、口元にさんざんへばりついている。ぼろぼろと双眸からこぼれる涙は、頬を伝い、髪に沿つて流れたり、鼻の先からしづくになつて落ちたり、口の端にたまつたり。

「あの、春時どの」

「どうした」

「今、わたくし、化け物みたいな顔、してませんか」

「気によることはない」

「やつぱり」

れんは半分やけになつて、ふふつと笑つた。そうよね、そうに違いないもの、みずからに言い聞かせて、笑つた。

春時が不審に思い、どうしたんだとたずねるが、

「なんでもありませんわ。大丈夫です」

れんは微笑んで、首を横にふつた。

「そうです。だいじょうぶ……」

大丈夫、と言い終わらぬうちに、れんは足元から崩れおちた。

佐久が小さな声でつぶやいた。

「姫さまは」

「寝入つた」

春時はれんの顔に視線を落としたままだ。

「佐久、なにが起こつた」

「悪いやつらに襲われてたら、川からたくさん蛇がでてきて、やつつけたんだ」

「蛇……」

れんの安らかな寝息が腕の中から聞こえる。小さく白い手は、春時の衣をしつかりとつかんで離さない。春時がそつと丸太の山にもたれかかると、れんの寝息が一瞬みだれ、左手首にかかる数珠が少しうれて、音をたてた。

れんの睫毛まつげが、その頬に影を落としている。

春時が駆けつけたとき、その佐久いわく、悪いやつらの叫び声を聞いた。化け物、確かに耳にしたはずだ。そして、れんは泣きそうな顔でこうたずねたのではなかつたか 今、わたくし、化け物みたいな顔、してませんか 。

（人ならぬ力と、龍神は告げたが）

佐久が春時、と声をかけると、彼はふつと困惑めいた笑いを見せた。

「おまえのおかげだ」

「おいら、なにもしないよ」

「いるだけで救われる」

春時は眠るれんに視線を落とす。童子のよつまな短い髪に指を通す
と、髪はさりせりと指からすべり落ちた。

第七話 禅師（一）（前書き）

これまでの話中の「うち、れんの父藤原豊成の官職を『右大臣』から『前の右大臣』や一ックネーム的な『横佩大臣』、単に『大臣』などの表現に修正しました。最新更新分から読まれる方は戸惑うかもしれませんが、『容赦ください。

今回は古代難波トラベルガイドです。

第七話 禅師（一）

春時は川に足をひたして、糸をたれていた。

「このあたりは堀江と呼んでいる」

そして岸辺にならぶ高床の建物群を空いた左手で指さした。

「堀江の館の倉だ。

倉は船で運んできた荷物を荷揚げして、保管する。やがて別の小船に載せかえて川瀬をゆくか、荷車に載せかえて街道を進んで、都へと運びこむ」

水際かられんは北の方角をながめた。

高床の倉を見下ろすように大きな館が築かれている。それを堀江の館といい、官吏たちが詰めており、ときには外つ国からの賓客が滞在した。

一方、川岸には小船、大船とりまぜて密集しているが、八丈にもなる大船が十ほども並んでいる。その光景はなかなか圧巻であった。

「では、昨夜見たたくさんの火は」

「倉の警固のためだな」

川岸と川面を覆いつくしていた昨晩の無数の燈火は、祭礼ではなく、都へ向かう貴重な荷を守るための灯りだった。祈りをささげなかつたことをれんは悔やんでいたが、その後悔は不要だつたようだ。

「春時どのは、お詳しいですね」

「そうでもない」

「春時どのは市人いちびとだつたのですか」

「盗人だ」

「盗人だから、お詳しいですか」

「満載のお宝を売りさばくうちに」

春時はぐらかすような応答もさることながら、表情が一瞬こわばつたのをれんは見逃さなかつた。身の上話に踏み込まれることを明らかに拒んでいた。だから、れんもそれ以上はたずねない。

「でも今は、盗まないで商いをおこなつてます」

「でもついこの前は、流浪人さ。お、またひつかつた。佐久」

「いいかげんにしろよう……」

佐久はだらだらと魚籠を抱えて、川に入つてゆく。

「おいら、川は大嫌いなんだつて言つてるだろ」

「大嫌いってほどでよかつたな。慣れただろう」

そりや そりや そうだらうけど春時はやつぱり横暴だ、と佐久はぶつぶつ不平をこぼした。れんもそうね春時どのはとつても横暴ですわ、とつづけた。あおは静かに立つていて…… どうも寝ているらしい。そして、春時はため息をついて言った。

「姫さまにうまいハゼを献上する手伝いを頼んでいるだけだ。どこが横暴なんだ」

佐久はぶうぶう言いながら春時の釣つた魚を魚籠に入れる。

朝の食事はさばきたてのハゼの刺身。酢とれんが持ち出した醤ひしおで堪能する。

ちなみに食するのは人たるれんと春時のみ。佐久は桜の小枝などで、水を飲むだけだ。だから佐久は不満たらたらだつたわけだが。ただ、れんが、

「こんなおいしいものはじめて」

と喜んで佐久にお礼をくり返すうち、佐久の機嫌もすっかりよくなつた。

食事をとり終えると、れんの旅装もおおかた乾いていた。

釣りすぎた分は丸太山のはしの小屋まで行き、干しハゼと交換した。削つて湯に浸すと味がるので旅の保存食にする。余った分は山村に持つてゆけばよい取引ができるだろう。

そんな算段をしている春時は、やはり市人かその周囲の人だったのではないか。そのようにれんは想像するのだった。

「では行くか」

あおの背にはれん。男物の旅装束だが、それなりの身分の子孫もに見えた。

あおのわきには頭には頭巾、白衣に黄褐色の袍^はをまとう春時。麻の貫頭衣に勾玉を下げる佐久。

やや目立つ。逃げるのにはふさわしくないとれんは言つたが、春時はその方がよいと返した。かえつて目立つくらいのほうが、街道筋の駅役人の目にとまつて不審に思われないだらうし、市での購いも信用されやすいと云うのだった。

（でも、わたくしたち、どこに行こうとしているのでしょうか）都にも戻りがたく、難波にも居場所がない。ほかに行く場所を知らない。

春時が知る土地にでも行く？ 春時は身の上を詮索されることを嫌つてゐるのに？

丘陵を登りきると、東には広い湖が見えた。

「湖は草香江といつ

草香江から流れ出す川は、堀江をとおり東西へ横切つている。一方で、堀江には北側からもうひとつ川筋が合流していた。

南に視線を転じると、草香江の南側から四、五本ほどの川が南へと川筋を作つてゐる。そのひとつはやがて方角を東に変え、一昨日越えて来た生駒の山々へと伸びてゐた。山の端から昇りきつた太陽の輝きがまぶしい。

今度は左手……西方に目をつづす。と、おびただしい数の礫洲^{れきす}による島があり、島々のむこうに海がひろがつてゐた。

れんは空想の中でも目の前のすべてを黄金に染め、その美しさにひたる。

難波の海に夕日が海に沈みゆくころの絶佳な美景は、幾人もの歌枕に詠まれ、世に知られていた。

「思つたより船の便は多そうだな」

れんは北へ伸びる堀川へと視線をもどす。

瀬戸内海から難波津へ入り、ほかの湊をめぐる航路は定まっているらしい。北の川筋からやつてきた船は堀江へと入り、堀江を出てゆく船は草香江を周回する。

「江を回遊する渡し船で東岸の江へゆこう。幸いにも資銭は潤沢にあるしな」

「船を降りたあとは」

「東岸から北へ向かい、淀川に沿つて歩いてゆく」

「その淀川という川は、船に乗つてはいくこと、はできないのですか」

「その便もあるが、遅いし、あおもいるなら乗らないほうが賢明だな」

「あおがいると?」

「あおを乗せられるくらいだと、それなりの大船に乗らねばな。渡しだけならよいが、その先は悠長な船旅になるよ」

難波津より先、川の航行は櫓をいぐのではなく、小船で棹を差して進むものだつた。あまりに浅いところは船の触先へさきに麻綱をつけ、船を下りた水主たちが岸から麻綱を曳いて動かしていた。

夏の夜は道たづたづし船に乗り
川の瀬ごとに棹さしのぼれ

ましてや、大船は喫水が下がるために、川に入ると航行が困難になる。水量の少ない時期は濛みおつくし標を見逃して航路を逸れると、川底に船がついて座礁してしまった危険性があつた。それに、川の流れに逆らつて川を上るのは、櫓をこいでも容易には進まない。航行は西風を利用していたから、風の助けがないときは立ち往生も同然に、ほとんど動かなくなるのだった。

難渋する航行のようすは和歌にも歌われている。

堀江よりみをびきしつつ御船をさす
しづ男の伴は川の瀬申せ

「遅いとは、どれほどですか」

「堀江から山崎湊まで四日。対岸まで渡し船、そこから歩きなら一日もかかるない」

「歩くほうがよほどましだね」

佐久が笑つてそういうと、

「おまえは水辺に近づきたくないだけだらつ」と春時がつっこんだ。

ただ、佐久の言つとおりにはちがいない。あえて川の瀬を上の船に乗る用途といえば、至急ならざる公用、資材の運搬、それに貴人の川遊びくらいのものだった。

「ちょっと待つた

春時があおの腹を軽くたたいて止める。

「どうしました」

「荷台がずれている」

春時はあおの左側に回りこみ、れんのすぐ後ろの荷物がごを上げた。荷台とかごをつないでいる繩がほどけかけている。繩の両端をひっぱり、しつかり結びなおした。

「まあ、こんなもんでいいだろう」

春時は納得するのだが、れんは少し不審に思つた。若干慣れない手つきだったからだ。商いのことには詳しいが生業なりわいとしているようには見えない。盗人にも盗んだ荷物を運ぶ機会はあらう。

れんは沈鬱にうつむいて考える。

詮索はしたくない。けれども、一度ふに落ちないと感じた疑問は、簡単には振り払えない。せめて、ビニカルに向かうつもりがだけでも知りたい。

「春時どの」

れんは意を決してたずねた。

「これよりわたくしたち、どちらへ参るのでしょ？」
「美濃に決まってる」

れんははつと息をのんだ。

春時は当たり前だというように、淡々とつづける。

「良くなしてくれた人がいたんだろう、なにも聞かずに。なんの見返りも求めず、親切にしてくれた人が。その人のために、美濃へゆくんじゃなかつたか？」

ええ、とれんは大きくうなづいて笑った。

第七話 禅師（一）（後書き）

「堀江よりみをびきしつつ御船をすじづ男の伴は川の瀬申せ」（「

万葉集」卷1-8 4061）

「夏の夜は道たづたづし船に乗り川の瀬」とこ棹をしのぼれ」（「

万葉集」卷1-8 4062）

第七話 神鷲（一）

「なにか、忘れている気がしております。なにかわからないのですが」

れんは馬上で首をかしげた。

しかも未だ心ここにあらざる面持ちである。

「きっと、大事なことは必ずですが」

「忘れるようなら大事でもないだら」

「春時どのは、あげ足とりばかり」

文句を述べたあと、れんは再び思い悩む。

逃げることで頭がいっぱいだつた。今でも無事に落ち延びることばかりだ。それで、大事なことを忘れてしまつた。思い出せなくとも大事なこと。それはただの勘違いでは？

ひとたび迷いが生じると、すべて自分の思い込みではと疑わしくなる。

「わたくしは、ほんとうになか忘れてこるのでしょうか」

「そのうち思い出すや。あまり考えすぎるとまた落馬しかける」

「しかけません」

言い切つた。そのくせ、落馬しない自信もない。春時のからかい……ではなく忠告のどおり、深刻にならざるほど思えることとした。

津にはたくさんの船が並んでいたが、春時は大きめの船に近づいていた。船の曳き手らしき男になにかをたずね、次に違う男のところへゆく。

「船頭」

ひと声かけた先、男がふりかえる。

春時が手振りで一行全員をさし示し、外つ国の言葉で話しあじめた。

彼らの言葉は唐のものだ。れんは話せないが、音読はできた。富

廷への出仕には『論語』『孝經』といくつかの經伝が素養として求められるからだ。ゆえに、れんには彼らの会話をつまびらかにはつかがい知れない。しかし、断片的に推察はできた。江を渡るための交渉だろう、と。

にしても春時の交渉は場慣れしている。

(やはり商い人であつたのかしら)

たずねてみたいが嫌がりそうで、もどかしい。

「半刻もなく出帆するそうだ」

春時が急いた。

渡し板から船上に乗ると船尾にゆけとのこと。主屋形より後方にある、小さな艤屋形ともやかたの軒下に陣取つた。少し興奮氣味のあおを春時がおさえる。

佐久は水ぎらいなわりに船は氣に入つたらしい。あちこち歩き回つて、さつそく話を聞きつけてきた。

「あおが暴れたら即、船からたたき落とすって言われたよ」

「まあ、それは大変」

れんが見たところ、あおはまだ落ち着きがない。

「たたき落される前に他の乗員を道連れにするがね」

春時は好戦的なことを言いだした。

だが、二、三人ばかり道連れにしたところで状況が好転するでもないでの、

「あおは姫さまにお任せしたら」

「それがいい。あおが暴れたらだれよりも真っ先に川の中だ」

「わたくしが入水するときは、春時どのが、どなたかを道連れにしてからです」

「非道いな

「姫さまこわい」

「それで、わたくしは、あおの心が安まるよつ、声をおかけすればよろしいのですね」

あおをなだめることが肝要と結論づけられ、それはれんの役目と

なつた。れんが幾度か大丈夫と声をかけると、あおは落ち着きを取りもどし、端然と起立した。

空中で大声が飛び交っている。おそらくこれも唐の言葉だ。

「帆を開くんだつて」

見上げると空を横切るかのような帆桁に、一人ほどが座っていた。彼らは落ちないよう帆桁に足をからませて座り、器用に網代帆と帆桁を繩で結つた。やがて結い終わると、するすると主柱を降りる。風を受けて帆が「」なりになつた。

銅鑼が鳴り響き、船が揺れた。

あまりの大音量にれんの顔がこわばる。

「だ、大丈夫よ」

あおをなだめるも、当のあおはすっかり平然とすました顔で起立していた。

船の揺れは最初だけだつた。水をかき分けなめらかに進む。潮流や波のほとんどない江をゆき、主に網代帆で受けた風の力で航行しているため、あまり船体は揺れがこない。海洋や、逆風のとき、水の底に棹差して進むようになると、船がぎこちなく動いて揺れを感じやすくなるという。これも佐久が聞いてきた知識だつた。佐久の好奇心はとどまるところを知らない。

「春時つてさ、外の国から來た人？」

れんは佐久の遠慮なさにむしろ感謝しつつ、春時を見た。

「酒家でも唐人の話にふつうに感じてたしさ」

春時が面倒くさそうに言つた。

「おまえくらいの年かつこうの頃には自然と覚えていた」

「自然と覚えるつて、どうしたらそうなるのさ」

「そういう者たちが来るところにいれば」

「どんなどこ？」

「難波みたいな」

「面倒くさい、といづよつはまともに答える氣がなさそうだ。」

「難波にいたの？」

「さつきまでいただる」

「じゃなくてさ」

やはり答えをはぐらかされる。

「それよりもな佐久」

「なに？」

「俺とお前が父子という設定はどうしても認められんな」

「なぜだい。酒家では『』へ自然だつたでしょ」

世間が認めるよ、と訴つ佐久。そこまで年を重ねてないと主張する春時。彼らは設定を偽親子とするか偽兄弟とするかで論争をはじめました。

れんは、あおをなだめるふりをしつづけた。意見を求められては困る。どちらかの肩を持たねばならないからだ。ただしれんは性格がら、まじめに意見は考えていた 養い子なら父子でもまったく不自然ではない。商い人ならなおさら。そもそも春時ビの、そういうつしゃるからにはおいくつなんですか。

かくしてあおはれんの逃避行動のダシにされた。大丈夫とくり返しつぶやかれるのを聞き流し、ため息ならぬ鼻息をひと吹きさせていた。

第七話 神師（二）

西の空に日が傾きつつあるころ、樟葉の里を通りかかった。

淀川水運の上流の拠点であり、山陰道との分岐である山崎まではあと数里もない。船は山崎湊に拠ることが多いからか、岸辺には漁をする小船がいくつか並んでいるほどだ。

ただ、人通りは多かった。

難波と違つて、官人らしき人は少ない。

疲れきつたうつろな目をし、薄汚れた装いで行き交う旅人が目立つた。

かれらがどういった人々なのか、れんは耳にしたことはあった。

兵士か、土木工事か、国衙か寺の造営か。そのいずれかの徵発をうけて現場に赴くか帰郷をする人々だ。いずれの雑徭に携わるにせよ、かれらが郷里と現場との旅のあいだに飢えに苦しむことは珍しくない。かれらは日々の暮らしも苦しい。その上に、手持ちの装備や食糧を持ち出さねばならなかつた。旅の途中でなけなしの蓄えがなくなれば、やがて衰弱して命を落とす。

生きづづけて再び出合えた、あのきよくの老親たちはまだ幸せなほうだった。

苦しい思いを飲み込むように空を見上げた。雲を眺めるにつけ、世の無常さを感じずにはいられない。れんの目に映るのは空ではなく、やはりどこか苦しげに前へと進む人々の残影だった。

春時と佐久は、れんがどこか上の空になつてゐることに気づいていた。

「姫さま」

「佐久、邪魔をするもんじゃない」

「どうして」

と佐久が問うと、

「やん」となき方は、世の在りようをその目で見、そして世を良く

するために考へることがつとめなのを」

横であれこれ言つてゐるのと、れんは無反応だった。

「父上つてもの知りだね」

「兄だと言つてゐる。親子設定は認められんとあれほど」

「だからそれは世間が認めてくれてたじやない」

再度論争をくりひろげる彼らだった。

が。

「れん？」

邪魔をするなと言つた当の春時がれんに声をかけた。

「…………春時どの」

「どうした」

「思い出しました！」

れんは突然大声をあげた。そして、あおから落ちかけた。

毎度のことで春時が支えたのだが。ため息をつきながら何を、と
ぶつきらまうに言つ春時に、れんは身を乗り出さんばかりに答える。
「薬を作つて、届けねばならないのです」

「どこの誰に」

「都の、家の司の、瀬雲に^{せくも}です」

瀬雲 春時は思い出した。都の右大臣家司の堅虫のひとりむす
め。

蒼白となつた顔に、うるんだ眼。堅虫に入ばらい中だと叱られながらも、几帳のかげで小さな体をふるわせながら平伏していた。あれは、春時があの娘を見た最初であり、かつ最期の姿でもあった。もはや瀬雲はいない。だが、そのことを春時はれんに話していくない。身代わりとして命を落としたのだ、とはどうしても告げられないでいる。

だから説得理由はひとつしかない。

「都には戻れない」

「しかし」

「追つ手がかかっている」

「瀬雲は今も苦しんでいます」

れんはみずからが苦しんでいるように訴える。

「昨晩のことをもう忘れたのか。やつらは簡単に刃を向けてくる。命を落とせば、その瀬雲が苦しむようになる。なにも変わらない」「薬を届けたら、また逃げればよいではありませんか」

「簡単に考えるものだな」

冷ややかに春時が言った。

れんは常ならぬ不安を感じる。今まではあきれたと言いたげな口調だった。思えば、れんの無知をとらえて冷笑はしたが、受け入れる余地があつてこの内の揶揄や反論だったのだ。今の応答は違う。あきらかな拒絕だ。

「……春時どの」

「山崎までゆき、泊まれるところを探そひ」

春時の誘導にしたがい、あおが方向を変える。

れんはことばを継げなかつた。

しかし、彼が冷笑とともに態度をひるがえすことを望む。

難波へとゆく生駒越えでは、望みは受け入れられた。仕方ない、とあおをれんの望む方向へと向けたのだ。山崎からも、南へ進めば都に戻ることはできる。

西からの風が北からに変わる。九月、陽が傾くとたんに寒さを感じはじめる。だから今夜は山崎で足を落ち着ける。それだけだ。

そう信じたい ほんの少しの期待をして、れんは無言で手綱を握りしめた。

すると突然背後から、

「そちらの行き商いの方。もしや」

と声をかけられた。れん、そして春時は振りかえる。

十歩ほどあとから僧侶が一人歩みよつてきた。若くて身ぎれいな

黄色の法衣の僧と、初老のみすぼらしく色のはげた衣を着けた僧。二人はあまりに対照的な姿をしている。

「あなたは」

と春時が困惑したようすでいると、初老の僧が柔軟な笑顔を見せた。
「やはり真春^{まはる}どのですね」

第七話 禅師（四）

れんは、はじめその場所がこの世のものとは思えなかつた。

暗い小屋の中にはいやな臭いがたちこめ、びつしりと人が横たわつていた。口々に不調を訴える者、すでに意識を失つている者、衣がどす黒いもので染まりうめき声を上げる者。

一緒に来た若い僧は、部屋の隅に座すると、ただちに経をはじめた。

初老の僧は、横たわる病人たちを診ていつた。話せない病人の身体に素早く触れては板になにかを書き込む。だが、話のできる者はじつくりと不調の具合を聞いている。

れんはしばらく入り口で立ちつくしていた。

「ここが布施屋」

人を救いたいという切なる願いがおありなら、ぜひ布施屋をみていただきたい。ここからほど近い、久修園院にあります。

その僧は、春時との言い争いの始終を聞くとその是非には触れず、れんにすすめた。れんが春時に行つて良いのかと聞くと、春時は一晩、屋根を借りることができるならと了承したのだった。

道すがら、その僧はれんにたずねた。

「布施屋をご存知ですか」

れんはいいえと首を横にふる。すると若い僧侶が話を継いだ。

「布施屋とは、租税や労役、兵役へとおもむく民が困つたとき、手助けするところです。民が手持ちの食べ物や錢をなくしてしまったとき、食事をお渡しします。病気やけがになれば、一時的にですが治療をほどこします。

今から参りますのは、拙僧の大師である行基大僧正がおつくりになられた布施屋のひとつ、久修園院です。拙僧は師のご引導にて赴く

のですが、禅師は偶然、和泉国で道行きになつた。縁でともに元氣で、驚くださることになりました。

そして若い僧侶はとなりで微笑む僧侶に対し敬意をあらわした。

禅師 そう呼ばれるからには高位の医僧であるらしく。衣のほうもびき具合だけなら、まるで若い僧侶のほうが高位に見えるのだが。

「れんどの」

れんははつとして初老の僧のもとに急いで。

彼が今、診てこるのはやせた若い女だつた。

「ぜひ診てください」

「わたくしが、ですか」

「はい」

僧は厳しい目で言つた。

とまどいながらもれんは女性を見た。けがではなく、病持ちだ。

女の手をとつて脈を見る。

「お悪いのは、どちらでしょうか」

「おなかが、とても、痛くて」

女は疲れた声でとつとつと答える。

「どんな感じに痛いでしょうか。ええと……刺されるとか、押されるとか」

「ぎゅうぎゅう、押されるみたいで、あとひきつたりすると、血が」

れんは女が痛みを訴えている下腹部に手をあてた。息をひそめて脈を感じ取り、手を離すと、疲れているのにじめんなさい、と断つてからさらりに問い合わせを続ける。十ほどの質問を終えると、少し考えてから、禅師に顔を向けた。

「流産なさつたことと、右下のおなかにひどいお血があります。下焦虚寒から全身まで虚証がおよんでいます」

「なるほど。では、処方はどうお考えですか」

「生姜あと当帰、人参、甘草、それと半夏に麦門冬、もあるのでしたら、吳茱萸……」

いつの間にか黄衣の若い僧が座っていた。彼はれんの答えた生薬の名を薄い板に書き写していく。答えたままを患者に施すつもりなのだろうか。れんは不安になつた。

「あの、禅師さま」

「拙僧も同じ診たてです」

禅師はすりきれた袈裟を直すと、はじめて会つたときの柔軟な笑顔を見せた。

（わたくしの診たてが合つていた）

れんは喜びにふるえそうになつた。

はじめて会つた人の病状を聞き、病の原因を判断し、処方を決める。れんがこれを行うのは、はじめてのことだつたのだ。瀬雲にしろ亡き母にしろ、病の原因はあらかじめ聞いていた。原因を知つて、経過観察した内容を医書を突きあわせながら、処方をくふうしていたにすぎないのだ。

だが、喜びにひたる間もなかつた。

「次の方を診ましょう」

たくさんの方の患者がまだ横たわつてゐる。

何人いるのだろう。

ふしきと疲れは感じない。ふと気がついたのは、小屋に入つてきたときの不快な臭いを感じなくなつたことだ。むしろかぐわしい香りが広がつてゐる。

（どうしてだらう）

理由を探す時はれんには「えられなかつた。横たわる男の腕をと

り、傷のぐあいを診る。

「これは、ひどく失血したのでは」

「金創です。手当ての方法はわかりますか」

「たしか……」

外傷、全身の虚弱 この小屋には旅のけが人と飢えで衰弱した人が多かつた。右大臣の姫を取りまく人々にはみられない症状の人々ばかりだ。それでもれんは、日々眺めていた医書の記述を思い出

しては有効な生薬を頭からひねり出し、答えていった。三つにひとつは誤りを指摘されたが、だからといって落ち込む間もなかつた。

最後の患者を診終え、禅師が立ち上がる。

と、一緒に来た若い僧と布施屋ではたらく者たちだらう。彼らが禅師に問い合わせた。

「近江にゆかるるとか」

「明朝、お発ちになるのですか」

「明朝もう一度うかがつてからにします」

「なにか、気にかかることでも」

「鍼をうつとよさそな方がいましたので」

「ああ、ありがたいことです。内道場の看病禅師さまに、これほどまでにお心遣いいただけたのは」

彼らは一様に深く拝謝した。

禅師も応えて合掌し、礼をとつた。

そして彼らははじめて陣取つた小屋のすみにゆき、誦経を再開する。その声はまるで軽やかに唄つようで、文机にあつた箸を持つと、なめし皮を広げた上に置いた小さな陶皿に粉にした薬草を落としていた。今、小屋を満たしている心やすまる芳香は、その器でいぶされていいる香であった。

小屋をあとにした禅師のあとをれんはついて歩く。

とても豊富な医術の知識をもつ、高位の禅師。内道場の看病禅師といえば、宮廷でみかどのために祈祷を行う方ではないか。その方は春時を知つていて、彼を『まはる』と呼んだ。春時はその名を呼ばれて困惑し、そして『今は』春時と名乗つてはいるが、れんの耳の前で答えたのだ。

(一)の禅師をまと春時どのは、どのよつなご縁がおありなのでしょう

れんがその疑問を頭の中でもり返し考えていると、

「そういえは！」

大声をあげて彼はふりかえつた。

れんがすこし驚いて目を丸くした。

すると、この年になつて未だにあわて者なのです、と禪師はぱつ
の悪そうな、それでいて愛嬌のある照れ笑いを見せたのだった。

「すっかり名乗りを忘れていましたね。拙僧、どくそう道鏡と申します」

第七話 禅師（五）

れんは粟の椀をすすり、芋煮と焼いたまこもの茎を口に口にし、あけびをかじつた。

旅は疲れる。その上たくさんの人を診た。心身ともに疲れきつていた。だが、もっと苦しんでいる、食っている人がいる そう思うと目の前の膳がひどく豪勢なように思えた。箸がすすまず、れんは思いのたけをこぼす。

春時は芋を曛下すると、

「道鏡禅師はあまり考えずに食べるだらうな」と言つた。

「そうでしょうか

「そういう方だ」

「そういう方とは、どういう方ですか」

「可哀想なくらい単純な方や」

春時はからかうような口ぶりで続けた。

「この膳と向き合つたならどう思われるか。そうだな。うまい、まずい、満腹だ、物足りない」

「なんですか、それ

「考えるのはその程度。目の前のひとつのことしか考えられない。れんのようにあれこれ、他事まで思い悩める方じゃない」

「そのようなおっしゃりかた、ひどいではありませんかまるで小ばかにした物言いに、れんは憤慨して問いただす。

「禅師さまは、立派なお方でしたわ」

「確かにご立派であらせられる、なにしろ禅師だ」

「だいたい、禅師さまと春時どのは、いかなる関わりでいらっしゃるのですか」

「何年か前、都でひどい流行り病があつたろう」

「……豌豆瘡のことでしょうか

れんはまだ幼かつたが伝え聞いてはいた。

都はさながら地獄の様相を呈していたという 市井の人も殿上の人も、次々と高熱を発し、全身に空豆のよくなき疱瘡が浮かびあがり、激しい苦痛にさいなまれながら亡くなつていつた。

「禅師は、いやそのころは東大寺の修行僧でおられたが」「はい」

「民を施癒されていた」

僧たちは寺の内外で活動した。病の退散を祈祷し、医の心得あれば治療を施した。

といつても豌豆瘡 天然痘の治療法が確立したのは千一二百年も後、十九世紀のこと。貴族なら症状を和らげるありとあらゆる薬を服用できるというくらいで、自然に癒えるわずかな幸運のおとずれを祈願するしか道がないのは、身分の上下なくみな同じであつた。

それでも仮の施薬小屋は数多の患者であふれかえつた。医僧たちは昼夜たがわず、救いを求めるかれらに正面から向き合つた。道鏡も数多くの民を診てまわつた、そのひとりであつたといつ。

「それで、お一方は」

「そこで施しをうけて会つた」

「禅師さまからの施しですか」

「そうだ」

「……春時どのは、名を百回でも唱えられておられたのですか」

いいかげんなことを、とれんは憤慨した。

あふれかえる患者の一人を、夕暮れの旅の路で呼び止められるほど覚えているとは到底信じがたい。そもそも春時には痘痕あはたひとつない。

「三百は唱えたかな

「少のうございますね」

れんは膳に残る青菜をたいらげた。立腹ながら満腹になつた。

折りよく板戸の裏から顔を出したのは、話題の禅師である。

「れんどの、浴室を使われてはいかがかな」

「よろしいのですか」

れんは喜々として身をのりだした。

「浴室で身を清めるのは、医書に接するより善き」ことです。そもそも遠慮は無用。布施屋の浴室は旅人のためにあります」

「では、おことばに甘えまして」

いそいそとれんが着替えをかかえると、春時がうながした。

「佐久。おまえも浴室へ行け」

「なんで?」

「お守りしろ」

「わかった!」

佐久はれんについて行つた。姫さまを守り助けるのが役割だ。桜の精の少年は、そう自認している。

「さて禅師」

両人の声も遠くかき消えると、春時が道鏡に向き直る。

「布施屋ではご迷惑ではありますんでしたか」

「とんでもない。正直、驚嘆しました」

道鏡がかぶりを振つた。

いわく　　おそらく何十回も医書を読み返したのでしきうな。医書の文字の並びまでしかと覚えておられる。不安そうであつたのは最初のみで、病人の訴えにもよく耳を傾けられ、実際に立派でございました。しかるに、聞くにぎつと家におり人に会うのは用例の礼にて参内するくらいしかなかつたと、さように申される。まこと、芯の強いすぐれた御方よと感服いたしました。して瑕疵を挙げるならば、足りないのはより多くの人々を観ること。書物なぞは汎そのこと記した物に過ぎぬと解すること。それだけでございましょう。

その口上はすべらかで、おためこかしには聞こえなかつた。

春時は苦笑した。うかつにも、れんは自分を宮中に参内する殿上の人と明かしたらしい。あとで苦言せねばなるまい。

ただ、言わざとも道鏡には見抜かれていたろう。それでも問題は

ない。

「おりいつて頼みがござります」

むしろ出自を明かさねばならないのだから。

「いかようなこと」

「都に人を遣わすふりをしていただきたい」

「ふり……都になにか障りがおありか」

「追われております」

「貴殿ですか、それともあの姫御に」

「藤氏の中将姫です」

道鏡は絶句した。

「かまわざ春時はたたみかける。」

「横佩大臣・豊成公の邸に人を遣わすふりをお願いしたいのです。」

先刻はみつともない行く先争いの顛末をお聞かせしましたが、結句、姫には人を遣わすとだけ話し聞かせればそれで済む。實際に人は要りません。なぜなら、そのむすめはすでに……」

「待つてください」

道鏡は困惑を隠さず話をとどめた。

「なにか」

「いや、その話、いま少しゆるりと。拙僧は混乱しております」

「まさかこの私が、藤氏の姫御に手をさしのべよしとは、と?」

「つむ……」

図星か、道鏡は返答をのぞこつまらせた。

正直なかただ。春時は口もとを上げた。

「人の心は移ろいもの。ひとえに民の救済を願つた貴僧が、殿上を目指されたよしに」

「……」

道鏡禪師は沈思する。

春時の言いよは決して非難ではない。むしろ好意的であった。

そして、まるで自らに言い含めるよつでもある。彼の心のうちのあらわれだろう。

「さておき。姫は継母の妬みにて銭目当ての盗人どもにかどわかされ、邸を放逐された御身です。しかし、その身の不幸は放逐のみならず。藤氏を仇敵とみなし一矢報いんと徒党を組む輩からもつけ狙われているらしい」

「ゆえに、都に戻るはその身を危うくする」

道鏡はまぶたを上げた。

おおかたの事情は察した。

都へ薬を届けたいという病のむすめも、その騒動に巻き込まれて果てたか。なるほど、姫と少年が座をはずすや、時もおかず前段なしで本題から説いたのも道理である。一人の耳に入らぬよう、早々に切りあげたいはずだ。

「分かりました。瀬雲どのを診ましょ」

「診ると申されましてもその者は」

怪訝な顔で意を問おうとする春時に對し、道鏡は首を横にふる。
「拙僧にできるのは、話を心ゆくまでつかがうことと施療だけです」
佐久とれんの話し声が庭先から聞こえてきた。

第七話 禅師（六）

蒸し風呂にて躯の内外を洗い流しつつ、れんは思いに沈む。売り言葉に賣る言葉といつまでもないが、春時とはいつまくいかない。

都には戻るべきでない。

頭では分かつていた。頭^ごなしの否定に收まりがつかなかつたのだ。それで言い争いになつた挙句、偶々通りかかつた道鏡^{たまたま}禅師を巻き込んでしまつた。どうにも始末が悪い。

道鏡は説教めいたものは語らなかつた。布施屋を案内したのは、人を癒すことの実際を身をもつて諭すためだろうと、れんは受け止めている。

「わたくしが行き、薬を与えねばならないと、思いこんでいたわ」
「それこそ思い上がりというものだらう。医書を座学で修めていうと、毒にも薬にもならぬ。」

瀬雲には堅虫^{かたむし}という立派な父がいる。思慮深い堅虫が、吾がむすめの身体を氣遣わぬわけはない。都には本草に造詣の深い薬師がある。また居るのだ。いざとなればかれらを訪ねねばよい。

「かならず、わたくしが行かねばと、そう思つたけど、世間知らずのあらかな思いこみだつたわ」

ただ、実際にはどう立ち回ればよかつたのか……忘れればよいとも思えない。

そして わめいている佐久の声に気づいたあと、むりに落ち込んだ。

「浴室でぼんやりするのはやめてください」

「ごめんなさい」

佐久に叱られ、れんは恐縮した。

考えすぎてのぼせて意識が遠のいたところを、佐久により浴室から外へひっぱりだされたのだ。ついでに頭から冷水を浴びせかけら

れた。

もしこれが佐久でなく春時だつたら、
(恥ずかしくて、顔から火をふいて、焼けて消えてしまいたくなつ
ていたでしよう)

いそいそとあてがわれた寝屋処に戻る途中、じつそり佐久に頼んだ。

「このこと内密に」

「いいよ」

佐久は笑顔で応じた。

「父上が聞いたらせつたい姫さまに説教だらうし、そしたら姫さま
は怒りだすでしょ。もう夜更けだもん、面倒くさいから言わない。
また今度にするよ」

「また今度もやめてください」

嬉しいやう悲しいやらの答えに、れんもクスリと笑つて答えた。
そして、やや間をおいて佐久に問いかける。

「佐久どのは、都に戻るのは、とんでもないとお思いですか」

佐久は少しうなつて答えたことは、

「やめたほうがいいんじやない?」

「やはりそうですか」

桜の精の子どもでもそつ判断するのなら、自分の言い分など甚だ
しく論外であろう。

(謝らなくては)

れんはそつ心を定めて寝屋処に足をふみ入れたのだが、

「れんどの」

すぐに道鏡から声がかかつた。

「すつきりされましたかな」

「はい、とても」

どきりとしつつも、なんとか答えた。

春時に謝りう。そう思つていたのに、禅師がいるはす向かいに春
時がいるとなると正直、謝りにくい。気まずい、それでうまくこと

ばが出ない。

それでも決心したことであるからと、握るこぶしご力をこめた。

「春時ど、あのつ

「れん、都の瀬雲どのは」とだが
いきなりくじけた。

「禅師に都の瀬雲どのはを診ていただける

「えつ

思いがけない申し出にれんは固まつた。
つづけて道鏡が問う。

「いいえ、拙僧が診るわけではないのだが……ともあれ、れんどの
経過と処方をお聞かせください」

れんは持ち物の袋にかけ寄ると、中をあわててかきまわし、あり
ましたと声をはずませ木簡をとり出した。

道鏡は木簡の墨書きにひつと目を通して顔を上げる。

「寒滞肝脈の症があるようですな」

「はい

「れんどのの見たてをお聞かせ願えますか」

「瀬雲はいつも青ざめた顔をなさつていて、なのに時折、たいへん
顔が紅くなります。あと、めまいと手指にふるえがあります。ひど
いときにはおからだすべて、ふるえています。おそらく寒虚で内熱
があるのでだと思います」

道鏡はうなずきながられんの話に耳をかたむけ、少し思案してか
らまた問診をつづける。

「瀬雲どのはどのようなお方ですか。病に対する性分の意味あいで
「症状がひどくとも、苦しいとおっしゃらない、がまん強い方です」
そういうた心の強さがかえって我慢を重ねたすえに内熱をためて
体を悪くしていると思う、とれんは所見をそえた。

「道鏡はふむ、と深く息をついた。
「鍼はおこなっていますか」

「いいえ。わたくしは習得しておりませんので

「しびれがあるなら鍼は非常に有効です。食が細いのなら養血を促すことが肝要。それと冬の気が強くなる中ですから、温経散寒の効をより強くする必要があるかもしない」

れんは感心しつつ何度もうなずいた。

「いすれにせよ難しい病のようです。季の変わり目でもありますから、こまめに脈診をしたほうがよいと感じました。その上で薬を調じるほうがよろしいでしょ」

「されど、わたくしは、ゆえあって都に参れないのです

「知り合この薬師に頼んでみましょ」

「よろしいのでしょうか」

「易いことです」

「ありがとうございます」

「ありがたい申し出だつた。都には腕のいい薬師がいるのは分かつていて、ただ、れんには伝手がない。どうすればよいか分からなかつたのだ。

「ここの簡ですが、頼む者に送つてもよろしいですか。処方と経過が実によくまとめてありますから、参考になるでしょ」

「ぜひお持ちください」

「ほかに伝えるべきことはありますか。その郎女のことに限らず。

いつしょに携えさせますが

「もし、父上に文を届けられるのなら」

「どうでしょ」

道鏡が春時に判断をうながした。春時が答える。

「良いかと」

「では手配してまいりましょ」ふみ文は朝の出立までにお渡しくださ

い

道鏡は腰を上げた。

さて、禪師がいなくなり佐久がじろり寝しているといふ。意を決し

れんは口にした。

「春時どの、ごめんなさい」

春時はしばし黙つていたが、

「なにかやらかしたか」

と少し困つた表情で逆に問いかけた。

れんはあっけにとられ、そして肩を落とした。

（覚えていらっしゃらないのね）

言い争いを気に病んでいたのは自分だけだったらしく。これほど思い悩んだといつに。

「ええと」

説明をしようか。それも寝た子を起こして、わざわざ事を荒立てるようだ。

どうしたものかと答えあぐねてこるといふ、

「くふふ」

春時のかたわらでかみ殺したような笑いがおこつた。

床にころがつている佐久の脇腹に、春時が攻撃を加える。

「この、たぬき寝入りの枝め」

「くふ、うひやひや」

「なに笑つてゐる」

「くすぐるからだつ」

「そのまえに笑つたる」

「うひや、やめて、降参」

佐久は派手に身をよじつて逃げ、ぐるりと身を反転せらるや座つてひざに手を添える。

「姫さま、浴室でのぼせでちやつたんです」

「さつ、佐久どの、約束したのに」

れんが顔を真つ赤にして抗議する。

「姫さまごめんなさい黙つてるの無理でした」

無理なのはれんの方だ。その件の弁解はまったく考慮外であった。

「あのつ」

春時はれんの言葉を待たずに淡々と問い返した。

「佐久以外の、禅師さまや他の方に迷惑はかけてないのだろう」

「誓つて、迷惑はかけていません」

「なら、二つもの馬上みたく寝ぼけたのまで小言をいつ筋合いはな
いさ」

「いつも、ではありません!」

れんはむきになつて反論する。

それに春時はやる気のない大あくびで応じた。

「分かつたから早々に文書いて寝てくれ。俺は眠い。先に休む」
れんは無言でほおをふくらませた。

やはり春時とはうまくいかない、でもそれは春時どのが悪いのだ。
売り言葉に買い言葉どころか、からかつておきながら、面倒になつ
たらまともに取り合わないのだから。

日も暮れた屋戸の庭では蟋蟀ツチナカが互いに呼び合ひ、治癒をほびこす
室からは時折、苦吟が届く。異なる哀切な情緒をもたらす夜半の声。

それらに耳をかたむけつつ、れんはため息をついた。

あの木簡を禅師に渡すだけで、瀬雲を救うことができる。

今、筆を走らせんとする木簡はなにをもたらすだろう。

ただ、父に無事を知らせるだけでよいだろうか。思うに、春時は
家司の堅虫に会っているから、れんの無事は父も知っているだろう。
そこへあえて自らの筆になる文を送る必要があるのか。むしろ、継
母に居場所を知られるほうが危ういのではないか。

春時は送つて良いと判じたが。

「今一度、聞いてみましょう」

春時にも禅師にも。

「書く内容も、よくよく意見を聞いて、考えてからのほうが、よい

かもしません」

手元が暗くなってきたと思ったら、雲居の空に月が隠れてしまつたようだ。

それもあつて、れんは筆をそつと置いて灯火を消すと、ゆっくりと身を横たえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281c/>

荷葉の路

2011年1月4日01時55分発行